

一般社団法人日本健康・スポーツ教育学会

第9回 学術大会

講演集

統一テーマ

「健康・スポーツ・教育の連携による幼少年期からの生きがい創り」

メインテーマ

「新しい時代(Society5.0)に求められる生きがい・

ウェルビーイングの創出」

日時 令和5年2月26日(日)

会場 学校法人タイケン科学学園 日本ウェルネス保育専門学校

主催 一般社団法人 日本健康・スポーツ教育学会

Japanese Society of Health & Sport Education

共催 日本ウェルネススポーツ大学

公益財団法人 日本幼少年体育協会

大会長挨拶

「新しい時代(Society5.0)に求められる

生きがい・ウェルビーイングの創出」

柴岡 信一郎

(一般社団法人日本健康・スポーツ教育学会副理事長
日本ウェルネススポーツ大学副学長)



皆様、日頃より一般社団法人 日本健康・スポーツ教育学会へのご理解、ご協力を賜りまして心より感謝申し上げます。毎回、一貫して申し上げておりますが、平成 27 年 3 月に設立した本学会のミッションは「健康創り、スポーツ創り、教育創り」の 3 本の矢の相互関係を密にして、全ての人々の生涯にわたる「生きがい創り」に寄与することにあります。これを受けて、第 1 回大会より、統一テーマを「健康・スポーツ・教育の連携による幼少期からの生きがい創り」とし、その下で、社会の変化に対応して、毎回、特有のメインテーマを設定してきております。

2022 年度の第 9 回本学術大会はコロナ感染禍の長期化、2030 年の実現を目指す SDGs の国をあげての取り組み、ロシア・ウクライナ戦争といった人間の生きがい・ウェルビーイングに関わる社会的課題の解決に向けて共に探究したく、「新しい時代(Society5.0)に求められる生きがい・ウェルビーイングの創出」をメインテーマとしました。

新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大・長期化や、ソ連・ウクライナ戦争の勃発によって、社会は大きく変化することとなり、人々の生きがい・ウェルビーイング(well-being)が世界的に再熱し注視されるようになってきています。この世界的潮流は、SDGs(2015 年に国連が採択した「持続可能な開発目標」)の実現を目指す Society 5.0(Society 5.0 for SDGs)の人間中心社会においても重視されています。その新しい時代に対応したウェルビーイング実現のためには、多様な人材育成への投資を加速して、産学官の連携、大学教育改革の推進が必要です。学際領域の主体的な学修を通じてイノベーションを起こせる人材や新たな価値を創造できる人材、つまり、グローバル・リーダーとなりうる人材を多く輩出することが求められています。とりわけ、大学の役割として、日本経済団体連合会の提言「新しい時代に対応した大学教育改革の推進－主体的

な学修を通じた多様な人材の育成に向けてー」(2022年1月)に見られるように、地域や日本、世界に貢献することが急務です。

このような社会変化を踏まえて、本学術大会では、ウェルビーイングの潮流・創出に関しまして、兵庫県公立大学法人芸術文化観光専門職大学准教授の高橋伸佳氏に昨年に続き特別講演「ウェルビーイングの視点からの交流によるまちづくり」をお願い致しました。これを受けて、シンポジウム3題、ワークショップ1題、セミナー3題において、今後の「生きがい創り」に対応するための大学の在り方等に関して、ともに議論し共有して頂きます。

口頭発表としては、過去最高数の21演題となり、皆様の普段から努力されている研究テーマをご披露して頂きます。

本大会はコロナ禍ですが、何としても、人と人との繋がりを1日でも早く取り戻したく、対面形式を中心とし、一部にオンラインを取り入れて開催することとしました。

実り多い大会になりますよう、忌憚のないご意見を積極的にいただき、今後の活動の糧にして頂けますよう、よろしくお願い致します。

末筆ながら、今回のご講演、シンポジウム、ワークショップ、セミナー、口頭発表いただく皆様、大会準備および運営に携わっていただいた方々に心から感謝いたすとともに、大会の成功を心から祈念し、ご挨拶いたします。

多くの方々のご参加をお待ちしております。

<プロフィール>

日本ウェルネススポーツ大学副学長、学校法人タイケン学園副理事長

博士(芸術学)、日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程修了

専門; コミュニケーション論、メディア論

著書等; ・『報道写真と対外宣伝 15年戦争期の写真界』(日本経済評論社)

・『プレゼンテーション概論』(朝倉書店)

・『社会人になるためのキャリア情報リテラシー』(技術評論社)

・日本映像学会第45回全国大会「2016・2020年東京五輪を歩く」(2019年6月)

・「時代の先端にある共創成 ビジネス、政治、外交、アート」『クロストーク』8号、芸術メディア研究会(2022年9月)

他多数

目 次

大会長挨拶	2
学術大会 日程表	5
学術大会 プログラム	6
交通のご案内	12
学術大会 会場案内図	13
学術大会 運営・注意事項についてのご連絡	16
特別講演	19
セミナー	24
ワークショップ	34
シンポジウム	39
一般口演	55
学術大会 役員	104

学術大会 日程表

令和5年2月26日(日)

	801室(A会場) 講演・発表 (WELL-BEING領域)	802室(B会場) 講演・発表 (スポーツ・教育領域)	701室(C会場) 講演・発表 (教育・体育領域)	702室(D会場) 講演・発表 (生涯保健領域)
11:00 12:00	準備			
12:00 13:00	受付(9階)			
13:00	開会の辞 柴岡 三千夫 理事長 大会長挨拶 柴岡 信一郎 座長 大津 一義	A会場のZoom中継		
13:20	特別講演 50分 「ウェルビーイングの視点からの交流によるまちづくり」 高橋 伸佳(芸術文化観光専門職大学) 座長 大津 一義			
14:10				
5分	休憩			
14:15	セミナー1	セミナー2	セミナー3	ワークショップ1
40分	「持続可能で多面的なWell-beingの創出とマネークリニック」 ・吉田 倅子、角田 弘子	「新しい時代(Society 5.0)に向けて大学教育(文理融合教育)の在り方」 ・岩田 忠久	「基本的自尊感情を育む共有体験の教育実践～ICTの活用を視野に入れて～」 ・近藤 卓	「高齢化が進む地域におけるウェルビーイングへの取り組み～利根町の実践を通して～」 ・石田 良恵、小島 和彦、伊藤 義朗、大野 次男、布袋 哲朗
14:55				
5分	休憩			
15:00	シンポジウム1	シンポジウム2	シンポジウム3	
50分	「well-beingを踏まえたAIと人間の適切な関係に関する一考察－教育とスポーツを中心に－」 ・平山 実、平山 弘、大久保 英樹	「大学スポーツにおける運動部学生の生きがいづくり」 ・鈴木 隆広、杉町 マハウ、中宿 晃、坂本 希望	「平和教育の困難性」 ・工藤 美知尋、菅谷 幸浩	
15:50				
5分	休憩			
15:55	一般口演 [WELL-BEING領域] 座長 角田 弘子、平山 弘	一般口演 [スポーツ・教育領域] 座長 橋本 純一、富川 力道	一般口演 [教育・体育領域] 座長 渋谷 二三男、横山 典子	一般口演 [生涯保健領域] 座長 鈴木 勝彦、菌部 正人
45分	「ヒューマンライツとSDGs」 ・角田 弘子	「民族スポーツの改革実践と問題点－内モンゴルにおけるフットボールをめぐる議論を中心に－」 ・富川 力道	「コロナ禍におけるハイブリッド型講義の実践」 ・渡邊 真菜	「コロナ禍における高齢者の縦断的体力変化について－茨城県利根町「きんとれ会」参加者の体力測定結果から－」 ・菌部 正人
	ウェルビーイング時代におけるブランド価値の重要性 ・平山 弘	「スポーツ観戦空間論～well-beingの視点から～」 ・橋本 純一	「高等学校における授業方法と学力の変化に関する研究」 ・遠藤 駿之	「自治体の大学誘致の現状と課題－成功と失敗の要因－」 ・平山 実
	「生きがいとしてのコミュニケーション－林美美子の作品から見出す－」 ・ソコワ山下 聖美	「高校野球が幼少年に夢を提供するために～東京ドーム開催から幼少年に与えるインパクト～」 ・武井 克時	「「空」とは何か－「般若心経」の教え－」 ・尹 東燦	「前近代の「疫病」への施策(しさと)と現代の「パンデミック」のサイエンス」 ・鈴木 勝彦
16:40				
5分	休憩			
16:45	「文化活動を通じた生きがい～尾崎翠を中心に～」 ・野中 咲希	「高校陸上競技部部員の主体的取り組みの重要性～インターハイ総合優勝するまでの17年間の監督・指導の分析を通して～」 ・塚本 敏久	「動画による保育の見える化」 ・大竹 龍	「2022年オレゴン世界陸上報告－コロナ禍対応に視点をあてて－」 ・杉町 マハウ
45分	「「生きがい」としてのマンガについて－石ノ森章太郎作品を例として－」 ・伊藤 景	「コロナ禍における中学生の走力に関する研究」 ・本間 一輝	「高校生のスマホ依存と自覚症状に着目して～養護教諭として感じた生徒の様子から～」 ・齋藤 和江(Zoom)	「アニメ聖地巡礼による社会問題の解決～大洗の成功例より～」 ・西村 優斗
		「男子新体操の小学校低学年における俊敏性と経時的変化」 ・藤井 祥己		
17:30				
5分	休憩			
17:35	閉会の辞			
17:40	武井 克時 学部長			
17:45	片付け			

学術大会 プログラム

(令和 5 年 2 月 26 日 (日) 会場 日本ウェルネス保育専門学校)

【受付】(9 階)

12:00-13:00

【開会式】A会場 (8 階 801 教室)

13:00-13:20 総合司会 大津 一義 (日本ウェルネススポーツ大学)

開会の辞 柴岡 三千夫 (一般社団法人 日本健康・スポーツ教育学会 理事長
日本ウェルネススポーツ大学 学長)

大会長挨拶「新しい時代 (Society5.0) に求められる生きがい・ウェルビーイング
の創出」

柴岡 信一郎 (一般社団法人 日本健康・スポーツ教育学会 副理事長
日本ウェルネススポーツ大学 副学長)

【特別講演】A会場 (8 階 801 教室)

13:20-14:10

『ウェルビーイングの視点からの交流によるまちづくり』

演者 高橋 伸佳 (芸術文化観光専門職大学)

座長 大津 一義 (日本ウェルネススポーツ大学)

(14:10-14:15 休憩)

【セミナー】A会場 (801教室)、B会場 (802教室)、C会場 (701教室)

14:15-14:55

14:15-14:55 セミナー1 (A会場 8階 801教室)

『持続可能で多面的なWell-beingの創出とマネークリップレクチャー』

演者 吉田 倅子 (あいである)

角田 弘子 (日本ウェルネススポーツ大学)

14:15-14:55 セミナー2 (B会場 8階 802教室)

『新しい時代 (Society 5.0) に向けて大学教育 (文理融合教育) の在り方』

演者 岩田 忠久 (日本ウェルネススポーツ大学)

14:15-14:55 セミナー3 (C会場 7階 701教室)

『基本的自尊感情を育む共有体験の教育実践～ICTの活用を視野に入れて～』

演者 近藤 卓 (日本ウェルネススポーツ大学)

【ワークショップ】D会場（702教室） 14:15-14:55

14:15-14:55 ワークショップ1（D会場 7階 702教室）

『高齢化が進む地域におけるウェルビーイングへの取り組み
～利根町の実践を通して～』

演者	石田 良恵	（日本ウェルネススポーツ大学）
	小島 和彦	（TONEウェルネスきんとれ会）
	伊藤 義朗	（TONEウェルネスきんとれ会）
	大野 次男	（TONEウェルネスきんとれ会）
	布袋 哲朗	（利根町役場政策企画課）

（14:55-15:00 休憩）

**【シンポジウム】A会場（801教室）、B会場（802教室）、C会場（701教室）
15:00-15:50**

15:00-15:50 シンポジウム1（A会場 8階 801教室）

『well-beingを踏まえたAIと人間の適切な関係に関する一考察
ー教育とスポーツを中心にー』

シンポジスト

「基調講演」	座長	平山 実	（日本ウェルネススポーツ大学）
「スポーツへのAI活用に関する研究」			
大久保 英樹（芝浦工業大学）			
「Well-being時代におけるAIと学校教育の動向について」			
平山 弘（阪南大学）			

15:00-15:50 シンポジウム2（B会場 8階 802教室）

『大学スポーツにおける運動部学生の生きがいづくり』

シンポジスト

「基調講演」	座長	鈴木 隆広	（日本ウェルネススポーツ大学）
「陸上競技部の事例」		杉町 マハウ	（日本ウェルネススポーツ大学）
「バスケットボール部の事例」		中宿 晃	（日本ウェルネススポーツ大学）
「野球部の事例」		坂本 希望	（日本ウェルネススポーツ大学）

15:00-15:50 シンポジウム3 (C会場 7階 701教室)

『平和教育の困難性』

シンポジスト

「日本の平和主義の曖昧性が何故生じたのか」

座長 工藤 美知尋 (日本ウェルネススポーツ大学)

「公民科教育における平和主義と安全保障—政治学からの批判的検討—」

菅谷 幸浩 (亜細亜大学)

(15:50-15:55 休憩)

【一般口演】 A会場 (8階 801教室)、B会場 (8階 802教室)、
C会場 (7階 701教室)、D会場 (7階 702教室)

15:55-17:30

(* 演者10分発表、5分質疑応答)

<WELL-BEING領域> A会場 (8階 801教室) 15:55-17:15

座長 角田 弘子 (日本ウェルネススポーツ大学)

平山 弘 (阪南大学)

15:55-16:10

A-1 ヒューマンライツとSDGs

○角田 弘子 (日本ウェルネススポーツ大学)

16:10-16:25

A-2 ウェルビーイング時代におけるブランド価値の重要性

○平山 弘 (阪南大学)

16:25-16:40

A-3 生きがいとしてのコミュニケーション—林芙美子の作品から見出す—

○ソコロワ山下 聖美 (日本大学芸術学部)

(16:40-16:45 休憩)

16:45-17:00

A-4 文化活動を通じた生きがい—尾崎翠を中心に—

○野中 咲希 (日本大学)

17:00-17:15

A-5 「生きがい」としてのマンガについて—石ノ森章太郎作品を例として—

○伊藤 景 (日本大学芸術学部文芸学科)

(17:15-17:35 休憩)

＜スポーツ・教育領域＞ B会場 (8階 802教室) 15:55-17:30

座長 橋本 純一・富川 力道 (日本ウェルネススポーツ大学)

15:55-16:10

B-1 民族スポーツの改革実践と問題点

ー内モンゴルにおけるブフ競技規則をめぐる議論を中心にー

○富川 力道 (日本ウェルネススポーツ大学)

16:10-16:25

B-2 スポーツ観戦空間論～well-beingの視点から～

○橋本 純一 (日本ウェルネススポーツ大学)

16:25-16:40

B-3 高校野球が幼少年に夢を提供するために

～東京ドーム開催から幼少年に与えるインパクト～

○武井 克時 (日本ウェルネススポーツ大学)

(16:40-16:45 休憩)

16:45-17:00

B-4 高校陸上競技部部員の主体的取り組みの重要性

～インターハイ総合優勝するまでの17年間の監督・指導の分析を通して～

○塚本 敏久 (日本ウェルネススポーツ大学)

17:00-17:15

B-5 コロナ禍における中学生の走力に関する研究

○本間 一輝 (日本ウェルネススポーツ大学東京)

17:15-17:30

B-6 男子新体操の小学校低学年における俊敏性と経時的変化

○藤井 祥己 (日本ウェルネススポーツ大学)

(17:30-17:35 休憩・A会場 (8階 801教室) へ移動)

＜教育・体育領域＞ C会場（7階 701室） 15:55-17:15

座長 渋井 二三男・横山 典子（日本ウェルネススポーツ大学）

15:55-16:10

C-1 コロナ禍におけるハイブリッド型講義の実践

○渡邊 真菜（日本ウェルネス歯科衛生専門学校）

16:10-16:25

C-2 高等学校における授業方法と学力の変化に関する研究

○遠藤 駿之（日本ウェルネス高等学校）

16:25-16:40

C-3 「空」とは何か―「般若心経」の教え―

○尹 東燦（日本ウェルネススポーツ大学）

(16:40-16:45 休憩)

16:45-17:00

C-4 動画による保育の見える化

○大竹 龍（ONE ROOF 江東区白河かもめ保育園）

17:00-17:15

C-5 高校生のスマホ依存と自覚症状に着目して

～養護教諭として感じた生徒の様子から～

○齋藤 和江（日本ウェルネス宮城高等学校）

(17:15-17:35 休憩・A会場（8階 801教室）へ移動)

<生涯保健領域> D会場 (7階 702室) 15:55-17:15

座長 鈴木 勝彦・菌部 正人 (日本ウェルネススポーツ大学)

15:55-16:10

- D-1 コロナ禍における高齢者の縦断的体力変化について
ー茨城県利根町「きんとれ会」参加者の体力測定結果からー
○菌部 正人 (日本ウェルネススポーツ大学)

16:10-16:25

- D-2 自治体の大学誘致の現状と課題ー成功と失敗の要因ー
○平山 実 (日本ウェルネススポーツ大学)

16:25-16:40

- D-3 前近代の「疫病」への施策(しさく)と現代の「パンデミック」のサイエンス
○鈴木 勝彦 (日本ウェルネススポーツ大学)

(16:40-16:45 休憩)

16:45-17:00

- D-4 2022年オレゴン世界陸上報告ーコロナ禍対応に視点をあててー
○杉町 マハウ (日本ウェルネススポーツ大学)

17:00-17:15

- D-5 アニメ聖地巡礼による社会問題の解決〜大洗の成功例より〜
○西村 優斗 (日本ウェルネススポーツ大学)

(17:15-17:35 休憩・A会場 (8階 801教室) へ移動)

【閉会式】A会場 (8階 801室)

17:35-17:40

閉会の辞 武井 克時 (日本ウェルネススポーツ大学 学部長)

17:45 終了

交通のご案内

【所在地・連絡先】

日本ウェルネス AI・IT・保育専門学校

〒101-0051

千代田区神田神保町 1-52-4

TEL 03-3219-3271 FAX 03-3293-3782

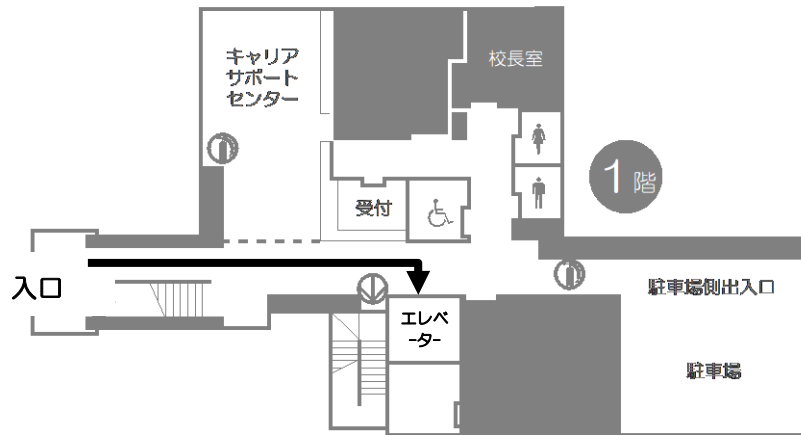


【交通機関のご案内】

- 「神保町駅」(地下鉄各線)、A5出口、徒歩4分
- 「水戸橋駅」(JR線)、東口出口、徒歩5分
- 「御茶ノ水駅」(JR線)、御茶ノ水橋口、徒歩10分

学術大会 会場案内図

1階（入口）



9階（受付、クローク）



8階（A会場：801教室、B会場：802教室）



7階（C会場：701教室、D会場：702教室）



5階（座長・演者打合せ室：501教室）



4階（座長・演者打合せ室：401 教室、スタッフ控室：402 教室）



3階（来賓控室：301 教室、学会長・特別講演者控室：302 教室）



学術大会 運営・注意事項についてのご連絡

参加者の皆様へ

1) 受付時間と場所

受付は、12時より開始しますのでお早めにお願ひ致します。

受付は9階学生ラウンジで行いますので、1階入り口を入りましたら、直ぐに右側にあるエレベータで9階に向かってください。

2) 受付手続き

● 当日参加者の方

- ・ 「当日参加者」受付にて「参加申込書」に必要事項を記入ください。
- ・ 参加費（一般：2,000円、学部生・大学院生：500円）を添えてお申込みください。
- ・ ネームシート、講演集をお渡しします。
- ・ 領収書が必要な方はお申し出ください。
- ・ 会場内では、ネームシートを必ずご着用ください。

● 来賓・後援・協賛の方

- ・ 「来賓・後援・協賛」受付にてネームシートをお受け取りください。
- ・ 受付後、来賓控室（3階301室）にご案内致します。

● 学生参加者の方

- ・ 確認のために学生証もしくは、そのコピーを受付でご提示ください。

● 日本幼年体育協会の「特別更新講習」参加の方

- ・ 「幼体協」受付にて手続きをしてください。特別講演が済み次第、1階キャリアサポートセンターにて講習を受講ください。

● 講演集のみ購入希望の方

- ・ 講演集のみご希望の方には、1冊1,000円で販売を予定しています。

3) コロナ感染予防対策

- ・ マスクを着用ください。
- ・ 会場入り口に用意している消毒液による消毒、検温を実施して下さい。
- ・ 人との距離を保つために、会場では机と椅子をセットで設置していますのでご使用ください。
- ・ 換気にご協力ください。

4) クローク 9階受付奥に用意しています。

5) 休憩所

9階受付の周辺をご利用ください。また、A～D会場の各廊下には3人がけソファを2台用意しています。

6) 飲食、喫煙について

- ・ 会場内では、飲み物の持ち込みは許可されています。9階には自動販売機を設置しています。
- ・ A～D会場での食事はご遠慮ください。
- ・ 禁煙にもご協力ください。

7) ゴミの持ち帰りについて

ご自身で出されたゴミは、施設内のゴミ箱へは決して捨てず、各自お持ち帰りください。

8) 車での来場はご遠慮ください。

講演者・発表者・座長の方へ

1) 受付・控室・所要時間

受付は12時より9階の「演者・座長」受付でお願いします。

- セミナー演者、ワークショップ演者、シンポジウム演者

受付後、座長・演者等打ち合わせ室（4階401室・5階501室）をご活用ください。セミナー・ワークショップの時間は40分（紹介等を含む）、シンポジウムの時間は50分（紹介等を含む）です。時間を厳守ください。

- 一般口演

座長・演者等打ち合わせ室（4階401室・5階501室）をご活用ください。

一般口演の発表時間10分、質疑応答5分（計15分）です。口演終了の1分前に第1鈴、終了時に第2鈴、質疑応答終了時に第3鈴を鳴らしますので、時間を厳守願います。

2) 次演者席

一般口演では、次演者席を用意しておりますので、ご自身の発表10分前になりましたら、ご着席ください。

3) パワーポイント使用について

12時半には必ず受付を済ませ、ご自身が登壇する会場に設置されているパソコンにパワーポイントデータを入れてください。

パソコンの操作は、ご自身ないし共同演者等で行ってください。

4) 試写を希望の方は、座長・演者等打ち合わせ室（4階401室・5階501室）をご利用ください。

5) 配布資料について

配布資料のある方は、事前に印刷して当日お持ち頂き、各控室にて担当者にお渡しください。部数は各自でご判断ください。なお、A会場収容人数約50人、B～D会場収容人数約40人を予定しています。

6) 進行について

- ・ 担当時間の進行は、座長に一任しておりますので、必ず時間内に終了する

ようにご協力をお願い致します。

- ・ 時間内に質疑が終了しない場合は、座長の方から「時間ですので打ち切ります。」とお伝え頂きます。時間厳守を優先致しますのでご了承下さい。
- ・ 質疑応答終了後、さらに質問がある方は、学会事務局へのメールにて対応いたしますので、事務局にご連絡ください。

7) Zoom 利用発表者への注意事項 (C会場のみ)

- ① 事前に Zoom をご自身の端末にインストールのうえ、ご参加下さい。
- ② 参加時、ホスト側で参加者の皆さまの音声をミュートに設定させて頂きます。座長から紹介がありご自身の発表の時間になりましたら、ご自身で音声のミュートを解除するとともに、「画面の共有」をして、発表をお願い致します。
- ③ パワーポイント等の資料等は、フルスクリーンモード等にして参加者が見やすいようご配慮ください。
- ④ 発表終了時には、必ず「画面の共有」を停止して下さい。

その他、何かございましたらスタッフまで、お気軽にお声かけください。宜しくお願ひ致します。

特別講演

13:20-14:10 (50分)

A会場 (8階 801教室)

「ウェルビーイングの視点からの 交流によるまちづくり」

演者 高橋 伸佳 (芸術文化観光専門職大学 准教授)

座長 大津 一義 (日本ウェルネススポーツ大学)

ウェルビーイングの視点からの交流によるまちづくり

○高橋 伸佳^{*1}

^{*1} 兵庫県公立大学法人芸術文化観光専門職大学

Key words: ウェルビーイング (well-being)、交流、まちづくり

1. はじめに

「ウェルビーイング (well-being)」は、1946年のWHO(世界保健機関)憲章における健康の定義で言及された「幸福」「健康」を意図する古くからある概念である。ウェルビーイングは多様な学問、分野で活用されているだけに定義や解釈も様々なものが存在する。実際、国連サミットで採択された持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)の「3」において「GOOD HEALTH AND WELL-BEING」という目標が掲げられているが、「すべての人に健康と福祉を」という日本語訳が付けられている。

このように、ウェルビーイングは広義な意味での健康を意図して広く活用されるものの、大別すると①心身の機能に関する「医学的ウェルビーイング」、②一時的・主観的な感情に関する「快樂主義的ウェルビーイング」、③心身の潜在能力を発揮し、周囲との関係の中でイキイキとした状態を指す「持続的ウェルビーイング」があるとされる。現在は3番目の概念のように持続的、包括的にウェルビーイングを捉えようという動きが世界中の潮流となっており、ポジティブ心理学における PERMA という理論に基づく定義が広く知られている。具体的には、楽しみ、恍惚感、心地よさ、温かさなどで構成される「ポジティブ感情」、他のことを全て忘れ集中している状態(没頭・没入・熱中)である「エンゲージメント」、他者とのつながりや関係性が人生に意味や目的を与える「意味・意義」、自分のことを気にかけてくれる人がいるなど他者との「関係性」、そのものの良さのために追求される「達成感」によって、「本当に幸せにしてくれるもの」を問うというものである。このウェルビーイングは、2000年頃から急速に研究が進み国際的には複数の研究分野の鍵概念となってきたが、新型コロナウイルス感染症の拡大と長期化により、このような新たな価値観に対する議論に拍車をかけることになった。

2. 国内におけるウェルビーイングによる政策・まちづくりと本稿における交流の概念

国内の自治体でもウェルビーイング政策が始まっている。筆者が関わった「ウェルネス拠点」として新たなまちづくりを計画していた熊本県荒尾市では、「スマートシティの取組みと合わせ『幸福』の要素も包含した『ウェルビーイング(心身ともに健康で幸せな状態)』の概念に進化させ、さらに、人間中心の Society5.0 の概念も掛け合わせることで、人と人との交流とテクノロジーを通じて時代を先駆ける価値を共創しながら、住民や訪問者など、誰もが安全に幸せを感じて心身ともに良好な状態を持続できる都市を目指す。」と定義し、2019年に『荒尾ウェルビーイングスマートシティ』という名称でのまちづくりが始まっている。富山県では2022年2月に発表した「富山県成長戦略」の中で、「真の幸せ(ウェルビーイング)戦略」を打ち出し、知事政策局成長戦略室に「ウェルビーイング推進課」が設置された。一方、同年6月に発表された全国どこでも誰もが便利で快適に暮らせる社会を目指す「デジタル田園都市国家構想基本方針(内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局)」において、「構想の実現に向けた価値観の共有」の部分にウェルビーイングの概念が据えられ、「Well-being 指標」による政策・評価を実行する形で、まちづくりの上位概念としてウェルビ

ーイングを活用する動きとなっている。

今回の講演テーマに掲げている「交流」とは、具体的には「観光」のことを指している。わが国の観光立国推進基本法で「健康の増進、潤いのある豊かな生活環境の創造等を通じて国民生活の安定向上に貢献する」と国民の QOL の向上の一つとして位置付けていることに加え、「地域の広範な産業に対する年間 55.8 兆円もの生産波及効果や 456 万人もの雇用誘発効果を有しており、人口減少・少子高齢化の急速な進展に直面している我が国において、観光を通じて国内外の人口の交流を活発化させることにより、地方創生を実現していくことは極めて重要(観光庁「アフターコロナ時代における地域活性化と観光産業に関する検討会)」であるとするなど、全国共通の取り組み、且つ全国共通の交流資源であると解釈できるためである。そのように考えると観光を交流の手段だとの認識を深め、ウェルビーイング向上に活用していくというのは重要な視点であるともいえる。

3. 兵庫県豊岡市での交流を活用したウェルビーイングへの挑戦

筆者は現在兵庫県豊岡市(以下、同市)に居住している。豊岡市は兵庫県の北東部に位置する1市5町(豊岡市、城崎町、竹野町、日高町、出石町、但東町)の合併でできた人口 77,489 人(令和2年国勢調査)のまちである。約 8 割が森林であり、豊富な自然環境に恵まれ農林水産業、観光業が盛んである。ただ、少子高齢化、独居世帯、核家族化が進行しているほか、高校卒業時に約 8 割の若者が同市を離れたのち 20 代での回復率は 40%程度にとどまるなど、全国の地域同様の課題が存在している。

同市は「小さな世界都市-Local & Global city-」を標榜している。そのビジョン推進の一貫として観光施策である「豊岡市大交流ビジョン」を掲げている。その大交流ビジョンにおいては「観光に関わる主体を豊岡市民、豊岡市を訪れる多様な訪問者、豊岡市の幅広い産業とし、観光の核となるものを豊岡の「モノ」や「食」の消費から、「豊岡のローカル」への憧れや共感へと大きく捉え直すというコンテキスト転換が実行され現在に至っている(図1)。中心的な産業の一つである「観光」を「交流」と捉え直し、対話とコミュニケーションを生み出す観光政策を打ち出している。その一環として、共感や交流を軸に旅先を選び・楽しむ旅行形態「豊岡コミュニティ・ツーリズム事業」が計画されたものである。

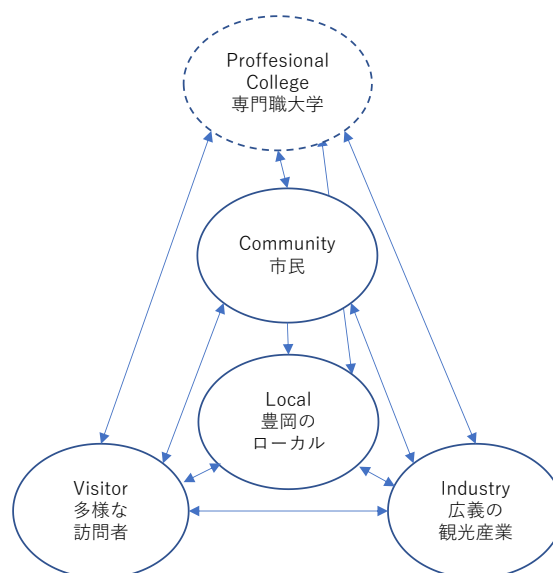


図1 豊岡市大交流ビジョンにおける新たな観光の捉え方と新たなステークホルダー

こうした中、豊岡市、および筆者らは2021年に「ヘルス&スポーツツーリズム事業」の検討に乗り出した。コロナ後を見据えた持続可能なヘルスツーリズム(健康観光)の応用領域として、「アウトドア&スポーツ」、「リトリート&ビューティー」、「ワーケーション&プレジャー」の分野を想定し、事業者、市民とともにこの世界観について議論してきた。当初は狭義な意味での健康を意図していたが、最終的に健康やスポーツなどの表記が全くない「ネオカル TOYOOKA カラダと話し、ココロに聞いて、出会うまち。」という新たなライフスタイルを掲げることとなった。具体的には以下の3点の領域である(図2)。

- ・アウトドア&スポーツ:自己改革や成長体験を意図する「挑戦と成長」
- ・リトリート&ビューティー:自然の恵みとアートの聖地としての機能を活用したセラピーを意図する「癒しと健康」
- ・ワーケーション&プレジャー:様々なアーティストたちが集まり、滞在するコミュニティとしての機能を活かした「芸術と創造」

これらの取組みは、ウェルビーイングの発想を起点に、参加者やサービス提供者にとって幸福な状態がどのようにしたら創出できるのかという観点を意識している。この結果、単なる観光事業でもなく、健康増進活動でも、文化・スポーツ活動だけでもない領域を超えた体験カルチャーを市民、来訪者に提供していく点が特徴となっている。「体験旅行・観光」や「プログラム」としていないのは本取組みを「文化」にまで発展させていくという思いが込められている。また、地域の視点でみると、市民はサービスの受益者にもなり得る半面、自分の得意分野を活かしたサービス提供者になる可能性と機会づくりに配慮している。いわば地域社会の幸せの形、新たなイキイキとした交流の場を創出することを目的としている。こうした取組みを具現化していくため、行政側も部署を横断した体制が組まれることとなった(図3)。



図2 ネオカル TOYOOKA のブランドロゴと領域(ライフスタイル)の関係性

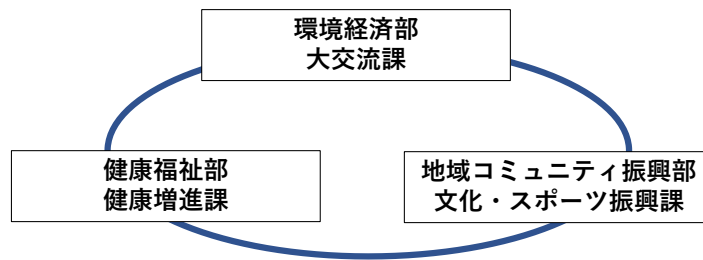


図3 ネオカル TOYOOKA の推進のための行政側(豊岡市)としての体制

事業の推進においても特徴がある。事業に参加したい事業者や市民に対してオープンソース型のような形で「ブランドマネジメント方針」、「プログラム開発基準」を公開し、誰でも自由にプログラムを企画・開発できるように公開している。これは観光としてのビジネスだけではなく、あらゆる市民活動を取組むことを企図しているための工夫である。また、プログラムについては、一定基準を満たせば誰もが自由に情報・販売プラットフォーム(ネオカル LP)に情報を掲示し、販売することができるなど持続的にプログラムが生まれ、活動できる仕組みを採用している。

ウェルビーイングによる明確な仕組み化やプログラム化は、生きがいの機会創出や幸せで健康で幸福な生き方のモデルになるばかりではなく、地域の限りある資源を有効に活用することにもつながることが期待される。

引用文献

高橋伸佳(2022)「“Tourism×ウェルビーイング(well-being)“～ヘルスツーリズムの進化～」
2022.8.22x Tourism(クロス・ツーリズム)JTB 総合研究所

高橋伸佳 TAKAHASHI Nobuyoshi

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科博士後期課程単位取得満期退学、明治大学専門職大学院グローバル・ビジネス研究科修了。大手化粧品会社を経て、JTBグループに入社。同社における調査・研究、事業開発、経営企画・経営戦略などの業務を担当。特に、健康・医療、スポーツをテーマとした国家施策の推進や新規事業開発に注力してきた。同社内に2005年にヘルスツーリズム研究所、2006年に日本ヘルスツーリズム振興機構、2012年にジャパン・メディカル&ヘルスツーリズムセンターを立ち上げた。2021年より現職に就任。近年の公職として、環境省「国立公園満喫プロジェクトにおける自然体験コンテンツのガイドラインに係る作成等業務」検討会委員(2020年)、観光庁「地域の観光資源の磨き上げを通じた域内促進に向けた実証事業」専門家(2021年)、東京商工会議所「健康づくり・スポーツ振興委員会」委員(2016年～2021年)、観光庁「令和4年度地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品創出事業」専門家(2022年)、地域総合整備財団「令和4年度地域再生マネージャー」(2022年)、スポーツ庁「令和4年 Sport in Life 公募モデル事業」審査員(2022年)、兵庫県豊岡市「ネオカル TOYOOKA 推進協議会」会長(2022年～)等を歴任。

現在は、株式会社JTB 総合研究所客員研究員ヘルスツーリズム研究所長、特定非営利活動法人日本ヘルスツーリズム振興機構業務執行担当理事、日本観光経営学会理事なども兼務している。

セミナー

14:15-14:55 (40分)

セミナー1 A会場 (8階 801教室)

『持続可能で多面的なWell-beingの創出とマネークリップレクチャー』

演者 吉田 倅子 (あいである)
角田 弘子 (日本ウェルネススポーツ大学)

セミナー2 B会場 (8階 802教室)

『新しい時代 (Society 5.0) に向けて大学教育 (文理融合教育) の在り方』

演者 岩田 忠久 (日本ウェルネススポーツ大学)

セミナー3 C会場 (7階 701教室)

『基本的自尊感情を育む共有体験の教育実践～ICTの活用を視野に入れて～』

演者 近藤 卓 (日本ウェルネススポーツ大学)

セミナー1 持続可能で多面的な Well-being の創出と マネークリップレクチャー

○吉田 倅子*1、角田 弘子*2

*1公益財団法人あいである、*2 日本ウェルネススポーツ大学

キーワード:ソーシャルスキル、社会的養護、子どもの自立支援事業

【目的】

公益財団法人あいであるは「児童養護施設ⁱで養育されている子ども」の自立支援を行っている。社会的養護の下で暮らす子どもは、お金の管理や心構え、契約手続きなど社会人として必要なスキルを学ぶ機会がないまま 18 歳で児童養護施設などから退所し、社会で自活することがほとんどである。未熟なまま施設を退所せざるを得なかった要社会的養護児が金銭的トラブルに陥らないよう、不足している社会的スキルを学び、社会適応力をつける機会として、お金の管理や生活設計について学ぶオリジナル教材「マネークリップ」を開発し、生活費やお金の管理、コミュニケーションの仕方を学べるレクチャーを行い普及を図る。

【方法】

対 象:児童養護施設で養育されている子どもや支援関係者

※今回は日本ウェルネススポーツ大学の学生 20 名

手続き:カレンダーの日付をすごろくのマスに見立て、サイコロを振って月末のゴールを目指す。止まるマスごとに引くカードには、日常生活で起こりうる出費、アクシデント、社会生活の中で判断が必要な事柄が記載されている。

参加した大学生には、社会的養護児並びにその支援関係者に行うレクチャーであることについて詳細説明はしていない。

内 容:オリジナル教材「マネークリップ」は手札とカレンダーを用い、すごろくの要領でゲームを展開する。手札には実際に起こりうる日常生活の問題などが取り上げられており、進行者と参加者で会話をしながら、ゲームを進行する。



図 1 カードの図柄とマネークリップレクチャーの様子

【結果】

トランプゲームのように進行するので、積極的にゲームに参加可能である。

会話の中から、「役立つ情報を得られる」や「日常の基本的な金銭管理を理解できた」という反応があった。

【考察】

2022年4月の改正民法施行により、成人年齢が20歳から18歳へと引き下げられた。これに伴い、18歳でも親の同意なしに金融取引、携帯電話、クレジットカードやローンなどの契約ができるようになった。一方で「未成年者取消権」が適応されなくなるため、様々なトラブルが懸念されている。児童養護施設から自活する子どもの現状として、児童養護施設で暮らす子どもは、社会で新生活を始める準備もなく、金銭的にも乏しい後ろ盾の中、18歳になると、自活しなくてはならない。親からの支援もなく、非正規雇用で自分の生活費を稼ぎ、自立した生活を送るのは容易ではない。

さらに、自身の出自や育成環境に対するコンプレックスから社会になじみにくく孤立しやすい傾向があり、トラブルに巻き込まれても相談する相手もなく、生活が立ち行かなくなってしまうケースも散見される。しかし、このような子どもに対する支援やアフターケアサポートは十分に行われていないのが現状である。

金融広報中央委員会が18歳以上を対象に実施した2022年の「金融リテラシー調査」ⁱⁱでは、家計管理や生活設計についての授業などの金融教育については、「行うべき」との意見は71.8%、その中で実際にこうした「金融教育を受けた」と認識している人の割合は7.9%と少数である。

あいであるでは、平成29年から支援を開始し、令和4年までに45団体にレクチャーを提供した。マネークリップは誰でも気軽に参加可能なゲームであり、ゲームの中でお金の管理、コミュニケーションの仕方を学ぶと同時に、参加者同士が他者との違いを知り、受け容れるという多様性を学ぶことが可能である。マネークリップというゲームを通して、今後の自分自身の生活設計を考える一助となることが期待される。

【まとめ】

骨太方針2022年の経済財政運営と改革の基本方針におけるWell-beingの記述は、第4章 中長期の経済財政運営の中の「経済社会の活力を支える教育・研究活動の推進」に見られる。その中で、多様な子どもたちの特性や少子化など地域の実情等を踏まえ、誰一人取り残さず、可能性を最大限に引き出す学びを通じ、個人と社会全体のWell-beingの向上を目指すと記載されている。

また、SDGsの目標であるGoal3では、well-beingという言葉が採用され、身体的な健康だけではなく、社会的な問題に触れる機会を持ち、多面的に学ぶ機会を得ることで、well-beingの創出が期待されている。

マネークリップレクチャーは、日常生活に直結した問題に触れる機会を提供できるツールであり、今後も児童養護施設で養育されている子どもを中心に普及していきたい。

ⁱ 児童養護施設とは、様々な理由で生まれた家庭で生活することが困難だと判断された子どもを養育する施設。入所対象者は、1歳以上18歳未満の幼児（満1歳から、小学校就学の始期に達するまでの者）及び少年（小学校就学の始期から、満18歳に達するまでの者）である。場合によっては20歳まで延長できる。乳児（1歳未満の者）はいったん乳児院への入所となる。

ⁱⁱ 金融広報中央委員会が、わが国の個人の金融リテラシー（お金の知識や判断力）の現状を把握するために、実施するものである。調査概要は、調査実施期間：2022年2月25日（金）～3月14日（月）、調査対象：全国の18～79歳の個人30,000人、調査方法：インターネット・モニター調査。調査内容は、①金融知識・判断力と②行動特性・考え方等に関する設問から構成されている。

セミナー2 新しい時代(Society 5.0)に向けて 大学教育(文理融合教育)の在り方

○岩田 忠久*¹

*¹日本ウェルネススポーツ大学

キーワード: Society 5.0、大学教育改革、文理融合教育

【はじめに】

2015年、我が国の科学技術政策として第5期科学技術基本計画において、『世界に先駆けた「超スマート社会」の実現(Society 5.0)』が提言された。2022年5月には、内閣総理大臣を議長とする教育未来創造会議が「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について(第一次提言)」を発表した。提言において『大学学部・大学院を通じた文理融合教育の推進』が具体的方策の一つとして示された。現在、複数の大学が文理融合教育を推進している中、日本ウェルネススポーツ大学において、新しい時代(Society 5.0)に向けての文理融合教育の在り方について議論する。

1. 新しい時代(Society 5.0)に求められる人材

Society 5.0は、サイバー空間(仮想空間)とフィジカル空間(現実空間)を高度に融合させたシステムにより実現する。その先端技術をあらゆる産業や社会生活に取り入れ、経済発展と社会的課題の解決を図り、最終的には人々のQOL(生き甲斐)向上を目指している。Society 5.0が人間中心の社会と言われる所以である。

知識の新旧が加速的に変化し、ビッグデータ化する社会にあつては、人々には科学的に問題・課題解決できる能力が求められる。加えて、地球規模から地域社会が抱える社会的課題は学際的であるので、その解決に当たっては、ものの見方、考え方、学び方を身につけ、新しい社会の仕組みや価値を創出できる能力が求められる。

2. 文理融合教育の意義・必要性

1991年の大学設置基準の大綱化を契機に、日本の大学では専門教育の充実が進められてきた。専門教育は高度に専門的な知識技能を修得するために不可欠である。一方で、今日のように、より複雑化する社会的問題を多角的に解決するため、一つの専門領域を修学するだけでなく、基盤となる複数の学問をバランスよく修学することが求められる。

その際、単に文系、理系の垣根なく学科を修学するだけではなく、必要な学科を修学することが重要になってくる。例えば、あるシステムの開発するにあたっては、マーケティング結果を分析できる知識も、またシステムの運用に関連する法令等の知識も必要である。このように、関連する学科を幅広く修学することが文理融合教育の意義である。

3. 日本の大学における文理融合教育の推進状況

2017年以降、複数の大学で文理融合教育について取り組み、学部を新設している。

表1に一部の大学の新設された学部を、表2及び図1は、「共創学部」のカリキュラムの一部と履修モデルの一例である。これらの例に見られるように、幅広く、かつ多数の科目が展開され、学生はそれらの科目を履修しつつ最終的には卒業研究の中に、多数の科目で履修したものが取りこむことになる。

学生が履修科目の選定をするにあたっては、研究の対象や研究の幅を認識して、履修すべき科目を見極めなければ、本当に必要な科目を履修できなかつたり、研究に関係の薄い科目を履修してしまつたりする可能性がある。一方、各科目を担当する教員においては、学生の研究対象までも考慮した授業の展開は難しいと考える。

これらの課題を克服するには、個々の学生に対して、早いタイミングで研究の対象や範囲を認識させ、それぞれに応じた履修プランの作成を指導することが必要となると考える。

表1 文理融合教育の新設学部(一例)

学部	狙い・特徴
データサイエンス学部	ビッグデータを処理・分析し、新たな価値を見出す
都市科学部	都市について科学的に取り組み、都市の未来に挑戦
共創学部	環境や食糧、人権、経済的格差などの課題を自ら見つけ、解決
国際情報学部	社会に受容される情報サービスや情報政策を実現
文理融合学部	経営学部と基盤工学部を統合、経営・地域社会・人間情報工学の3学科体制

(出典:滋賀大学、横浜国立大学、九州大学、中央大学、東海大学のHP)

表2 共創学部のカリキュラム(一部を抜粋)

科目の区分		科目数	科目(一部を抜粋)
基幹教育	言語文化	75	英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語 等
	文系ディシプリン	15	哲学・思想、歴史学、地理学、社会学、教育学 等
	理系ディシプリン	58	情報科学、プログラミング、微分積分学、数理統計学 等
	総合	50	現代企業分析、現代経済事情、医療倫理学 等
専攻教育	共通	20	フィールド調査法、データサイエンス、データアナリティクス 等
	人間・生命	15	生理学、遺伝子学、生命倫理、生命情報科学 等
	人と社会	18	異文化とコミュニケーション、国際福祉論、国際政治学 等
	国家と地域	13	日本経済史、国際関係論、地域史、開発経済学 等
	地球・環境	17	大気海洋科学、地盤学と災害、環境保全・再生 等

(出典:九州大学HP)

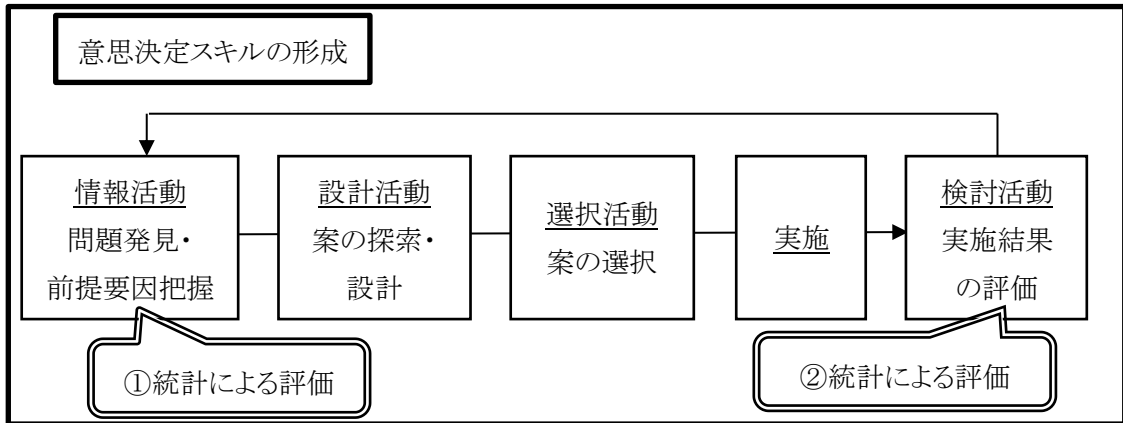


図3 統計学の各種の検定

①「問題発見・前提要因把握」における統計による評価(検定)

最高血圧の平均値：男女差			(問題)
	男性	女性	表に示す血圧測定結果において、男女の最高血圧の分散に差はあるか。平均測定値に男女差はあるか
人数	60	100	(解答)
平均値	156.4	164.1	男女の分散に差はない(F検定の結果)
標準偏差	27.2	27.1	男女の平均測定値に差はない(T検定の結果)

職員の健康保険加入と肥満度分布					(問題)
	肥満	普通	痩せ	合計	表は、会社での特定健診受験者 200 名の結果と当該会社の健康保険の加入状況である。この会社の問題を見いだせ。
特定健診受験者	65	110	25	200	(解答) 肥満度区分の割合と各区分の保険加入者の割合に差がある(χ^2 検定の結果)
健康保険加入者	815	2270	415	3500	特に、「肥満」区分において差が大である。

②「実施結果の評価」における統計による評価(検定)

(問題) (前問題) 肥満者 65 人のうち高度肥満者 (BMI \geq 30) の 10 名に対して運動指導を実施した。結果は表のとおりである。肥満に対する運動指導の効果があったといえるか。

(解答)

全員のBMIは低下している。運動指導の前後の BMI 値には有意差(t検定の結果)があり、運動指導は効果があったといえる。

高度肥満者 (BMI \geq 30) への運動指導前後のBMI比較										
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
前	31.2	32.8	33.1	30.9	34.7	33.0	36.3	35.1	30.6	36.4
後	29.6	29.1	31.5	29.1	30.9	31.2	32.7	32.3	24.1	34.5

その結果、学生は、「意思決定スキルの形成」において、各種のデータをもとに問題を発見したり、その問題の要因を把握したりするため、統計はデータを科学的に評価するツールであることを学ぶ。さらに、他の科目においても、それを活用することの必要性和有効性を理解できれば、文系、理系の科目の垣根を意識することなく、科学的思考を修学させることができる。

また、本授業のように、ヘルスプロモーションに直結した課題(データの分析)に取り組むことで、単に統計学の検定の手法を学ぶだけでなく、より具体的、科学的な理解が可能である。

改善すべきは、本授業では、統計の検定を教育するため、データは作為している。今後は、実際のデータ等を使用し、より実地的なヘルスプロモーションの研究に寄与することが必要である。また、ヘルスプロモーションの環境づくりを推進するには、政策や法規、組織に関する科目とも融合することが大切である。

5. 議題

新しい時代(Society 5.0)の担い手である大学生には、専門の学問と他の分野の学問をバランスよく修学することが期待されるため文理融合教育は有効な方策の一つである。

大学の授業においては、文理の区分に関わらず多種の科目を融合させるティームティーチが実現できれば、より幅広い識見を与える教育が可能になる。

そこで、図1の九州大学共創学部の履修モデルを参考に、本校において、どのような取り組みが可能かを考えてみたい。

例えば、上述した「ヘルスプロモーション論演習Ⅰ」は4年時の科目であるが、図1での4年次での「社会学・健康医学」からアプローチする「課題協学科目」としての「卒業研究」、「高年次基礎科目」としての「社会統計学」、「エリア発展科目」としての「環境保全・再生」と関わっていることから、特に、卒業研究として位置付け、「これまで得た学知を組み合わせる課題解決策の創造に取り組みたい」といったことである。この他の取り組みについても皆さんのご意見を伺わせてください。

<プロフィール>

防衛大学校本科電気工学科 卒業

防衛大学校理工学研究科電子工学科 卒業

陸上自衛官 定年退職

日本ウェルネススポーツ大学 教授

日本グローバルビジネス専門学校 校長

セミナー3 基本的自尊感情を育む共有体験の教育実践 ～ICTの活用を視野に入れて～

○近藤 卓^{*1}

^{*1} 日本ウェルネススポーツ大学

キーワード: 基本的自尊感情、共有体験、ICT

【問題の所在】

3年に及ぶ新型コロナウイルス感染症の広がりの中で、これまで以上に子どもたちを取り巻く環境は大きな変化を見せている。とりわけ直接的な対面での関わりが限定的となる中、身体性を伴う共有体験の減少が、社会性の発達や基本的自尊感情の醸成に影を落としていると考えられる。そのことは、子どもの自殺者数の激増や不登校者の増加など、きわめて深刻な問題として既に表面化している。

コロナ以前から、子どものさまざまな問題が顕在化していた。様々な反社会的な問題行動やいじめなどによる殺傷事件は、低年齢化に加え、その悪質さが社会に大きな衝撃を与えており深刻な問題となっていた(近藤、2018)。それらの背景には、子どもたちの生命に対する考え方の変容や、基本的自尊感情(自己肯定感)の低下が影響しているのではないかと筆者は考え、基本的自尊感情を育むための「いのちの教育」に取り組んできた(近藤、2002)。

そこで今回は、基本的自尊感情を育む要因と考えられる共有体験の意味を再確認し、さらにICTを活用した共有体験の可能性について議論することとしたい。

【自尊感情の考え方】

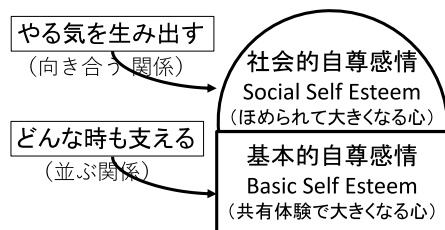
自尊感情の議論は、1890年にウィリアム・ジェームズが大著『心理学原理』において定義したことから始まったと考えられる。そこでは、Self-Esteem = Success/Pretensions(自尊感情=

成功/要求)と定義されており、つまり自尊感情の高低は要求に対する成功の割合に依存すると考えられている。このことから、我が国の教育現場においても自尊感情を育むための具体的な手立てとして、「褒める」「認める」「成功体験を積みせる」などの対応がとられてきた。筆者は、ジェームズの定義した自尊感情は、自尊感情の一部分であるに過ぎないと考え、自尊感情の再定義を試みた。

つまり左図に示したように、自尊感情にはその下

位概念として基本的自尊感情(BASE; Basic Self Esteem)と、ジェームズの定義による自尊感情としての社会的自尊感情(SOSE; Social Self Esteem)という二つの領域があるとした(近藤、2010)。そして、新たに社会的・基本的自尊感情尺度(SOBA-SET; Social and Basic Self Esteem Test)を開発した(近藤、2010)。この尺度は、すでに多くの小中学校や高等学校で活用されている。

自尊感情の成り立ち



近藤卓『自尊感情と共有体験の心理学』金子書房、2010

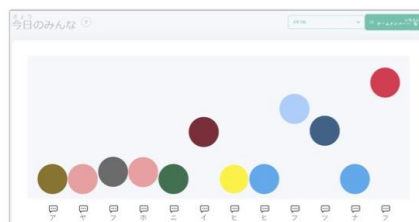
教育現場においては、子どもの「生きる力」を育成する重要な視点として子どもの自尊感情に着目し、自尊感情を高めるためのアプローチが検討され、様々な取り組みが行われてきた。ただその場合に、基本的自尊感情の視点が抜け落ちており、ややもすると自己有用感や自己有能感あるいは自己効力感などが注目され、社会的自尊感情の醸成に傾きがちである。

【ICT 活用の可能性】

現下の新型コロナウイルス感染症の広がりとともに、学校生活における児童生徒同士の接触機会の減少や、ICTを用いた非対面での授業形態が広がっていることも見逃せない。ICTの活用によって、不登校や病気、障害等で登校できない児童生徒にも、共有体験の機会が広がるという側面も期待できる。

しかし一方で、ICTを介した活動は対面による触れ合いにおける重要な要素である身体性が欠如している。そのことを補完する意味で、ICT機器を活用した身体性を伴った共有体験を取り入れた教育プログラムの可能性を筆者は検討している。ICTを活用することによる身体性を伴う共有体験の可能性を探り、それを用いた教育プログラムを開発することは、極めて時宜を得たことであると考えられる。

右図は、身体性を伴った共有体験のための ICT ツールの一例である Good Morning Color (GMC <https://lp.goodmorningcolor.com>) の1画面である。これは、児童生徒が各自の手元のタブレット端末やスマートフォンで手軽に実施できるところに特徴がある。具体的には、複数示されている丸の一つ一つが児童生徒を示しており、下部には氏名が表記されている。その日の気分を、丸の色と縦方向の動きを伴ったジャンプの高さで示している。一目で、クラス全体の状態や自分自身の位置が視覚的・感覚的に掴める。この段階を経て、その後マッチング・システムによってペアが組まれる。二人で e スポーツ的な簡単なゲームをおこなうことで、触覚と視覚を駆使した身体性を伴った共有体験を実現する。続いてグループ単位、そしてクラス全体の共有へと段階的に進むことになる。



この GMC は一例に過ぎないが、他にもすでに流通している ICT や web を活用したツールを用いて、身体性を伴った共有体験を具体化する可能性について議論したい。そして、対面での共有体験と ICT を活用した共有体験の相違点や共通点、さらには互いの補完性などについて議論を深めていきたいと考えている。

【文献】

- 近藤卓『いのちを学ぶいのちを教える』大修館書店、2002
- 近藤卓『自尊感情と共有体験の心理学』金子書房、2010
- 近藤卓『いじめからいのちを守る』金子書房、2018

ワークショップ 1

14:15-14:55 (40分)

D会場 (7階 702教室)

「高齢化が進む地域におけるウェルビーイングへの 取り組み～利根町の実践を通して～」

演者

- 石田 良恵 (日本ウェルネススポーツ大学)
- 小島 和彦 (TONE ウェルネスきんとれ会)
- 伊藤 義朗 (TONE ウェルネスきんとれ会)
- 大野 次男 (TONE ウェルネスきんとれ会)
- 布袋 哲朗 (利根町役場政策企画課)

高齢化が進む地域におけるウェルビーイングへの取り組み ～利根町の実践を通して～

○石田 良恵^{*1}、小島 和彦^{*2}、伊藤 義朗^{*2}、大野 次男^{*2}、布袋 哲朗^{*3}

^{*1}日本ウェルネススポーツ大学、^{*2}TONE ウェルネスきんとれ会、

^{*3}利根町役場政策企画課

キーワード：地域健康づくり、高齢化、ウェルビーイング

【目的】

現在の社会は急速に「人生 100 年という超高齢時代」に入り、すでに日本人の平均寿命は世界でトップの位置にある。2022 年 9 月の現状では 100 歳以上の高齢者が 65 歳以上者の 2%を占め、その数は 9 万人を超え、更にその 89%は女性が占めている。

この高齢化に向けて人はどのような条件下で 100 歳までの長い時間を生き抜ける環境が望ましいのであろうか、また、それらの準備・方策が用意され提供されているのだろうか、100 年という長い時間のために必要な要件状況として、①各自に「ウェルビーイング(生きがい、生きるために望ましい幸福感)」という視点が充分であらうか、②病気で寝たきりで迎える 100 歳なのか、③自立した日常生活があり心身共に豊かで長い時間を享受できる 100 歳であらうか。

このような課題解決を目指して、茨城県の中でも 2022 年の人口の 45.4%以上が高齢者で占められ、65 歳以上の高齢化率が県内では 2 番目に多い利根町において、その町に存在する大学の地域貢献という立場から教員として約 10 年間に亘り高齢者の体力・健康づくりなどの支援に関わってきた。

今後とも高齢化が急速に進んでいる利根地域において、高齢者たちが 100 歳という将来に向け幸せと感じて満足できるウェルビーイングな時間を過ごすことが可能であってほしいとの期待が大きい。

そこで、今回のワークショップでは、利根町での高齢者のウェルビーイングな将来に向けて、これまでの活動の経緯と課題・提言を踏まえた実現可能なウェルビーイングの具体策について、議論したい。

【これまでの活動の経緯と課題・提言】

大学の地域貢献という立場から、教員として約 10 年間に亘り3つの活動に関わってきた。その活動の内容と課題は以下の通りである。

1. 「TONE ウェルネスきんとれ会」(以後きんとれ会と略す)の活動

ウェルネススポーツアカデミーが母体となり 2016 年 4 月に大学との連携という形で正式にウェルネススポーツ大学に事務所を置き発足した。この背景は 2015 年に専任教授の石田が「加齢に伴う高齢者の筋肉量の減少を抑えるためサプリメント効果」の実験を K 会社より依頼され、利根町の男性 30 名が 3 か月間に亘り運動とサプリの摂取に協力をした。その終了時に有志が集まり、このまま解散するのは残念という意見から、それでは「きんとれ会」を作り皆で運動を継続しよう立ち上がった。

当初の呼びかけは高齢率が県内では 2 番目に多い町なので大学と連携して高齢者が積極的に運動をして、健康寿命を延ばし住みやすい地域を目指そう！との掛け声で呼び掛けたところ、最初から高齢男女 50 名が賛同し集まった。

そして、「皆が楽しく体を動かして病院のお世話にならず毎日の食事が美味しく食べられる体をつくる」ことを目指すことにした。

これは、高齢者がフレイル(虚弱)な負の連鎖によって要介護状態に陥らないようするフレイル予防に相応している。要介護状態はフレイルな負の連鎖、即ち社会的フレイルと身体的フレイル、心理的・認知的フレイルによって生じる。換言すれば、WHO の健康の概念である身体的、精神的、社会的 well-being な状態が負の相互関連過程(連鎖)を通して生じていることを意味している。

この WHO の健康状態としてのウェルビーイングがコロナ禍の長期化によって、ポジティブ心理学等を中心に発展してきた QOL,生きがいとしてのアクティブ概念として捉えられるようになり、その向上への社会的要請が高まってきた。

「きんとれ会」では、この QOL,生きがいとしてのウェルビーイングを高めるためのフレイル予防を行うのであるが、フレイル予防の3本柱(運動、栄養、社会参加)のうち、次の理由から運動に主眼を置いた。

- ①ウェルビーイングの視点からは、高齢者の自立した生活が第一であり、それには運動器(骨、関節、筋肉、靭帯、神経)の手入れが不可欠である。
- ②筋力の向上だけではなく、体温を上げ、更に筋肉量を増やすことに繋がり、筋肉から分泌されるホルモンの一種が免疫力を高めコロナ感染の予防に役立つからである。
- ③生活習慣病の主原因として、運動不足があげられるからである。
- ④運動により筋肉が肥大するが、筋肉は蛋白質から作られるため食事から十分な蛋白質の摂取が重要である。
- ⑤運動で集まる場所があることは社交場ともなり、フレイル予防の3本柱のうちの社会参画となるからである。ほとんどの参加者は生き生きとした表情できんとれ会の会場に来て、多くのメンバーは仲間との交流を楽しみ良い時間を費やしている光景は運動以外の点でも至福な時間である。

このような理由から、運動は大学の体育館で毎月 2 回開催、年会費 1,000 円、スポーツ安全保険に加入を原則としている。現在、指導・運営は大学からは石田が常時関わり、その他に時間がある教員も参加する協力体制にある。学生は将来の運動指導の体験や指導者養成資格取得の勉強のためにも、現場での指導力を高める良いチャンスだからと参加を進めている。毎年、体力測定を実施しているので、その資料からも高齢者の体力面の改善、アンケートも前向きな答えが多いこと等から本学教員には研究に、学生は卒論などにも繋がるよう考慮しているので、現在ここでの経験を活かして大学院に進み博士課程で頑張っている卒業生もいる。実技指導は主に石田が加齢に伴う筋肉量の改善、予防に必要な筋トレなどをメインに担当し、筋トレ会からは役員の大野氏がウォーミングアップや利根町音頭等を取り入れ毎回進めながら現在に及んでいる。学生は毎回これらの運動の指導法の勉強をしながら会員達の運動をサポートしている。

<施設の課題>

ここでもコロナ自粛生活の影響は大きく大学がオンライン授業や休校になると体育館の使用が出来ず、そこでの約3年間は体力測定もできずきんとれ会の休みが多くなった。その際には会員に石田から日常生活で体力管理の方法等促すメールを流し交流を続けた。その役はきんとれ会の役員達が熱心に会員に呼びかけ続けた。コロナ禍できんとれ会が出来ない状況になる前までは「きんとれ会」登録者が続々と増えて120名を超え体育館はほぼ満員状態になった。しかし2022年コロナ禍でも開催されるようになり、4月の総会後の実技参加人数は半数の60名程度に留まっている。参加者も体力が落ちたことを報告する会員とコロナでも運動を続けていたという会員も多数見られたが、体力測定の結果を3年前と比較すると加齢の影響もあると考えられるがバランス能力、持久力、柔軟性の低下が見られた。

＜運営面の課題＞

会長、副会長、会計の 3 役が積極的に会を運営する力があるため、会員達は楽しく参加しているものの積極的に会の運営には関心を示さない。自分たちの会として将来さらに発展するための思考、ウェルビーイングとして将来皆で良い時間を作ることや、友人や参加でいない人たちに呼び掛ける自覚、関心が見られないことに関しては指導する身としては問題と見る。

2. 利根町役場政策企画課との公開講座の活動

利根町政策企画課との公開講座の内容は石田が利根町及び世の中の現状を見て考えた演題となっている。利根町は 65 歳以上の高齢者が半数近くいることを踏まえ、ウェルビーイングの視点からも 100 歳まで手が届くことが可能と思われる高齢者達に対し、個人的にも健康寿命を延ばし豊かな時間を手に入れる事が出来るかを毎回の関わりの中で視野に置いている。日常生活での健康を手にするための心構え、そのために必要な体力作り、食生活、免疫力の強化などをふまえ講義と実技により心豊かに元気に生きるためのノウハウを公開講座として町民に提供したいと考えた。

担当したのは 2014 年から「1 日 15 分の筋トレで健康寿命を延ばしましょう！」と題し、加齢に伴う筋肉量の減少を筋トレで改善し自立した高齢者になるための講義と実技を行った。それ以降は 2018 年、「健康寿命を延ばすために」高齢者のフレイル予防。2019 年、「元気に歳を重ねるために自立した生活で健康寿命を延ばしましょう」生きる力は筋肉量と持久力、いかにして加齢に伴う体力を維持するか。2020 年、コロナ感染症が急速に広がったため「運動で免疫力を高めましょう、～コロナに負けてはいられない～」運動で体温を上げ十分な睡眠と食事で免疫力を高めよう。2021 年、「運動と免疫力、免疫細胞の活性化について。2022 年、「コロナ自粛生活の外出制限からの体力低下を運動で回復！」自粛生活は運動不足から筋肉量の減少が進むので特に筋肉量の減少は気力が低下し、認知症の危険も高まるので運動の継続に力を注ごう。

主に以上のような内容からスタートし、利根町の高齢者に対し生きる力は筋肉量に関わることを強調し、運動の薦め、健康に関する講義と実技を毎年 2 回行ってきた。2021 年には更に利根町のキャラクター「とねりん」と自宅でする体力作りのビデオを作成し、コロナ禍の自粛生活の中でも利根町の公報より利根町全体に発信することで運動不足に注意を呼びかけ自宅での筋トレを進めた。

＜課題＞①参加人数が限られている事に対してどう対応してゆくか

②終了後、どの程度継続しているのかの把握が困難

③これら活動に出席せず家にこもり何もしていない町内の高齢者に対してどう対応するか？

＜提言＞ 参加者に対して、会に来ていない人を「誘うよう」に願います

3. 利根町保健福祉センターの活動(毎回 3 日)

保健福祉センターからは 2018 年に初めて講師依頼を受けたが内容はすでに決まっていた。利根町では非肥満者で血糖、血中脂質、血圧(特に女性)が高いものの割合が高いことから、このような者の内、医療機関へ結びつく割合が低く治療中であってもコントロールが悪いものが多い。そこで生活習慣病予防啓発を目的とした「ヘルシー若返り講座」を開催していた。この中で「レデース講座」で「女性のからだ健康」についてこの年から理論と実技を担当した。これは翌年 2018 年、2019 年も受講者は変わるものの同様な内容で受講者が集まった。

次に 2020 年になると生活習慣病予防の中でも対象者を糖尿病重症化予防事業の訪問対象者とし、40 歳以上の男女の両方が参加できる「糖尿病予防～元気アップ！～講座」とした講座に変わった。ここでは糖尿病予防(良い食習慣、運動の定着)ということでもまずは自分の現状を知るための体組成の測定改善に必要な運動実技を担当した。

2021 年「糖尿病予防 家でできる運動の指導(男女)血管の老化を防いで元気な身体を！」。2022 年度分はこれからだが対象者が毎年違うのでほぼ同様な内容を年度内に行う予定である。ここでは「若々しい体づくり、血管の老化を防ぐ、糖尿病予防の運動指導」等を日常での身体運動の大切さについて今までの専門を生かした講義と実技を開催してきた。ここでの参加者の多くは日頃より運動経験の無い参加者が多かったため、「きんとれ会」に入会してくる者が何人も見られた。

また、この他にも 2018 年に利根町活性化研究会より依頼が有り利根町公民館で「生涯を通じての健康法～健康で心豊かな高齢者を目指して～」と題し高齢者が対象でウェルビーイングにつながる福祉講演会では多くの高齢者が参加した。

- <課題>① 参加者が終了後どの程度継続できているかの把握が必要と考えるが出来てない
② これらの活動に出席せず家にこもり何もしていない町内の高齢者に対してどう対応するか？

【議論の観点】

前述の各活動における課題を踏まえて、次の観点から、利根町高齢者の将来に向けて、実現可能なウェルビーイングの具体策について、議論したい。

- ① 「きんとれ会」の課題からは、どう発展させることで会員の意識(運営に対する責任感、人任せなど)や良い時間をつくることに貢献できるか？
(小島会長及び伊藤副会長より発言)
- ② 「公開講座」と「保健福祉センター」の課題からは、利根町が考える高齢者のウェルビーイングとはいったいどのようなものがあるのか、将来に向けての方策は？
(利根町役場政策企画課長布袋氏より発言)
- ③ 3つの活動に対して、大学の地域貢献として、支援に当たった教員の立場からどのような接し方、貢献の在り方が望ましいか？
(石田からの発言)

【プロフィール】

石田良恵:(1942 年生)保健学博士

日本ウェルネススポーツ大学教授 2013～2022/3 月まで、現在は非常勤講師

女子美術大学名誉教授 国士舘大学卒業 東京大学内地留学、フロリダ大学スポーツ科学研究所客員教授、専門:身体組成(主たる研究課題は皮下脂肪、減量についてで、現在は主に加齢の研究)。女子美術大学を定年退職後、登山に目覚め、日本の山をはじめインド・ヒマラヤ、キリマンジャロ、ブータン、台湾の山などに毎年登る。現在、高齢者の安全登山、生涯登山を目指した筋トレの必要性から「山筋ゴーゴー体操」を提案、テキストを作成し全国規模で普及活動中。

主な著書:「運動生理学」「肥満を科学する」「女性とスポーツ」「一生、山に登るための体づくり」「体脂肪を確実に燃やすエクササイズ 90」など多数。

所属学会:日本体育学会(名誉会員)、日本体育・スポーツ・健康学会、日本運動生理学会、日本抗加齢学会、日本発育発達学会、日本史生涯スポーツ学会、日本運動疫学学会、日本登山医学会 他

シンポジウム

15:00-15:50 (40分)

シンポジウム 1 A会場 (8階 801教室)

『well-beingを踏まえたAIと人間の適切な関係に関する一考察
—教育とスポーツを中心に—』

シンポジスト

- 「基調講演」 座長 平山 実 (日本ウェルネススポーツ大学)
「スポーツへのAI活用に関する研究」
大久保 英樹 (芝浦工業大学)
「Well-being時代におけるAIと学校教育の動向について」
平山 弘 (阪南大学)

シンポジウム 2 B会場 (8階 802教室)

『大学スポーツにおける運動部学生の生きがいづくり』

シンポジスト

- 「基調講演」 座長 鈴木 隆広 (日本ウェルネススポーツ大学)
「陸上競技部の事例」 杉町 マハウ (日本ウェルネススポーツ大学)
「バスケットボール部の事例」 中宿 晃 (日本ウェルネススポーツ大学)
「野球部の事例」 坂本 希望 (日本ウェルネススポーツ大学)

シンポジウム 3 C会場 (7階 701教室)

『平和教育の困難性』

シンポジスト

- 「日本の平和主義の曖昧性が何故生じたのか」
座長 工藤 美知尋 (日本ウェルネススポーツ大学)
「公民科教育における平和主義と安全保障—政治学からの批判的検討—」
菅谷 幸浩 (亜細亜大学)

シンポジウム1

well-beingを踏まえたAIと人間の適切な関係に関する一考察 —教育とスポーツを中心に—

○平山 実^{*1}、平山 弘^{*2}、大久保 英樹^{*3}

^{*1}日本ウェルネススポーツ大学、^{*2}阪南大学、^{*3}芝浦工業大学

基調講演

座長 平山 実(日本ウェルネススポーツ大学)

キーワード: AIの効用、AIと人間の役割分担、AIの限界

本シンポでは、well-being を踏まえたAIと人間の関係に関して、教育とスポーツの事例を通して、その適切な関係を議論し明らかにする。

AIの教育現場への導入は、すでに始まっている。音声認識を使った英語発音評価会話型ロボット等があり、多くのタブレット教材が開発販売されている。更に、ビッグデータの分析からAIが子供へ「あなたはこのような学習が適しています」とする過度なアドバイスは自主性を損なうことにもなる。実際タブレット型AI教材「qubena」という商品が販売され、2022年100万人、170以上の自治体、2300校の小中高が採用し、好評を博している。そしてその意義は、個別最適化、自動進捗管理、クラウドコンピューティングにある。プログラミング教育は、基礎的能力(新しいヨミカキソロバン)としてその狙いは、「課題を解決する力」を目指すものである。これまでのように、答えのある問題を即座に返すだけの人材は不要という意味である。最近では、古典芸能の世界でも、「師匠のわざ」をAIが解析し、具体的スキルは、AIを活用すれば、効率的に獲得が可能となっているものの、しかし世界観や芸の意味はAIにはできないとされる。また今後必要な能力は、「読み・書き・そろばん」から「数理・データサイエンス・AI」へ移行することが、「AI戦略2019」でも提唱されている。そして、将来の教育現場で必要とするのは、「AIと融合」する教育であり、AIが得意とするもの、人間が得意とするものを整理し、「自分の頭で考える」「リアリティのある学び」が肝要とする指摘がある。以上が教育における現状の整理である。

一方スポーツにおけるAIはどうか。すでに多くの論考が出されており、アスリートのパフォーマンス向上や審判のジャッジメントの補助や代行、更には、スポーツを取り巻く産業にも不可欠になりつつある。例えば売り上げデータ(ビックデータ)から売り上げを予測し、販売価格を変動させたり、ニーズに合わせた新たな観戦スタイルを提供したり、スポーツの在り方の多様化が進んでいる。すでに将棋や囲碁の世界では、AIが人間を圧倒している。またフィギュアスケートやシンクロナイズドスミングのような美を評価する研究開発も進んでいるという。更には、人間の持つ物理的身体機能を超えて、e-sportsなる概念もあり、境界がますますグレーになっている。最も理解しやすいのは、審判機能であり、多様な概念と利活用の在り方が議論され、実践されているのが現状でもある。

このような認識を踏まえ、平山氏には教育、大久保氏にはスポーツの事例を通して、AIの効

用の共通性と異質性、AIの役割と限界について言及して頂く。それを私の方で小括し、議論する展開になるのだが、紙幅の関係上、先に小括する。

教育に関する平山氏の論考では、「クラウドコンピューティング」、「課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成」、「STEAM 教育」、「AI 戦略 2019」、「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)」、「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム(応用基礎レベル)」、「数理・データサイエンス、AI 人材の育成」に触れ、「今後はウェルビーイングの本質である生徒の「健やかさ・幸福度」を前提に置きながら、AI 導入によるタブレットでの学習と、教員自身が授業を行う教育手法との間に齟齬が生じないように、AI ができることとできないこと、教師が指導すべきことと指導しないほうがよいことなど、その役割分担やはっきりとした線引きが求められるということになる。」と結論づけている。

スポーツに関する大久保氏の論考では、「スポーツにおける AI 活用フェーズとしては、大きく2つ、「評価」と「予測」に分類できる。」とし、更に評価は、「①現状把握」と「②判定」に分類できると整理し、「②判定」は競技を審判する際に利用されるものと説明している。

「(1) スポーツにおける AI 活用フェーズとして「評価」と「予測」に分類し、「評価」を更に「①現状把握」と「②判定」に分けて、いくつかのスポーツの現状を分析し、今後の動向を考察した。(2) 今後は、さらに多くのスポーツにおける AI 活用の動向と導入を困難にしている要因について、分析していく必要がある。」と結論づけている。

以上を踏まえて、AIと人間の適切な関係について議論する。

[参考文献]

・中村退助「スポーツ実践におけるAI技術の利活用による人間の可能性と挑戦」『園田学園女子大学論文集 第55号(2021.1)』

・「スポーツの審判は、AIに置き換えた方がよいと考えられている」『AIBIBLIO 人工知能をまとめるネットメディア』2017年12月25日

・清水千弘他「スポーツ競技とAI」『人工知能 第34巻4号』2019年7月

・青木義満「スポーツと私」(慶應義塾大学理工学部)

<https://www.st.keio.ac.jp/education/learning/1810.html> (アクセス日 2022年12月20日)

『AI大図鑑』ニュートンプレス、2020年

[プロフィール] 日本ウェルネススポーツ大学准教授

【学歴】防衛大学校応用化学科卒業、青山学院大学国際政治経済学研究科修士課程修了、防衛大学校総合安全保障研究科博士前期課程卒業。【経歴】陸上自衛隊入隊、陸上自衛隊第5施設群、長官官房、陸上幕僚監部防衛部・監理部、統合幕僚会議事務局第3幕僚室、防衛大学校総合安全保障研究科、防衛研究所研究部、陸上自衛隊研究本部総合研究部、防衛研究所戦史部、防衛大学校防衛学教育学群勤務を経て、東京海上日動火災保険株式会社、2016年3月学校法人タイケン学園入職。【専門】国際政治学、安全保障論、オーラル・ヒストリー、組織論、防衛政策。【著書・主要論文等】「自衛官国際派の役割と意義の研究」『防衛大学校紀要社会科学分冊(110)』117-120pp 2015年3月。「戦後日本の防衛政策に関するオーラル・ヒストリーの活用法の一考察」、防衛研究所、『戦史研究年報、14号(14)』57-70pp 2011年3月。書評「Stephan Biddle, Military Power, Explaining Victory and Defeat in Modern Battle」『国際安全保障 34(4)』2007年3月

スポーツへの AI 活用に関する研究

大久保 英樹 (芝浦工業大学)

キーワード: スポーツ、AI 活用、評価と予測

【目的】現代は、スポーツのいろいろな場面で AI が活用されており、今後益々盛んになると言われている。本研究においては、文献調査を基に、スポーツにおける AI 活用フェーズを「評価」と「予測」に分類して AI 活用場面を分析し、今後の動向についての考察を試みた。その成果と課題について報告し、今後のスポーツへの AI 活用の進展に資することにする。

【研究方法及び対象】研究方法は各種文献等を基に分析・考察する方法であり、対象はスポーツである。

【スポーツにおける AI 活用フェーズの分類】

スポーツにおける AI 活用フェーズとしては、大きく2つ、「評価」と「予測」に分類できる。

(1) 「評価」とは: スポーツにおけるプレーや選手の状態などが、どのような状況にあるのかを明らかにすることであり、さらに細分化すると「①現状把握」と「②判定」に分類できる。

「①現状把握」とは、現在の状態を明らかにすることであり、例えば、マラソンなどにおいて、気温・湿度・風など外的要因をも考慮した場合に、過去の当該選手のスピードと比べて速いペースなのか遅いペースなのかを明らかにしたり、サッカーやラグビーなどの対戦型のスポーツでは、対戦チームのそれまでの戦い方のデータを基に、対戦チームの各選手の特徴やチームとして採用している戦い方の傾向などを明らかにしたりすることである。

「②判定」とは、「①現状把握」の一つの形態と考えることもできるが、例えば、テニスなどにおいてライン際のボールが「IN」なのか「アウト」なのかを判断したり、体操において何回転したかを判断したりすることであり、結果は「是」か「非」か、「何回転か」など明確に示される。「②判定」は競技を審判する際に利用される。

(2) 「予測」とは: 「評価 ①現状把握」を基に、次にどうなるかを見積もることである。

(1)で記載したマラソンの例では、過去と比べて速いペースであれば、この後のルート状況から、このままのペースでいくとバテてしまって、かえってタイムが落ちてしまうなどを「予測」して、それ以降のペース配分に活用することであり、また、対戦型のスポーツでは、対戦相手のそれまでの戦い方のデータから実施した「評価」に基づき、対戦相手がこの後、どのような戦い方をするかを「予測」して、有利になるような我の戦い方の案出に活用するということである。(1)(2)を図示すると、下図のようになる。

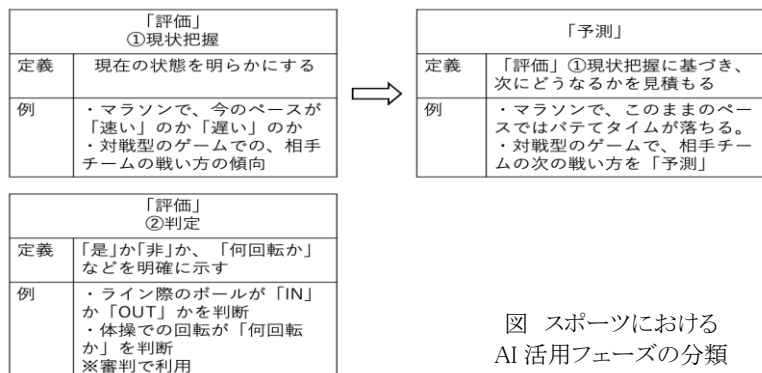


図 スポーツにおける AI 活用フェーズの分類

【AI活用状況に関する分析と考察】

(1) 「評価 ①現状把握」におけるAI活用状況

この分野では、従来、コーチなどが経験などを基に分析していたものが、AI活用により、詳細な把握が可能になってきている。今後益々AI活用が進んでいくであろう。

(2) 「評価 ②判定」におけるAI活用状況

この分野におけるAI活用が最も進んでいる。テニスの大きな国際大会では、電子審判テクノロジーが使われており、主審の判定に不服な場合、選手は1セット3回まで判定に「チャレンジ」することができ、その場合はシステムが判定した結果を画像とともにスクリーン表示される。また、体操においても、「AI採点支援システム」が活用されている。

個人競技やライン際の「IN」・「OUT」などは、今後益々AIでの自動判定が進んでいくであろう。導入に限界があるのは、必要な情報が得られにくい競技場面(ラグビーのスクラム内の動きなど)やアイススケートの芸術点などがあるが、一方で、文化的な問題も存在する。

(3) 「予測」におけるAI活用状況

この分野でも、従来、選手やコーチなどが経験などを基に予測していたものが、AI活用により、詳細な予測が可能になってきている。他方、スポーツは人が活動するものであるため、どんなに「予測」が緻密になっても、完全な予測は今後も困難であろう。

【まとめ】

(1) スポーツにおけるAI活用フェーズとして「評価」と「予測」に分類し、「評価」を更に「①現状把握」と「②判定」に分けて、いくつかのスポーツの現状を分析し、今後の動向を考察した。

(2) 今後は、さらに多くのスポーツにおけるAI活用の動向と導入を困難にしている要因について、分析していく必要がある。

【参考文献】

1) 中村泰介「スポーツ実践におけるAI技術の利活用による人間の可能性と挑戦」、2021年1月、園田学園女子大学論文集 第55号

2) 柏原全孝「判定者について:審判と判定テクノロジーをめぐる社会的考察」、2015年3月30日、追手門学院大学社会学部紀要 第9号 1-15

3) 松原孝臣「冗談から始まった挑戦:体操競技で正式導入された「AI採点支援システム」が切り開く未来とは」、2021.11.09、公益財団法人ニッポンドットコム

【プロフィール】芝浦工業大学非常勤講師、埼玉工業大学非常勤講師、情報学博士

[学歴] 防衛大学校応用物理学科卒業、防衛大学校理工学研究科オペレーションズリサーチ専攻修了(修士相当)、情報セキュリティ大学院大学情報セキュリティ研究科博士後期課程修了。[経歴]陸上自衛隊入隊、各部署・部局の班長・連隊長・科長を経て、防衛大学校防衛学教育学群教授、富士ソフト株式会社勤務、学校法人智香寺学園。[専門]情報セキュリティ、システム開発、危機管理。[著書・主要論文等]サイバーセキュリティ人材の育成に関わる研修費用・期間に関する研究、情報通信政策研究Vol.4, No.1, II-1~II-21、2020年11月。「Consideration of issues and countermeasures to acquire core human resources through vocational education to improve local information security in Japan」、Journal of Physics: Conference Series, Volume 1516, 1-7, June 2020。「情報セキュリティ人材の人的規模推定に関する研究」、日本セキュリティ・マネジメント学会誌 2021年 35巻 2号 3-9pp 2021年6月。他多数。「陸上自衛隊のシステム装備の開発におけるユーザ参画に関する研究」(単著)防衛技術協会『防衛技術ジャーナル』2021年3月号(4-9pp)、4月号(10-19pp)、5月号(20-25pp)

Well-being 時代における AI と学校教育の動向について

平山 弘(阪南大学)

キーワード: Society5.0、クラウドコンピューティング、AI人材育成

わが国が提唱した Society5.0 は「サイバー空間(仮想空間)とフィジカル空間(現実空間)を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立させる人間中心の社会(第5期科学技術基本計画)ⁱ⁾」の実現に向けて歩みを続けている。

そのためには新たな教育観や学力観が求められることになる。文部科学省は小中高の学習指導要領を改訂し、小学校は2020年度、中学校は2021年度から全面実施されることになり、高等学校においては2022年度の入学生から年次進行で実施されている。

こうした背景には急速に進化するAI(人工知能)に加えて、こえまでのPCの運用や利用形態を一新させる革命的なクラウドコンピューティングの出現により、学校教育においても新たな取り組みが積極的に行われている。特に、クラウドコンピューティングⁱⁱ⁾には5つの特徴があり、それは「①オンデマンド・サービス②幅広いネットワークアクセス③リソースの共用④スピーディな拡張性⑤サービスが計測可能であることⁱⁱⁱ⁾」から、小中高においてはPCやタブレット、スマホなどのデバイスを用いながら、いわゆるアクティブラーニングとして児童・生徒がグループに分かれて課題学習を行うことなどを可能にしている。

令和3年1月26日の中央教育審議会の答申によれば、「これまで文系・理系といった枠にとられず、各教科等の学びを基礎としつつ、様々な情報を活用しながらそれを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成^{iv)}」の必要性を謳っている。

また、教育再生実行会議第11次提言では「新学習指導要領において充実されたプログラミングやデータサイエンスに関する教育、統計教育に加え、STEAM教育の推進^{v)}」が提言され、高等学校改革において、「STEAM教育は各教科での学習を実社会での問題発見・解決にかしていくための教科横断的な教育^{vi)}」とされ、学校教育の現場においても学校と地域が一体となって地域が抱える課題についてのアプローチが進んでいる。

そして、大学においても内閣府、文部科学省及び経済産業省は、「AI戦略2019」及び「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)」の創設を行い、これにより年間50万人の大学生・工専生が正規課程にてリテラシーレベルの数理・データサイエンス・AIを習得することが目標とすることになり、現在多くの学生がそうした内容の習得に向け学んでいる。その後も文部科学省は「数理・データサイエンス・AI教育プログラム(応用基礎レベル)」も創設することで、より一層の数理・データサイエンス、AI人材の育成に注力している。

以上見てきたことから言えることは、AIの進化、ビッグデータの解析、BYOD(Bring Your Own Device)、クラウドコンピューティングの進展がわが国の教育環境を大きくシフトチェンジさせており、AIが導入されたタブレット端末での学習が児童・生徒ひとり一人の学習上のつまづきを

遡らせることで、これまで教室での一斉授業による授業形態では個々の児童・生徒の学習状況を即座に把握することができなかった時代から、AI が搭載されたアプリを使用することで、児童・生徒個々の能力や理解の程度に応じて学習を進めていくスタイルが学校や塾での成績アップにつながっている事例も少なからず顕現している。今後はウェルビーイングの本質である生徒の「健やかさ・幸福度^{vii}」を前提に置きながら、AI 導入によるタブレットでの学習と、教員自身が授業を行う教育手法との間に齟齬が生じないよう、AI ができることとできないこと、教師が指導すべきことと指導しないほうがよいことなど、その役割分担やはっきりとした線引きが求められるということになる。

ⁱ https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html Society5.0 とは(採録日 2022 年 1 月 6 日)。

ⁱⁱ 「クラウドコンピューティングは、共用の構成可能なコンピューティングリソース(ネットワーク、サーバー、ストレージ、アプリケーション、サービス)の集積に、どこからでも、簡便に、必要に応じて、ネットワーク経由でアクセスすることを可能とするモデルであり、最小限の利用手続きまたはサービスプロバイダとのやりとりで速やかに割当てられ提供されるものである」。

<https://www.ipa.go.jp/files/000025366.pdf> NIST によるクラウドコンピューティングの定義(採録日 2023 年 1 月 6 日)。

ⁱⁱⁱ 前掲書参照。

^{iv} https://www.mext.go.jp/content/20220518-mxt_new-cs01-000016477_0001.pdf 文部科学省初等中等教育局教育課程課「STEAM 教育等の教科等横断的な学習の推進について」(採録日 2023 年 1 月 6 日)。

^v 前掲書参照。

^{vi} 前掲書参照。

^{vii} <https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/#PISA2015> 国立教育政策研究所 HP(採録日 2023 年 1 月 6 日)。OECD の PISA2015 の同報告書ではウェルビーイング(well-being)を「生徒が幸福で充実した人生を送るために必要な、心理的、認知的、社会的、身体的な働き(functioning)と潜在能力(capabilities)である」と定義している。

【プロフィール】

[学歴] 大阪大学大学院経済学研究科博士前期課程修了,神戸商科大学大学院経営学研究科博士後期課程

[経歴] 阪南大学入職,阪南大学流通学部教授・学部長・大学院企業情報研究科教授、この間神戸商科大学、兵庫県立大学、神戸市外国語大学、甲南大学にて非常勤講師を歴任

[専門]

ブランド価値、グローバルニッチ、ローカルニッチ、経験価値マーケティング、戦略的マーケティング、自衛隊のブランド価値

【著書 主要論文等】

『ブランド価値基盤の転換とブランド再構築』晃洋書房、2020 年 3 月

『ブランド価値創造に戦略に求められるもの 目に見えるものを通して目に見えない何かを捉える』晃洋書房、2016 年 3 月

『ブランド価値の創造 情報価値と経験価値の観点から』晃洋書房、2007 年 3 月

シンポジウム2 大学スポーツにおける運動部学生の生きがいづくり

○鈴木 隆広*1、杉松 マハウ*1、中宿 晃*1、坂本 希望*1

*1 日本ウェルネススポーツ大学

キーワード: スポーツの価値、大学スポーツ、学業基準指針

基調講演

座長 鈴木 隆広

【目的】

2022年3月25日に文部科学省が第3期スポーツ基本計画(以下、「第3期計画」)を策定した。この第3期計画は、第2期スポーツ基本計画中の総括を踏まえて、東京オリンピック・パラリンピック競技大会(東京大会)のスポーツ・レガシーの発展に向けて、特に重点的に取り組むべき施策を示すとともに「新たな3つの視点」である、①スポーツを「つくる／はぐくむ」、②「あつまり」、スポーツを「ともに」行い、「つながり」を感じる、③スポーツに「誰もがアクセス」できる、と支える具体的な施策を示している。

第2期計画中においては、新型コロナウイルス感染症や東京オリンピック・パラリンピック競技大会のほか人口減少・高齢化の進行、ライフスタイルの変化など社会状況の変化があった。このような出来事等を通じて、改めて確認されたことが、スポーツそのものが有する価値(Well-being)及びスポーツが社会活性化等に寄与する価値をさらに高めるための一つの施策として新たな「3つの視点」を支える施策である。

本シンポジウムでは、大学スポーツにおいてスポーツの価値を高めるためには運動部学生がどのような「生きがい」を感じて運動部活動に取り組んでいるのか、指導者は「生きがい」について学生に対してどのような意識を持って指導にあたっているのかなど、本学の指導者の視点から議論を深めることにする。

1 スポーツの価値の向上

オリンピック・パラリンピック東京大会においては、組織委員会を中心とした「汚職」や「談合」といったニュースが報道されるようになった。このような出来事はオリンピック・パラリンピックの価値を下げるばかりでなく、「スポーツ」そのものの価値を下げてしまう恐れがあり看過できないことである。

最近においてもスポーツ団体等における不祥事や不適切な指導などの事案が見受けられる。このようにスポーツ団体等が適切に組織運営するためのガバナンス強化やスポーツ関係者のコンプライアンス違反や体罰、暴力等を根絶する必要があるため、スポーツ・インテグリティの確保がスポーツの価値を一層向上させることにつながる。

スポーツを「支える」観点から試合や競技に挑戦する選手をさせるコーチ、スタッフ、審判員など様々な人々の力なくして大会の成功はないことは言うまでもないことである。しかし、運動部活動等の日常生活(授業・寮生活等含む)の中でスポーツを支える指導者の役割は重要である。

今後は、大学スポーツにおいても運動部のガバナンスやコンプライアンスなどチェック機能を持たせて組織運営の透明性を高めていく必要がある。運動部学生が生き生きとスポーツに打ち込める姿は指導者としても学生に生きがいを与えるとともに有意義な活動である。運動部活について指導者を通じてスポーツの価値を一層向上させていくために何をすべきか考察していきたい。

2 学業と運動部活動

2021年12月23日に大学スポーツ協会(以下「UNIVAS」)は、運動部学生における学業と運動部活動の両立をさらに進めることを目的に「運動部学生の学習支援となる単位数めやす」を策定した。これは、卒業所用単位数を計画的に取得することを導く手法の一つであるとともに学修支援が必要な学生を大学が把握し、大学が学修支援を行うためのものである。

競技に打ち込む運動部学生は、授業が疎かになり進級や卒業に必要な単位数の取得が困難になる場合も見受けられるため、競技だけに終始することなく学業への意識を持ち卓越性を有する人材として社会に出ていくため、学修への意欲を持って臨むことをUNIVASは目指している。

具体的には、卒業に必要な単位数が124単位の4年制大学の場合、2年開始時の取得単位数が19単位以下の学生は「要支援」、20～24単位の学生は「支援推奨」に該当し、勉強や生活指導などのフォローを促すようになっている。

このような学業基準を先行して導入している大学もあり、達成できない学生は練習や試合へ

◆運動部学生の学修支援となる単位数めやす

①4年制大学			②2年制大学		
4年制大学の卒業所要単位数 124単位を基準とした場合			短期大学(2年制)の卒業所要単位数 62単位を基準とした場合		
取得単位数 開始学年	支援推奨	要支援	取得単位数 開始学年	支援推奨	要支援
2年	20-24単位	19単位以下	2年	25-34単位	24単位以下
3年	50-59単位	49単位以下			
4年	85-94単位	84単位以下			

③4年制大学(5年卒業)			④4年制大学(6年卒業)		
4年制大学の卒業所要単位数124単位を基準とした場合			4年制大学の卒業所要単位数124単位を基準とした場合		
取得単位数 開始年	支援推奨	要支援	取得単位数 開始年	支援推奨	要支援
2年	20-24単位	19単位以下	2年	20-24単位	19単位以下
3年	40-49単位	39単位以下	3年	40-44単位	39単位以下
4年	70-79単位	69単位以下	4年	60-64単位	59単位以下
5年	90-99単位	89単位以下	5年	80-84単位	79単位以下
			6年	95-99単位	94単位以下

留学を挟むなど計画的に5年～6年かけて学ぶような学修計画に対しては、別途めやすを設定することも可。

<対象となる事例>

- 怪我・病気等により長期療養を受けた学生
- 留学を経験した学生

※証明書の提出有無は各大学の判断に委ねる

※年次毎のめやす達成に向けてはセメスター単位での支援や進捗管理が有効です。セメスター単位の支援や進捗管理方法は先行大学事例をもとに、事例集の中で提示し、推奨していきます。

* 設立準備委員会が検討するにあたり11大学の運動部学生(2-4年生) 約1900名の2019年度単位取得数をもとに算出

3 まとめ

以上のことを踏まえて本学における運動学生の生きがいづくりについて指導者からそれぞれ発表していただき指導方針や指導体制のほか学生の生きがいづくりにつながるモチベーションアップの方法や学業と運動部活動に関する配慮等について明らかにする。

運動部別 学生の生きがいがづくり

1. 陸上競技部の事例

杉松 マハウ

(1) 陸上競技部の概要

2022 年度は利根キャンパス 9 名、成増キャンパス 21 名の合計 32 名で活動

成増キャンパスは、競技場練習時にウエルネス高校 16 名と一緒に活動

(2) 指導方針

- 1, 【学生主体】自分達で部の運営ができる。ブロックごとにメニューを作成し監督と仕上げる。自分達の意見を発言する。
- 2, 【学業優先】授業日数、提出物、赤点を取らない、授業態度などを重視し、ミーティング時に確認する。必要であれば、練習や大会に出場させない。
- 3, 【生活指導】陸上部員として見られていることを意識する。特に挨拶の仕方を重視。将来、自分に返ってくることを認識させる。

(3) 指導体制

部長: 塚本敏久

監督: 杉町マハウ

コーチ: 本間一輝

(4) 部員に対する生きがいがづくり(モチベーションアップ)

目標を部員に共有し、それぞれがどこを目指しているか認識させて練習を行う。きつい時ほど「自分の目標のために」と声掛けをする。

「指導ができないことは自分が意識、認識していない事」。よって高校生と練習させて、指導をする環境を作る。またはお互いが指摘し合う環境(体幹補強は FREE にするなど) 中学校への外部指導を積極的に行き、コミュニケーション能力をアップさせ、将来の就職活動に活かす。

(5) 学業不振者に対するフォローアップ

年間最低 32 単位を基準にして下回った者は、記録会等に出場させない。

履修は、昨年度の大会を参考にして組み、3, 4 年生で成績を出せるように 1, 2 年生時に多く履修するように勧める。

課題提出期限前に全体にお知らせをする。

部活動辞退者には、理由を聞いて最善を尽くす。(卒業させる)

2. バスケットボール部の事例

中宿 晃

(1) バスケットボール部の概要

男子 2022 年度は利根キャンパス 19 名、成増キャンパス 2 名の合計 21 名で活動

成増キャンパスは、週 4 回利根キャンパスへ移動し活動

女子 2022 年度、利根キャンパス 7 名で活動

(2) 指導方針

- 1, 【学生主体】自ら考えるバスケットボールを基本としているが、チームの共有として

- ① 攻撃的なフェンス
- ② リバウンドを取る
- ③ 早い攻め

この3点を常に意識すること

2, 【学業優先】授業を休まない(8月からのリーグ戦が土日10週続いたため)

3, 【生活指導】ウェルネスの学生としての基本行動の順守

(3) 指導体制

男子部

部長: 鈴木隆広

監督: 塚越雅明

コーチ: 中宿 晃

女子部

部長: 鈴木隆広

監督: 中根和章

コーチ: 中宿 晃

(4) 部員に対する生きがいづくり(モチベーションアップ)

バスケットボールを通じた人間形成

秋季に実施される関東大学リーグ戦参加による所属部の昇格に向けた取り組み

他大学、高校との練習で自己のレベルを確認し目標を設定する(スキルアップ)

戦術、戦略を学習することで指導へ繋げる(コーチング)

規則を知ることにより技術向上する(レフェリング)

(5) 学業不振者に対するフォローアップ

個別指導の実施(習得単位数の確認、未修得単位を修得)

試験前期間の練習を軽減する(自主練に変更など)

大会期間が長期なので、年度当初から授業、習得単位について話をする

3. 野球部の事例

坂本 希望

(1) 野球部の概要

創部 2018年

加盟 「首都大学野球連盟」

グラウンド 日本ウェルネススポーツ大学 G(茨城県北相馬郡利根町布川1377)

部員数 168名(学生スタッフ含む)

(2) 指導方針

- ・野球を通じて「人材育成」を図り、社会に役立つ人材育成
- ・組織図を明確にし、課題を出し合い活動(学生主体)
- ・学生主体でのチーム運営
- ・野球部規則にそって運営(部則・規則を守ることを第一条件で野球部を運営)

- ・各部門での役割を作り学生に役所と責任感を持たす
- ・コミュニケーション能力の向上

(3) 指導体制

部長 武井 克時

総監督 石川 清一

監督 工藤 洋一

(4) 部員に対する生きがいづくり(モチベーションアップ)

- ・野球部内でのリーグ戦を開催(各チーム監督は学生スタッフ)年二回開催(リーグ戦後)
 - ・学生主体のチーム作り(練習メニュー・試合メンバー等は学生主体で決定)
 - ・年二回の強化キャンプ(3月長崎、静岡・8月東北)
 - ・指導者、マネージャー、学生コーチ、選手でのコミュニケーション向上(各週での課題や、互いの要求
 に対する意見交換を実施)
 - ・大学の単位取得、授業については学生マネージャーが把握(マネージャー管理にしながらも取りたい
 科目については学生からの進言を必ず確認)
 - ・練習態度、授業態度の評価によってリーグ戦メンバーを決定する
 - ・リーグ戦後の練習は学生にメンバーを決定させ再開(学生に責任感を持たせる)
 - ・単位取得が出来ていない選手はメンバー選考外(学業の重要性を理解させる)
 - ・毎週の OP 戦のメンバーは学生コーチ→コーチ→助監督→監督の順で選定(学生コーチに責任感を
 持たせ、リーグ戦ではベンチにも入る)
 - ・毎週 OP 戦を組み、実践を積ませる(マネージャーが他大学や球場との連絡を取る)
- ### (5) 学業不振者に対するフォローアップ
- ・大学卒業の重要性を説く
 - ・学生の話聞く(単位状況や、部活動でのあり方等)
 - ・卒業に向けてのプラン作成
 - ・就職についてもフォロー
 - ・3年終了時に84単位以下の学生を対象に面談を行う
 - ・本人と面談(理由を聞いて解決策を練る)
 - ・野球以外の説明を細かく行う(卒業の重要性を説く)
 - ・卒業に向けてのプランの作成
 - ・授業管理は学生マネージャーが行う

シンポジウム3

平和教育の困難性

工藤 美知尋^{*1}、菅谷 幸浩^{*2}

^{*1} 日本ウェルネススポーツ大学、^{*2} 亜細亜大学

基調講演「日本の平和主義の曖昧性が何故生じたのか」

座長 工藤 美知尋(日本ウェルネススポーツ大学)

キーワード: 平和教育、平和主義、憲法第9条

【目的】日本の平和主義の原点は、1947年に制定・発布された「日本国憲法」にある。日本国憲法の基本原則は、(1) 国民主権、(2) 基本的人権の尊重、(3) 平和主義の三本柱であるが、特に「平和主義」については、これをいかに具体化していくかについて国論が分れている。

1900年の湾岸戦争の際、日本は戦費のほとんどの130億ドルを拠出したにもかかわらず、国際社会から評価されなかった。すなわち日本の「一国平和主義」は一つの限界にあったのである。

それでは2023年の現在、日本はいかにして「日本国憲法の平和主義」を具体化していけばいいのか？

2022年2月 24 日、プーチン・ロシアはウクライナ侵略戦争を開始した。今日、国際社会の一員としての行動を議論する際、憲法第9条を「盾」にするだけでは、国際社会の理解を得ることは到底できないと考える。

そこでここでは、「憲法第9条が制定された過程を検証する」ことによって、日本の平和主義の曖昧性が何故生じたのかについて考察する。

【方法】日本国憲法第9条には、次のように書かれている。

「①日本国民は正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と武力による威嚇、又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段として、永久にこれを放棄する。

②前項の目的を達成するため、陸海軍その他の戦力はこれを保持しない。国の交戦権はこれを認めない。」

この条項の中の「前項の目的を達成するため」は、芦田均の修正によっている。そこから解釈を展開して政府は、「自衛隊は自衛力であり、憲法のいう『陸海空軍その他の戦力』には当らない」として、自衛隊の存在を合憲としている。しかしこの合憲性の主張はいかにもいい繕いの色がある。

憲法制定過程を検証してみると、この条項の意味がしっかり捉えられて決定されたものではなかったことがわかってくる。

憲法成立過程の背景の一つに、アメリカ占領軍が、日本国民の自由な意思による憲法制定という形をとりたかったことがあった。また当時の日本政府も、GHQ側の意向に従っていた方がよいと判断していたことがあった。

当時最も重要であったことは、極東理事会が作られつつあったことである。ところがこの極東委員会では、誰が日本管理を行うかについて対立があった。極東委員会が実質的な権限を持てば事は一層面倒になり、例えば天皇の存在も問題となる恐れがあった。したがって日本国民が自ら改革するならば、そうした問題は起こらないであろうと考えたわけである。

さらにもう一つは、日本人の圧倒的多数が改革と再生を願っており、その象徴が憲法であったことがある。したがって当時の吉田茂首相は、新憲法を、数年後の講和までの「暫定憲法」のように考えていた。今にして思えば、ドイツのように、この憲法は、真の憲法ではなく「暫定的なものであることを明白にしておいた方がよかったと思われるが……。吉田茂の行動の中で問題があるのは、講和後、憲法を改正して正式に再軍備をすることを求める人々が現れた時、それに対抗したことである。

吉田自身は自衛力の必要は認めていたし、その意向をダレスに伝えてもいた。したがって吉田がこの点について率直に議論しようとしなかったのは責められることである。吉田は「再軍備は決して致しません」と言いながら、一方で再軍備を進行させた。

また講和後、憲法改正の機会を逸したのは、冷戦が日本国内に反映したため、自社両党の間でイデオロギー対立が起こったためである。こうしたことから政治力学的に、「解釈改憲」しかなかったのである。こうして「第9条の曖昧性」は今日まで残ることになった。

【結果】現行憲法が制定された当時と今では、日本を取り巻く安全保障環境は大きく変化した。今日、日本はG7の一員として、国際社会から責任ある負担を求められている。

政府見解として、「自衛権」は認められているものの、「集団的自衛権」は憲法に抵触するから認められないとしているし、「武器輸出」も認めていない。現在のウクライナ戦争で日本は、「ホカロン」と「ヘルメット」を送ることでお茶を濁している。これでは到底国際社会の理解を得ることは出来ないであろう。

【考察】終戦直後の日本国憲法の制定過程を検証することによって、現憲法に内在する諸問題が明らかになった。

【まとめ】「憲法あって国滅ぶ」であってはならない。人間も国家も最終的には自分の運命に責任を持たなければならないのである。

【プロフィール】

工藤美知尋; 日本ウェルネススポーツ大学で、「文章表現」と「政治学」を担当。〔専攻〕日本政治外交史

公民科教育における平和主義と安全保障 —政治学からの批判的検討—

菅谷 幸浩(亜細亜大学)

キーワード:「公共」、自衛隊、日米安保条約

【目的と方法】

2022(令和4)年度から新高等学校学習指導要領の実施。公民科の目標:「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」の育成。新科目「公共」における主権者教育、思想分野、国際社会分野(領土問題・安全保障を含む)の充実。

本報告では「公共」を事例として、戦後日本における平和主義と安全保障の在り方をめぐる問題点と今日的課題を検討する。

【分析】

『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説・公民編』(文部科学省、2018年)。

- ・「主として政治にかかわる事項」のうち、①国家主権と領土は関連させて取り扱い、日本の平和的解決努力を取り上げる、②「わが国の安全保障と防衛」は国際法と関連付け、③国際貢献は国連による持続可能な開発のための取り組みも取り上げることを要請。
- ・「我が国の安全保障と防衛については、日本国憲法の平和主義について理解を深めることができるようにするとともに、我が国の防衛に関する基本的な事柄にも触れながら、変化する国際情勢の中で、我が国の安全が世界の平和の維持といかに不可分に関連しているかについての理解を深めることができるようにする」。

東京書籍版『公共』教科書(2022年)

- ・第9条…「徹底して戦争と武力の放棄を定めた憲法は世界としてもまれ」(47頁)
- ・「日本国憲法は徹底した平和主義をかかげて出発したが、世界はすぐに米ソ対立の冷戦時代に突入した」(168頁) …警察予備隊(1950年)→保安隊(1952年)→自衛隊(1954年)
- ・自衛隊違憲説に対し、憲法は個別的自衛権を否定しておらず、「自衛のための必要最小限度の実力」は合憲という政府見解の紹介。
- ・砂川事件、恵庭事件、長沼ナイキ基地訴訟に見る統治行為論の紹介。
- ・「自衛隊は着実に増強され、世界有数の軍備になっている」(169頁)
- ・安全保障関連法制定(2015年)…「憲法9条で認められる自衛の範囲をこえており、違憲であるとの指摘もある」(173頁)

【考察】

日本国憲法を文理解釈すれば、本来、自衛隊発足は想定し得ない事態。冷戦の所産としての自衛隊発足。国際社会では軍隊と認識されながら、憲法との整合性を含む国内的な位置

付けが事実上棚上げされる。

- ・日本国憲法…初期対日占領政策(日本の民主化と非軍事化)の一環として制定。
- ・日米安保条約…吉田茂が日本の独立回復と当面の安全保障を確保する手段として選択。
- ・自由民主党…自主憲法制定、駐留外国軍隊撤退による自主防衛の確立を政綱に規定。

岸内閣期の安保改定(1960年)以降、本来別個の背景で誕生した日本国憲法、日米安保条約、自民党の三つが融合し、戦後日本の保守政治と外交・安全保障政策の大枠を規定(拙稿「公民教育のための戦後日本政治史ノート」、『亜細亜大学課程教育研究紀要』第6号、2018年)。1980年代の中曽根内閣は自衛隊合憲論と「専守防衛」原則により、日米防衛協力を強化。矛としての米軍、盾としての自衛隊という位置付けが確定。

【まとめ—公民科教育に残された課題—】

①政治とは何か

…〈協調〉と〈対立〉の二面性。「国家間の協働」によるルール作りの重要性だけでなく、紛争や対立の側面も重視すべき。そこから危機管理、安全保障の発想が生まれる。

②国際連合(United Nations)の意義と限界

…冷戦の到来による安全保障理事会の五大国一致原則の崩壊。国連に期待された国際協調・平和維持機能は著しく低下(原彬久編『国際関係学講義』第3版、有斐閣、2006年)。ロシアによるウクライナ侵攻と国連の機能不全を直視すべき。

③軍事力とは何か

…国防は国家の義務であり、かつ、主権国家による軍事力保持は平和構築と矛盾せず(侵略への抑止力、集団安全保障、秩序回復など)。領土問題・拉致問題も学習させるならば、主権者教育の視点から日本国憲法の在り方も課題探求学習の対象になるはず。

④日米安保条約の役割と今後

…他の同盟国が担えない「戦略的根拠地」の役割を果たしてきた日本(小川和久『日米同盟のリアリズム』文藝春秋、2017年)。同時に、「軍事的同盟」にとどまらない役割を戦後日米関係に提供してきた事実をどう位置付けるか。

米による「統合抑止」戦略の展開。岸田内閣による防衛3文書の閣議決定(2022年12月)。矛としての米軍、盾としての自衛隊という役割分担の変化。日本国憲法制定時と異なる時代を生きていることを自覚する必要性。

【プロフィール】

1978(昭和53)年生まれ。学習院大学大学院政治学研究科博士後期課程単位取得退学。博士(政治学/学習院大学)。日本政治外交史専攻。現在、亜細亜大学法学部・高崎商科大学兼任講師。著書『昭和戦前期の政治と国家像』(木鐸社、2019年)、共著『昭和史研究の最前線』(朝日新聞出版、2022年)など。

一般口演

【WELL-BEING 領域】

15:55-17:15

A会場（8階 801教室）

座長 角田 弘子（日本ウェルネススポーツ大学）
平山 弘（阪南大学）

A-1 ヒューマンライツとSDGs

○角田 弘子（日本ウェルネススポーツ大学）

A-2 ウェルビーイング時代におけるブランド価値の重要性

○平山 弘（阪南大学）

A-3 生きがいとしてのコミュニケーションー林芙美子の作品から見出すー

○ソコロワ山下 聖美（日本大学芸術学部）

A-4 文化活動を通じた生きがい～尾崎翠を中心に～

○野中 咲希（日本大学）

A-5 「生きがい」としてのマンガについて

ー石ノ森章太郎作品を例としてー

○伊藤 景（日本大学芸術学部文芸学科）

A-1

ヒューマンライツと SDGs

○角田 弘子^{*1}

^{*1}日本ウェルネススポーツ大学

キーワード:ヒューマンライツ、体罰禁止、学校・スポーツ

【目的】

2017年、国連教育科学文化機関(ユネスコ)は「カザン行動計画」を発表し、2030年までに「子どもに対する虐待、搾取、人身売買およびあらゆる形態の暴力および拷問」を廃絶するという、国連の「持続可能な開発目標」(SDGs)にスポーツがどのように貢献するかをまとめているⁱ。

また、2018年、ユニセフは日本ユニセフ協会が主導するプロセスで、スポーツにおけるあらゆる形態の子どもへの暴力の撲滅や、子どもの被害者に対する効果的な相談・通報窓口と救済手段の確保等、10の重要な原則をまとめた「子どもの権利とスポーツの原則」を発表したⁱⁱ。これは、ユニセフが2010年に発表した報告書「スポーツにおける暴力からの子ども保護」に続くものである。

この2つの文書にはともに、スポーツにおける子どもへの虐待の広がりを明らかにし、データ収集の改善や教育、意識啓発のための研修(アウェアネス・トレーニング)等、スポーツをする子どもの保護を強化するための提言が含まれているⁱⁱⁱ。さらに日本では、2020年4月に親などによる子どもへの体罰が法律で禁止となった。このような世界的な流れの中、日本での学校やスポーツ現場における近年の動向を考察する。

【方法】

NHK放送文化研究所「中学生・高校生の生活と意識に関する調査」(NHK放送文化研究所2003)や公益財団法人セーブ・ザ・チルドレン「子どもに対するしつけのための体罰等の意識・実態調査」^{iv}と近年の法律を併せて検討する。

【結果】

図1は「あなたはなぐられたことがありますか。誰からですか」への質問の回答である。

学校の先生に殴られたことのある中学生(小学生の時期の経験を含む)は1982年の31%から2002年の7%へと減少している。高校生は中学生以前の時期の経験も含むので中学生よりは高い比率であるが、41%から10%へと急減している。父親からの体罰は、教師と同様の減少傾向が見られるが、教師と異なり、1990年代以降は横ばいに転じている。

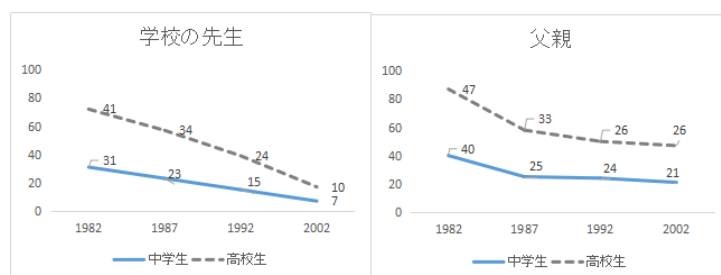


図1 学校における体罰の減少 (%)「中学生・高校生の生活と意識に関する調査」

セーブ・ザ・チルドレンの2021年調査結果報告書では、子どものこころを傷つける罰についての意識が高まり、こころを傷つける罰について、2017年調査と比較して容認する回答者の割合が減った。しかし、依然として「怒鳴りつける」「にらみつける」を容認する人が、それぞれ約4割、約3割存在した。

【考察】

子どもに対するあらゆる形態の暴力をなくすという「持続可能な開発目標」(SDGs)のゴール実現のため2016年、国連事務総長は「子どもに対する暴力撤廃のためのグローバル・パートナーシップ」(GPeVAC)^vを設立した。日本政府は2018年、暴力撤廃グローバル・パートナーシップのパスファインディング国・理事国になり、「日本は、国内的にも国際的にも、子どもに対する暴力を撲滅するため、積極的に取り組む」と誓約した^{vi}。日本の子どもには、あらゆる形態の身体的・精神的暴力や虐待から保護される権利がある。これらの権利は、日本の国内法と国際人権法の両者によって保障されている。国内法では、「児童虐待」を最も包括的に禁じているのは、2000年に成立した「児童虐待の防止等に関する法律」である^{vii}。

東京都の「体罰の定義・体罰関連行為のガイドライン」では、暴言や行き過ぎた指導は、体罰概念に含まれないが、体罰と同様に、教育上不適切な行為であり許されないものであり、「指導に当たっては、生徒の人間性や人格の尊厳を損ねたり否定するような発言や行為は許されません」と明記されている。これに関する事例では、2021年3月に、小学3年生の児童に対し「ロボット以下」「ぼけ」などの暴言を浴びせた教諭が6か月の減給処分を受けている。

2022年時点で子どもに対する体罰を全面的に法律で禁止している国は65ヶ国ある(2020年2月に日本が59番目の体罰全面禁止国と承認)。法改正が行われた今、子どもに関わる法律や施策に関わる機関による、大規模で長期的な啓発活動が必要である。また、子ども自身に対しても、暴力を受けない権利や声をあげる権利などの、子どもの権利に関する啓発を行うことが重要であり、しっかりと法を遵守し、暴力のない社会を育まなくてはならない。

ⁱ UNESCO, “Kazan Action Plan,” 2017, <https://www.un.org/development/desa/dspd/wp-content/uploads/sites/22/2018/06/10.pdf> (accessed September 14, 2022); UN Sustainable Development Goal Indicators, Goal 16, Section 2.

ⁱⁱ UNICEF, “Children’s Rights in Sport Principles,” 2018, <https://childinsport.jp/> (accessed September 14, 2022).

ⁱⁱⁱ UNICEF, “Protecting Children from Violence in Sport,” 2010, https://www.unicef-irc.org/publications/pdf/violence_in_sport.pdf (accessed November 29, 2022).

^{iv} 公益財団法人セーブ・ザ・チルドレン「子どもに対するしつけのための体罰等の意識・実態調査」
https://www.savechildren.or.jp/news/publications/download/php_report202103.pdf
(accessed January 10, 2023)

^v End Violence Against Children, <https://www.end-violence.org/> (accessed November 29, 2022).

^{vi} Speech by Parliamentary Vice-Minister for Foreign Affairs Manabu Horii at the 2030 Agenda for Children: End Violence Solutions Summit, February 15, 2018, https://www.mofa.go.jp/fp/hr_ha/page3e_000826.html (accessed November 29, 2022).

^{vii} Child Abuse Prevention Law, Article 3, 2000.

A-2 ウェルビーイング時代におけるブランド価値の重要性

○平山 弘*¹

*¹ 阪南大学

キーワード: ウェルビーイングの本質、ブランド価値、ブランド・コミュニケーション戦略

【目的】

ウェルビーイング (well-being) の定義はそれぞれの業界や立ち位置 (positioning) によってさまざまな日本語訳がなされている。たとえば、国立教育政策研究所は OECD (経済協力開発機構) の PISA ((Programme for International Student Assessment: 生徒の学習到達度調査) 2015 年調査国際結果報告書を受けて、ウェルビーイングを生徒の「健やかさ・幸福度」と訳している¹。また、世界保健機関 (WHO) 憲章前文においてもウェルビーイングが使われており、公益社団法人日本 WHO 協会は新たな仮訳を提示している。それは、「Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity. (健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが 満たされた状態にあること) としている²。

ここ数年来、爆発的な感染力で世界中を席捲している新型コロナウイルスの存在は政府や地方公共団体、人々の生活行動様式に大きな影響を与えており、単なる健康といった指標から、より人々の生き方や地球環境に配慮した行動も含め、国際連合 (联合国) が現在推進している SDGS 的な思考とも重なる、まさしくウェルビーイングの時代を迎えていると言えよう。本研究の目的は社会の不安定要因や不確実性の下では、消費者の生活行動が変化し、いきおい情報探索コストが拡大していくことになる。その意味でもその軽減化には「ブランド」の名声、そのブランドの持つ本質を意味する「ブランド価値」がより重要となってくることから、新たなプラットフォームの構築やブランド・コミュニケーション戦略の観点から明らかにすることになる。

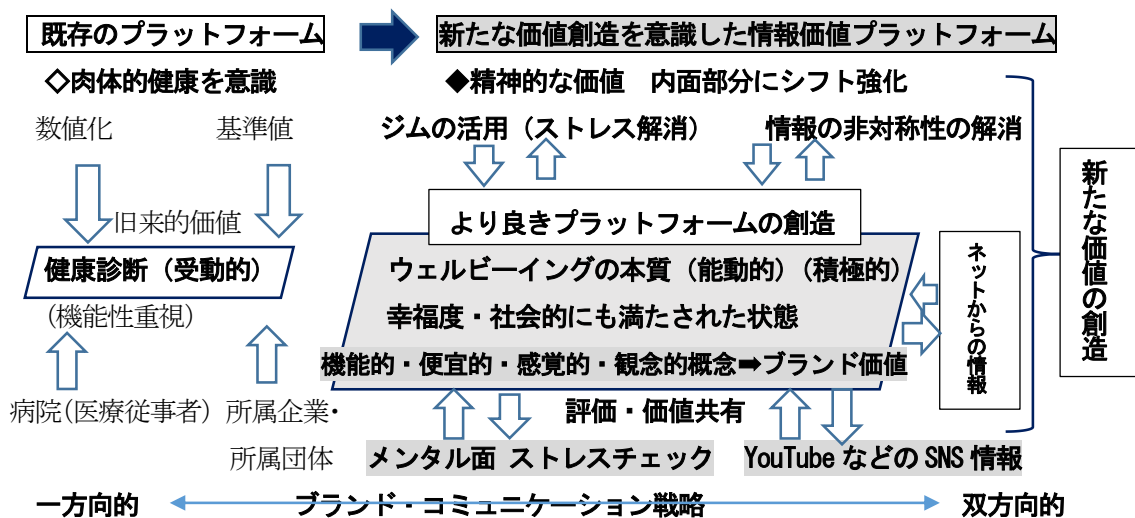


図1 新たなブランド価値創造を意識した情報価値プラットフォーム (出所:筆者作成)

【方法】 ウェルビーイングに関わる定義やその解釈から見えてくるものを可視化することで表される、関係する価値をプラットフォームに落とし込むことで、新たなブランド価値創造のかたちを明示化する方向性で考える。

【結果】 既存の価値と、新たな価値が包含される情報価値プラットフォームを図式化して、図1として示すことにする。より良きプラットフォームの創造には機能的・便宜的・感覚的・観念的概念を内包する「ブランド価値」を涵養するための双方向的な意味合いを持つブランド・コミュニケーションの存在が大きいということになる。

【考察】 既存のプラットフォームでは、肉体的健康を意識したものであり、健康とは普段の健康診断に代表されるように、極めて数値化され、それはある一定の範囲内において基準値が設定されていることから理解できる。そのことは荒川(2017)がヘルスケア産業を「巨大で有望な市場ではあるが、健康課題に敏感なシニア・高齢者層を中心顧客とした『受け身』産業」ⁱⁱⁱと評しているように、機能性を重視した受動的な価値観で支配されていると思われる。ここでの登場人物は当然のことながら受診者本人、病院(医療従事者)、所属企業・団体、及び基準値を設定する世界的機関や国内外の学界、健康に関わるサービスを提供している関係機関から構成されている。

一方で、新たな価値創造を意識した情報価値プラットフォームにおいては精神的な価値が中心となっており、内面部分にシフト強化されている。ウェルビーイングの本質は幸福度・社会的にも満たされた状態を意味することから、既存のプラットフォームとは異なり、能動的・積極的な姿勢が見て取れるのである。それは単なる肉体的強化志向ではなく、日々蓄積されるストレスの解消であったり、専門性の高い YouTube からの情報発信を受容できる姿勢など、現代に生きる人々の自身のメンタル面も含めた過去・現在・将来へとつながる新たな価値創造の場として提示されることになる。

その際さまざまな情報探索コストが見込まれるため、信頼的価値や安全・安心面からの消費者心理を含め、そこにはやはり一定の評価された価値共有が求められることから、その製品・サービスの持つブランド価値、それを利用する人々にとって有益なものであり、機能的価値・便宜的価値・感覚価値からなるものが重要になる。SNS は製品・サービス提供者とそれを受容する側の間の隔たりや情報の非対称性を解消するはたらきがあり、製品・サービス提供者にとっては、SNS を通じた的確な意思疎通とブランド価値を高めるためのブランド・コミュニケーション戦略が必要となる。

【まとめ】 ウェルビーイング時代におけるブランド価値の重要性ということで、筆者なりの観点から考察してきたが、その本質的なことは自らが自らの幸福度と社会的にも満たされた状態を想定し、積極的に自らのライフスタイル設計に関与していくことに他ならないと言える。そのためには新たな価値創造を意識した情報価値のプラットフォームをブランド価値の観点およびブランド・コミュニケーション戦略を通しての枠組みづくりが非常に大きな意味を持つことになると考えられる。

【謝辞】本研究は 2022 年度阪南大学産業経済研究所助成研究(A)の研究成果の一部である。

ⁱ <https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/#PISA2015> 国立教育政策研究所 HP (採録日 2023 年 1 月 6 日)。OECD の PISA2015 の同報告書ではウェルビーイング (well-being) を「生徒が幸福で充実した人生を送るために必要な、心理的、認知的、社会的、身体的な働き (functioning) と潜在能力 (capabilities) である」と定義している。

ⁱⁱ <https://japan-who.or.jp/about/who-what/charter/> 公益社団法人日本 WHO 協会「世界保健機関 (WHO) 憲章とは」(採録日 2023 年 1 月 6 日)。

ⁱⁱⁱ 荒川雅志、NPO 日本スバ振興協会編著 (2017)『ウェルネスツーリズム～サードプレイスへの旅～』フレグランスジャーナル社。

A-3

生きがいとしてのコミュニケーション ー林芙美子の作品から見出すー

○ソコロワ山下 聖美*¹

*¹ 日本大学芸術学部

キーワード: 生きがい、コミュニケーション、文学

【目的】

文学には、支配者側からの統制された情報や歴史の教科書のような史実のみならず、当時を生きた庶民の生の声や感性が描かれており、これらが時を超えて現代を生きる我々の心に寄り添い、今を生きるヒントを与える。つまり、文学は現実を生きる人々にとっての「生きがい」（人の生を鼓舞するもの）として機能する性質をもっており、他のすべての「生きがい」と同様に、生きるための重要な要素であると考えられる。

では人々にとっての「生きがい」を生み出した作家自身にとっての「生きがい」は何であったのだろうか。本発表で取り上げる作家・林芙美子（1903年～1951年）にとっての「生きがい」は、様々な土地で出会う人々とのコミュニケーションであったと仮定する。これを証明するために、四国への旅路を記した「扁舟紀行」を取り上げて、林芙美子における旅先でのコミュニケーションの意味を探りながら、「生きがい」との関連を明らかにすることを本発表の目的とする。

【方法】

「婦人公論」1941年7月～1942年1月に連載された「扁舟紀行」の初出をテキストとし、語り手である林芙美子が訪れた土地と出会った人々に着目しながらそのコミュニケーションの様子を抽出し、分析、考察する。

【結果及び考察】

「扁舟紀行」は、淡路島から四国の各地を巡り、その土地の風土や人々との交流を記すエッセイである。作品中には様々な風物や、その土地に生きる人間たちが描かれる。特徴的なのは、人々を描く際には必ず、〈匂い〉や〈味〉などの、五感の一部を伴って表現がなされることだ。交流をもった主な人々と、彼らと共に記される感覚表現を以下に挙げる。

- ・瓦屋の清見一家（淡路島）「私はこの素朴な瓦屋の匂いを忘れることができない」（7月号 99頁）
- ・淡路人形販売人の和田氏、人形の座元をしている吉田伝次郎氏、「古い人形つかい」の不動氏（淡路島）「部屋へ入ると、古い人形の匂いがした」（7月号 100頁）
- ・澄江文庫の渡邊重資氏（淡路島）「おいしいリプトンの紅茶を何杯もおかわりしてよばれる」（8月号 182頁）
- ・車内にて、前の座席に座っているおかみさん（徳島）「麦の匂いはいいものだとすると、おかみさんも、麦の匂いだけは子供も好くと自慢していた」（8月号 187頁）

・板東町の食品店の「おばあさん」(徳島)「おばあさんが自慢するだけあって、なかなかおいしいうどんだった」(8月号 188頁)

・霊山寺で出会った「二人のお百姓のおかみさん(一方の名は吉井氏)」(徳島)「うれた麦はゆさゆさと風に鳴って、薫るようないい香りを運んで来る」(8月号 190頁)「なまぬるいらムネだったけれどもいのちの水のように美味しかった」(8月号 192頁)

以上のように、旅先での人々とのコミュニケーションを描写する際には、多くの場合、匂いや味の記述が伴う。つまり、芙美子は自らの感性をもって人々を受容し、記憶している。ちなみに、芙美子はこの作品以外にも多くの紀行エッセイを残しているが、風土だけではなく、必ずそこに生きる人々を描くという特徴をもっている。すなわち、彼女にとって、風土と人は切っても切り離せないものであり、人々を五感で受容し、記憶することは、土地そのもの、さらに言えば旅そのものを五感で感じ、記憶し、描くことにつながっていく。

このことは、「二人の百姓のおかみさん」の「うっそうと繁った木立のなかへ、百姓のおかみさんはすたすたはいつてゆき、子供のようなかつこうではばかりをしている」という行為に象徴される。芙美子はこれを見て「私はおかしくて仕方がなかった。自然にふるまえるおかみさん達をうらやましいと思う」(9月号 228頁)と感じているが、「自然」にふるまえ、「自然」に溶け込むおかみさんとは、すなわち、自然としてのその土地、風土である。旅先の人々とコミュニケーションをするということは、風土とのコミュニケーションを行うことに他ならないのである。その際に重要なのが、何よりも〈匂い〉や〈味〉などの感性のアンテナを研ぎ澄ますということなのであろう。

こうしたコミュニケーションの有り様が描かれる一方で、「扁舟紀行」には、時代特有の不安が、芙美子の気持ちを通して描かれている。1941年といえば日中戦争のさなかであり、アジア太平洋戦争開戦前夜である。配給、物資の不足、出征、愛国婦人会などの戦時中を表す記述が散見されるとともに、漠然とした不安を象徴するものも描かれている。例えば、二度も引いてしまったおみくじの凶や、「鳴戸のうずしお」の激しさに恐れる描写などである。こうしたものに象徴される不安が、旅路におけるコミュニケーションによってほのかな「生きがい」として変化していく様は次のように描かれている。

「書齋にこもって眺める世界地図の色どりは不気味だけれども、旅をしてみると、地図なんか少しも怖いとも思われない強い生き抜く力を与えられる。旅へ出てみれば誰一人悄気て暮らしている人はいないのだ」(12月号 132頁)

「人生を歪曲して、不安な状態に考え、それを一つの思想だとしている都会の妙な生活を離れてみると、このきれいな田舎の健康な村の生活が非常に美しく心に映る」(1月号 180頁)

【まとめ】

日中戦争のさなか、アジア太平洋戦争の前夜に描かれた「扁舟紀行」には、独特な閉塞感を伴う不安に満ちた空気と、そこに生きる人々の日常が描かれていた。旅路における彼らとの感性を伴ったコミュニケーションを通じて、どうしようもなく湧きいずる不安を克服し、ほのかな「生きがい」が生じる過程を林芙美子は作品の中に描いていることを、本発表では見出した。

A-4 文化活動を通じた生きがい～尾崎翠を中心に～

○野中 咲希^{*1}

^{*1} 日本大学

キーワード: 尾崎翠、日本近代文学、チャールズ・チャップリン

【目的】

尾崎翠(1896～1971)は小説、短歌や詩、評論など様々な形の作品を遺した女性作家だ。代表作『第七官界彷徨』(1931)は、少女小説のはしりとも言われ、その独特な世界観が読む人を惹きつける。しかし一時は、作品の入手が難しい点や執筆期間が短かったことなどから「幻の作家」とまで言われていた。現在では、「尾崎翠フォーラム」が故郷の鳥取で開催されるなど再評価が進んでいる。

本論では、創作者としての翠だけではなく生きがいとしての創作活動と他者の創作物を受け取る翠の姿を作品や評論などから紐解く。とりわけ、当時としてはまだ新しい娯楽であった映画に焦点を当て、ウェルビーイングのひとつに数えられる「何かへの没頭」が生きがいにつながる点を尾崎翠の目を通して論じる。

【方法】

本稿ではチャップリンについて言及している尾崎翠の作品「杖と帽子の偏執者 チャアライ・チャップリンの二つの作品について」(1933)と「木犀」(1929)を中心に論じた。作家のバックグラウンドを探ることで、文化活動を行うこと、映画を鑑賞することで作者や作品を好きになることすなわち「何かへの没頭」を行うことで得られる生きがいについて考察を行った。

【結果および考察】

1 作品から読み取る文化活動について

チャップリンに言及している文書に触れ、翠のもつ恋愛感情がスクリーンを通じたことで生まれる感情であることを示した。

2「杖と帽子の偏執者 チャアライ・チャップリンの二つの作品について」などからみる翠の偏愛

1933年9月に『因伯時報』に掲載された「杖と帽子の偏執者 チャアライ・チャップリンの二つの作品について」では、チャップリンの代表作のひとつとしても数えられる『黄金狂時代』(1925)とその後に発表された『サーカス』(1928)の批評を行っている。テキスト内にて翠はまず、「フィッセルの戯曲「チャップリン」の中の一節を、チャアライ礼賛の字幕として借りよう。」と書く。ここからは、翠がチャップリンの映画だけでなく、それに付随する戯曲や評論なども読んでいたであろうことが推測できる。文中では何度も「チャアライ！」と呼びかけ、呼びかけたくなる理由を「時々私達は直接君に呼びかけたくなくなってしまふ。こんな真理は、君自身と君の帽子とのすばらしい相関偏執からくるのだ」と語る。翠のチャップリンへの愛情と没入感がわかる文章である。

以上を踏まえつつ、「炉端雑話」(1930)(翠が参加した座談会)での発言やテキスト最後の段落等から何かに夢中になる喜びや非現実への恋慕が翠にとっての生きがいのひとつであったと結論付けた。

3 小説「木犀」で描かれるチャップリン

1929年3月に『女人藝術』より「木犀」は発表された。「木犀」は、主人公が妻に逃げられた旧友のN氏への気持ちと、スクリーン上のチャップリンへの恋心に近い何かの間で揺れ動く短編小説だ。主人公と翠の共通点として、チャップリンへの感情、田舎を離れて暮らすこと、決して裕福とは言えない生活、創作活動をしながら親からの仕送りをもらっていた点などを挙げた。

文中で明確な恋心や愛情が示されているのはN氏に対してではなく、チャップリンに対してだけである。主人公は、幕の中の人であるチャップリンに「心臓を捕らえ」られるのだ。それらの点から主人公がチャップリンの映画を生きがいとし、そして強い恋愛感情を抱く対象として描いた作品であると位置づけた。映画館の帰り、主人公がチャップリンと歩きながら会話をするシーンでは、隣を歩くチャップリンは実在のチャップリンではなく、想像が現実を超えた描写であるとした。まさに翠自身が「炉端雑話」にて語ったような「頭の中でエロティックを感じ」ている瞬間であろう。

また、詩作品「チャアライ・チャツプリン」では哀愁を「あきかぜ」として表現することで、翠の持つ秋のイメージがマイナスではなく、生涯を彩る美しい感情として、喜びや怒りよりも穏やかな心地よさをもって表現されることを示した。

【まとめ】

ここまで尾崎翠における文化活動、とりわけ映画観賞をすることによって得られる生きがいについて論じた。文化活動に勤しむことは、時に悩みにもなるが翠にとってウェルビーイングのひとつに数えられる「何かへの没頭」へと繋がるのが浮き彫りとなった。翠がチャップリンに触れた作品は他にも「映画漫想(一)」(1930)や「影の男性への追慕」(1930)などがある。本論では、上記の作品に触れられなかったため今後再考していきたいところである。

また、同年代にチャップリンに触れ、感銘を受けた作家が数多くいることも確かだ。新しい娯楽として登場したばかりであった映画を鑑賞することで得られる没頭や文化活動を通した生きがいについてさらなる研究の余地があることは言うまでもない。

A-5

「生きがい」としてのマンガについて —石ノ森章太郎作品を例として—

○伊藤 景*¹

*¹ 日本大学芸術学部文芸学科

キーワード: マンガ、マンガ家と読者、マンガ雑誌

【問題と目的】

日本のマンガは、今や日本の文化として国内外においても認識されている。しかし、日本の主流文化に対してサブカルチャーやポップカルチャーと呼ばれているように、未だに下位的文化として位置付けられているのが現状であるが、2022 年にインプレス総合研究所より発表された「2021 年度の電子書籍市場規模」ⁱ⁾の調査結果によると、電子コミックは前年度よりも 658 億円増加の 4660 億円となり、電子書籍市場シェアにおいて 84.6%をも占めている。このように、マンガの市場は紙媒体のみならず電子書籍市場へと拡大することによって、多くの読者を獲得しているといえよう。また、「性年代別電子書籍利用率」ⁱⁱ⁾によると「60 歳以上」のユーザーについて、男性では全体の 34.9%が電子書籍を利用したことがあり、女性も 22%が利用したことがあるという少なくはない数字が示されている。なお、この調査では利用している電子書籍サービスやアプリも同時に調査しており、上位5位は「LINE マンガ」「ピッコマ」「Kindle ストア」「少年ジャンプ+」「マガポケ」となっており、電子マンガの配信サービスが4つを占めていることから、電子書籍利用者の多くが電子マンガの読者でもあるとあって差し支えないだろう。

また、総務省統計局による「社会生活基本調査結果」において「年齢、行動の種類別総平均時間(週全体)」ⁱⁱⁱ⁾の余暇活動を表す「3 次活動」にて、15 歳以上が最も時間を割いているのは「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」であった。余暇活動は生きていく上で必ず必要とはいえないが、読書や視聴活動に最も時間を割いているということは、人生を支える活動としてみなすことはできないだろうか。これらのことより、マンガは娯楽の中でも老若男女の垣根なく親しまれている文化として考えられるが、未だ若者向けの媒体であると認識されており、マンガは時代も世代も超えて受容されている媒体であることを明らかにする必要があるだろう。そこで、時代を超えて、新たな読者を獲得し続けているマンガ作品として、作者の没後も多くのリメイク作品及び続編が発表されている石ノ森章太郎による「サイボーグ 009」を中心に、「生きがい」としてのマンガを検討していく。

【方法】

石ノ森によるマンガ作品「サイボーグ 009」は 1964 年に『週刊少年キング』(少年画報社)にて連載開始したマンガ作品であり、「未完の大作」として知られている。石ノ森は 1998 年1月 28 日に 60 歳で亡くなったが、晩年においても『サイボーグ 009』に最終編は絶対にやっておきたい^{iv)}と語っており、ライフワークとして共にあり続けた作品ともいえる。石ノ森にとっても、生涯をかけて描き続けた特別な作品であった。没後、小説版として『2012 009 conclusion GOD'S WAR』(角川書店)が刊行されたことを皮切りに、映像作品としては、「009」「009 RE:CYBORG」「CYBORG009 CALL OF JUSTICE」、マンガでは「サイボーグ 009 完結編 conclusion GOD'S

WAR]「CYBORG009 CALL OF JUSTICE」「サイボーグ 009 BGOOPARTS DELETE」、クロスオーバー作品としては「サイボーグ 009VS デビルマン」が発表されており、現在も「8マンVS サイボーグ 009」が連載されている。このように作品が未完となっても、次世代のクリエイターによって繰り返し作品化されている作品は、類を見ないものである。現代においても熱心な読者を生み出し続ける理由について作品を通して追究していく。

【結果および考察】

「サイボーグ 009」は、石ノ森が初めて読者を意識して描いた作品であり、そのためこれ以前の作品とは異なり、物語に「テーマ性」が存在している。1965年に連載された「ベトナム編」は特に顕著であり、当時実際に発生していたベトナム戦争を舞台に、反戦をテーマに描かれている。そして、1966年には最終章として「地下帝国“ヨミ”編」が描かれ、「サイボーグ 009」は完結をした。しかし、読者からはエンディングに対しての批判が殺到した。これは、ラストシーンにおいて主人公の 009 と仲間の 002 が死を迎える衝撃的なものであったからだが、この時に読者の要望は「二人を死なせないでほしい」というものであった。このことから、二人が生き残るといったストーリー展開であれば、「サイボーグ 009」は石ノ森の構想通りに終わりを迎えていたものと考えられ、「サイボーグ 009」は作者の手も離れ、読者のための物語と姿を変えたといえよう。石ノ森はこの作品をキャラクターマンガとして創作しており、登場人物たちは作者の手を離れ、読者の友人や生きがいの対象として存在するようになっていたのだろう。「サイボーグ 009」は作品自体のファンクラブが存在しており、2022年には結成 45 周年を迎えている。現在もファンクラブの機関誌が刊行されていることを考えると、マンガが読者にとって「生きがい」として人生に影響を与えているといえよう。

【まとめ】

「マンガ」は読者にとっての生きがいであるとともに、マンガ家にとっても生きがいであったといえる。石ノ森は「サイボーグ009」を自身の手で完結することはできなかったが、脳内の構想をノートとして遺しており、このノートを手がかりに、最終章の構想を次世代のクリエイターが創作している。読者が、「サイボーグ009」を最終章へと導くクリエイターとなり、物語は紡がれ続けしていく。1つのマンガ作品が時代も世代も超えた上で、作品が生み出され続けている事実は、マンガが老若男女問わず多くの人の人生に影響を与えているといえよう。

i 落合早苗・インプレス総合研究所『電子書籍ビジネス調査報告書 2022』(2022年8月11日、インプレス)17頁

ii 前掲書、225頁

iii 総務省統計局「日本の統計 2022」(<https://www.stat.go.jp/data/nihon/index2.html>) (2023年1月22日確認)

iv 石ノ森章太郎『絆 不肖の息子から 不肖の息子たちへ』(2003年12月30日、鳥影社)17頁

学校法人タイケン学園グループ

TAIKEN

2023年、創立26周年を迎えました。



◆大学

日本ウェルネススポーツ大学

◆専門学校

日本ウェルネススポーツ専門学校

日本ウェルネススポーツ専門学校 広島校

日本ウェルネススポーツ専門学校北九州校

日本ペット&アニマル専門学校

日本ウェルネス歯科衛生専門学校

日本ウェルネスAI・IT・保育専門学校

日本グローバル専門学校

日本グローバルビジネス専門学校

◆高等学校

日本ウェルネス高等学校

東京・神保町・利根・坂戸・信州筑北・名古屋

今治本校・広島・北九州・沖縄

日本ウェルネス宮城高等学校

日本ウェルネス長野高等学校

日本ウェルネス高等学校茨城

◆保育園・幼児教育

ウェルネス保育園

大曲・江刺・赤井・矢本・大崎・東松山・志木・成増・成増第2・茅ヶ崎

佐倉・ユウカリが丘・君津・レイクタウン越谷・一宮・彦根・京田辺

◆教育研究・福祉・その他

公益財団法人日本幼年体育協会

社会福祉法人タイケン福祉会

一般財団法人日本健康・スポーツ教育学会

株式会社タイケンキャリアカレッジ

タイケン株式会社

連絡先：学校法人タイケン学園 法人本部

〒175-0094 東京都板橋区成増1-12-19

TEL: 03-3938-8689 FAX: 03-3938-7520

URL: <https://www.taiken.ac.jp>

一般口演

【スポーツ・教育領域】

15:55-17:30

B会場（8階 802教室）

座長 橋本 純一（日本ウェルネススポーツ大学）
富川 力道（日本ウェルネススポーツ大学）

- B-1 民族スポーツの改革実践と問題点
—内モンゴルにおけるブフ競技規則をめぐる議論を中心に—
○富川 力道（日本ウェルネススポーツ大学）
- B-2 スポーツ観戦空間論～well-beingの視点から～
○橋本 純一（日本ウェルネススポーツ大学）
- B-3 高校野球が幼少年に夢を提供するために
～東京ドーム開催から幼少年に与えるインパクト～
○武井 克時（日本ウェルネススポーツ大学）
- B-4 高校陸上競技部部員の主体的取り組みの重要性
～インターハイ総合優勝するまでの17年間の監督・指導の分析を通して～
○塚本 敏久（日本ウェルネススポーツ大学）
- B-5 コロナ禍における中学生の走力に関する研究
○本間 一輝（日本ウェルネススポーツ大学東京）
- B-6 男子新体操の小学校低学年における俊敏性と経時的変化
○藤井 祥己（日本ウェルネススポーツ大学）

B-1 民族スポーツの改革実践と問題点 —内モンゴルにおけるブフ競技規則をめぐる議論を中心に—

○富川 力道^{*1}

^{*1} 日本ウェルネススポーツ大学

キーワード: 民族スポーツ、内モンゴル、ブフ(モンゴル相撲) 競技規則

【目的】

2019年9月中旬、内モンゴル自治区フフホト市で内モンゴル・ブフ協会(以下、「ブフ協会」と略す)は総会を開き、「改定内モンゴル・ブフ協会規約および内モンゴル・ブフ競技総則」(以下「新規則」と略す)を採択した。しかし、総会后その新規則は総会の場において議論を伴わず、強硬採択されたことなどが明らかになり、社会的批判を浴びた。なぜ「ブフ協会」はそこまで新規則を強行しようとしたのか、その一連の行為は一体どう解釈すれば良いのか。何か黒幕でもあるのだろうか。

筆者は、三年間にわたって行われた、新規則をめぐる議論の時間的長さ、ほぼ全自治区を網羅した地理的広さ、レスリング、柔道など近代スポーツ関係者、ブフ研究者、ブフ愛好者を巻き込んだネット世論の活発さ、そして最終的にその主管部門である内モンゴル自治区民政庁、体育局などの公的機関に陳情するまでに発展した複雑さなどからして、けっして看過できない問題であると考えている。換言すれば、それは内モンゴルにおけるブフ文化のあり方に大きな影響を及ぼしかねない出来事だったのである。本研究では、「ブフ協会」と新規則をめぐる議論を整理し、その経緯と問題の所在を明らかにしたい。

【方法】

2019年9月から2022年8月ころまで、内モンゴル自治区においてSNS、特にWechatによるブフ情報発信グループを媒介して行われた議論、「快手」(クアイシュ)というショートビデオアプリを通して発信された「ブフ協会」関係者の発言、「ブフ協会」公布の各種文書、「ブフ協会」に提出した反対派有識者らの「要求書」および自治区民政庁などの公的機関への陳情書と主管機関より公布された関連公文に基づき、分析を行う。

【結果および考察】

2019年9月から「ブフ協会」をめぐる議論が起こった経緯は以下の通りである。

- ① 2019年9月17日、ブフ協会はその総会において討論を伴わない新規則を強行採択。
- ② 同常務理事トゥムル氏によるブフの歴史の偽造発言。議論のきっかけとなる。
- ③ 2019年10月中旬、ブフ協会はフフホト市で新規則に基づき、力士への「ジャンガー称号」の追加授与に関する会議を開催(後に1949年から2022年までと範囲を明記)。
- ④ 2020年6月中旬、各地方のブフ協会代表者ら(ブフ協会の一部理事を含む)および体育スポーツ関係者、ブフ研究者らが「ブフ討論会」というWechatグループを開設。

- ⑤ 2020年6月30日、反対派代表ら十数人がフフホト市へ赴き、ブフ協会会長と直談判し、総会の開催と新規則の再討論の要求書を提出。
- ⑥ 2020年7月4日(6日にモンゴル語文書を公布)、ブフ協会より反対派らに対し、外国人(筆者を指す)と結託しているという政治色の強い回答書を公布し、反対派に精神的圧力をかけ、社会的批判を浴びた。
- ⑦ 2020年7月7日、反対派は、上記回答書に対する回答書をSNSで公表すると共に自治区体育総会にも提出。
- ⑧ 2020年7月23日、ブフ協会は二人の「造反」理事の解任と不当発言をしたというトゥムル常務理事の解任を発表(同氏は実際は解任されず)。
- ⑨ 2020年9月9日、内モンゴル自治区体育総会よりブフ協会の新規則の実施を認めない通知を公布(「《ブフ競技規則》に関する自治区体育総会の通知」2020年16号)。
- ⑩ 2021年4月より反対派代表らは三回にわたりフフホト市に赴き、自治区民政部社会組織管理局、自治区体育局、体育総会に陳情書を提出。特に2022年1月12日、6項目からなるブフ協会の違法性を告発した上申書を提出した。
- ⑪ 2022年5月3日、内モンゴル自治区民政部社会組織管理局よりブフ協会に対し、「限期整改通知」(指定期間に改組を行う通知書)を交付したが、各地方ブフ協会がボイコットしたため、これを以てブフ協会の活動が停止された。

「ブフ協会」をめぐる議論の焦点の一つは、内モンゴルにおけるジャンガート・ブフのジャンガー(力士の業績を象徴する首飾り)を称号に切り替えるというもので、もう一つは、大会における取り組みの人為的編成と三回戦以降の指名対戦の併用、つまり称号の高い順で対戦相手を指名していく、現行のモンゴル国ブフ競技規則の一部導入である。しかし、フルンボイルなどの地域でジャンガーをつけないブフスタイルもあり、この規則が内モンゴル全体のブフに適用できないのは明確である。そして強豪力士から若手へ代々譲り渡していく無形文化財の性質を持つジャンガーが力士個人の業績の印である称号に置き換えられれば、その本質が変わってしまい、その文化的伝統が喪失されるおそれがある。また「ブフ協会」が実施しようとするジャンガー称号力士は現役の約8割以上が特定の地域に占められる可能性が高いため、新規則が特定の地域の力士を配慮したきわめて不当なものであったことが浮き彫りになった。一方、「ブフ協会」に100万元(約2千万円)投資すると口約して新会長に就任したガル氏は自分が経営する観光地にブフ大会を開き、入場料を取って利益を上げると明言したという証言がSNSで複数回発信され、ブフの私物化と非難された。

【まとめと今後の課題】

「ブフ協会」の諸行為はブフを私物化し、特定の地域のために競技規則を改定しようとした暴走である。ブフの発展を見据えた改革とは到底言えないものであった。今後内モンゴルにおけるブフ事業を担える「ブフ協会」の再建と合理的競技規則の改定が急務である。

B-2 スポーツ観戦空間論～well-beingの視点から～

○橋本 純一*¹

*¹日本ウェルネススポーツ大学

キーワード:スポーツ観戦空間、幸福、スタジアム

【緒言/目的】

約20年前に開催された2002FIFAワールドカップに際して、開催された日本の10の自治体では少ないところで230億円(ノエビアスタジアム神戸)、多いところで603億円(日産スタジアム)もの巨費が投じられてスタジアムが新築または改築された。しかしながらこれらの施設は現在、その巨大さもあって有効利用が進まず、維持管理に頭を悩ませているところが多い。それは何十年、何百年に一度あるかないかのメガスポーツイベント用に巨大スタジアム設計/建設をしてしまったことが原因と考えられる。

そこには建設場所の問題に始まり、利用者のアメニティ設備の問題、サッカー以外のイベント誘致可能性の問題、多機能性の問題等、様々な解決すべき課題がある。本研究ではこのような日本のスポーツ観戦空間(主にスタジアム/アリーナ)の現状に鑑み、真に望ましいスポーツ・ベニュー(会場/競技場)のあり方について、well-beingの視点からその必要性と可能性を探り、課題解決の一助とすることを目的とする。

【本論】

「みる(観る、視る、見る)」スポーツは、それぞれ、生観戦、テレビ観戦、インターネット/SNS観戦など、様々な形態がある。スポーツがポピュラリティを増大させて来ている日本において、いずれの形態においても、その重要性和意味も増大しているといえる。ここでは上記目的に対応して、みるスポーツのいくつかの重要性を踏まえつつ、ギャラップのウェルビーイングの世界的な指標を用いて、日本と先進欧米諸国のスポーツ観戦空間をクロスカルチュラルなパースペクティブでクリティカルに比較分析するフレームワークから、今後の課題をノーマティブに提示する。

まず、みるスポーツの3つの重要性を挙げて検討する。「健全なアイデンティティの醸成」は、経済の大都市集中、IT革新による情報の拡張は、ローカル(地域)&ナショナルなアイデンティティ、個々のアイデンティティの基盤を極めて弱くしつつある状況ならではのものである。「夢・ファンタジー・願望の享受」は、人間の幸せや生き甲斐にとって必要で、選手や監督のみならず地元住民に提供されるものである。「みるスポーツによるコミュニケーション」は、世代、性、地域/民族、職位/階級を超えることができる。このようなみるスポーツ、しいてはスポーツ観戦空間の重要性はウェルビーイングとどのようなつながりを持つことができるのであろうか。

ギャラップ社(アメリカ世論調査研究所)は、国や文化を超えて共通した幸福の要素を統計的に調査する際、ウェルビーイングの5つの指標を掲げている。その中で最も重要だとしているのは、キャリア・ウェルビーイングである。この場合のキャリアとは、仕事だけでなく、ボランティア活動や勉強、子育て等も含んでいる。人生において何かをする時間が充実していて意味があ

と思えるのなら、キャリア・ウェルビーイングが高いと評価される。スタジアム/アリーナを単にスポーツ観戦ためだけの空間ではなく、市民が日常的に集い、学んだり、エンタメで楽しんだり、温浴したりして稼働させることのできる施設にすることによりキャリア・ウェルビーイング向上に直接的に繋がる。

人生で強力な人間関係や親しい友人を持つことが幸せにつながるというのが、ソーシャル・ウェルビーイングである。職場や自宅でのコミュニケーション、電話、友人との会話、電子メールなどの社交的な行動を1日1時間でもすると、幸福を感じてストレスが減ることが解明されている。スポーツ観戦を通じては、友人知人、親子、夫婦、カップル、遠くのサポーター同士でさえも、応援のみならず、グルメ、SNS等でそのコミュニケーションを密にすることが可能である。

ファイナンシャル・ウェルビーイングは、経済的な幸福を指す要素である。これは収入の多さという尺度だけではない。人は自分のためよりも、他人のためや慈善団体への寄付にお金を使うと幸福を感じることが分かっている。また、物を購入するよりも、外食や休暇などの体験を買うとファイナンシャル・ウェルビーイングが高まる。物は一時的に幸福を感じるが、思い出は一生楽しめると考えられているのである。スタジアム/アリーナは工夫、展開次第でこの要素を最大限に高める可能性がある。

フィジカル・ウェルビーイングは、身体的な幸福を指す要素である。適度な運動を行ったり、大声で歌ったりすることは体の健康や幸福につながる。運動を週に2日以上する人は幸せで、ストレスが大幅に少なくなることがわかっている。スタジアム/アリーナで定期的にスポーツができたり、大声でコールや歓声をあげたり、応援歌を大合唱できることの意味は大きいといえる。

自分自身が、他人やグループ、コミュニティに影響を与えられると、幸福を感じるというのがコミュニティ・ウェルビーイングである。献血をしたり、寄付をした後に良い気分になるのも一例で、ある組織に貢献したり参加したりすると幸福感が高まるとされている。また、このような行動を通じて自分の能力に自信が持てるようになる。スタジアム/アリーナにおいて、サポーターグループに加入して様々な活動を展開することは個々人のアイデンティティ、ローカルなアイデンティティの醸成・向上と幸福につながる。

これまでの我が国におけるスタジアム/アリーナは、無駄に大きく維持費ばかりがかさみ、日常的に稼働できないコスト・センターがほとんどであった。今後はそれを経済的にはプロフィット・センターになるよう、また文化的には当該スポーツ文化をメインにしながら多文化共用の多機能複合センターとなるよう設計していくことでウェルビーイングに貢献する可能性がある。

【まとめ】

欧米の一部先進国ではスポーツ観戦空間は多機能複合したウェルビーイング空間として稼働している。我が国においても、エンドユーザー(全てのステークホルダー)にとってのスタジアムが、それぞれの生活を豊かにするポジティブな存在になるべく、クリティカルに見守っていくスタンスとホスピタリティ設計が不可欠である。

【参考文献】

橋本純一著『スポーツ観戦空間論』文化科学高等研究院出版局, 2022年4月.他

B-3 高校野球が幼少年に夢を提供するために ～東京ドーム開催から幼少年に与えるインパクト～

○武井 克時^{*1}、千葉 智久^{*2}

^{*1}日本ウェルネススポーツ大学、^{*2}日本ウェルネススポーツ大学東京
キーワード: 準備、感動、希望

【目的】

2013年9月7日、東京2020オリンピック開催が正式に決まり、この時点から大会運営について計画を練り始めた。首都東京での夏の高校野球大会会場として、観客収容数1万人以上が必要となる準々決勝以上になると、神宮球場以外で大会を開催できる球場を考えた場合東京ドーム以外にない。しかし、東京ドームは読売新聞社系列なので、高校野球に貸していただけるかどうかというところから始まった。

【方法】

読売新聞社の協力で大会開催が可能になり、運営計画を練り始めた。次のネックは、オリンピック関連で球場数が足りなくなり予選日程が長期化すること、それに加えドームを抑えた日にちが決まっているので、その日までに準々決勝まで終わらせること、この2点であった。度重なるオリンピック組織委員会との打ち合わせ、東京ドーム実行委員会での会議を経て計画段階ではほぼ完成してきた矢先、2020年、新型コロナウイルスが発生しオリンピックの1年延期、2021年度も緊急事態宣言が発令され有観客ではありながらも最大5,000人と観客数も定められ、それに加え消毒等も含めて計画の練り直しを強いられ、前途多難であった。

【結果及び考察】

東京ドーム実行委員会を立ち上げ、委員を中心に準備段階の打ち合わせ等が、多数あり大変であった。2021年6月にドームの実施要項を配布してもオンライン会議となり、全くイメージがわからないようで懸念されたが、7月の現地打ち合わせ時に、委員に徐々にイメージがわいてきた。特にチーム付担当は2013多摩国体開催時と同様に固定し、到着からお見送りとした。そこで、チーム付きは、チーム担当と取材担当を合体し、「到着→球場内へ誘導→W-up→打撃練習→攻守決定→試合開始→終了→着替え→取材→お見送り」の流れを1塁側・3塁側各4名ずつの体制に変更した。この流れの中にこまごましたこと、例えば「どこで着替える？ベンチで水が飲めない？ブルペンに行くのにスパイクでは行けない？バッティング練習でスタンドに入ったボールは？バッティング中に外野を走ったり、横でノックしたりしてよい？ベンチ外の部員の出入り(練習手伝い、終了時の荷物運び)」などその場で思いつくこと、発生する問題に対し、1つずつ解決していった。コロナのこともあり、最初は決められたとおりに進めなければならぬかと感じたが、ドームの方もかなり柔軟に対応してくれた。取材では最後にテレビが入るのかどうかで少し混乱し、朝日新聞社との打ち合わせ不足(東京ドーム側も含め)はあったが色々な問題に対して対応できたと思われる。

その結果、出場チームにストレスをかけずに済み、第103回大会は予定通り実施され東京:二松学舎大付属高校、西東京:東海大菅生高校の代表校を決定して無事東西東京大会を終えることができた。史上初の東京ドームでの高校野球大会は、神宮球場、甲子園球場とは違う景色で、選手を含めドームにいた全員が感動して幕を下ろした。

チケットに関してはコロナ過の中での開催となったので、一般席が全て前売りとなり、特に混乱もなかったが、カメラ席の裏の席だけクレームがあり、テレビ放映用のカメラ席の件等、高野連

主導で話をしておけばゴタゴタしなかったと感じる。また、応援席を中心とした警備面では球場内の打合せが中心になり、球場外の打合せが不十分であったため戸惑いが多かったが、初めての東京ドームだったので、想定外のことにに関して応援席をはじめ、球場内外と担当ごとに臨機応変に動いた。また出場校はすべて学校の責任教師が取りまとめてくれたので、混乱なく検温票を回収して、応援席のチケットの販売はスムーズであった。ドーム出場校の校長からは、熱中症の心配をしなくていいので助かったという声もあった。チケット販売後は、責任教師からスタンドの応援責任者にチケットを渡すタイミングは各チーム様々で、応援責任者を探しに行き、説明することも多々あった。

応援席では準決勝では集合待機場所が徹底されてなく、球場外が混乱したり、入口付近に集合してしまった学校もあった。入場はなるべく早く動かしたい運営側(応援席の座り方などを指導するため)と、集合時間前には動かない学校関係者(時間ギリギリに来る生徒がいるため)の間で認識が違い、球場内役員とは違った苦労も多かった。吹奏楽、チアの応援が入り少しバタついたりしたが、決勝戦は比較的スムーズに行われた。また横断幕や応援席をひと席開けるなど、グラウンド側からも指示を出しながら連携して作業に当たり大変良かった。初日はいろいろなきことが起こり2万歩以上歩いた担当者もいたが次第に慣れ、役員の連携がうまく運び、問題なく実施できた。全体を通して出場チーム優先でスムーズに試合に入れることを第一に動いたが、これは事前に決めてあったことをその場で変更したが、事前に決めてあったからできたと思われる。取材関係はカメラの台数、敗戦チーム側カメラの有無の連絡が朝日新聞社とうまくとれてなかったことに加え取材エリアが不透明になっていたので、東準決勝よりテープを貼り対応した。選手の試合間の入れ替えは非常にスムーズにできた。

【まとめ】

今回、使用させていただいて東京ドームの大きさを実感した。規模が大きすぎて荷物を運ぶのも、連絡を取り合うのも大変だったが、3日間ともにほぼ時程通りに進んでいった。特に試合は2時間前後でやはり高校野球は投手力だと感じた。また、応援席はもちろん選手や特に投手が足をつったり、熱中症にならなく快適にプレーできたのはドームならではのことだと思われる。東京ドーム使用という初めての試みであり、感染症予防対策も含め準備・その場での対応や判断など大変なことが多かった大会であったが成功したと思われる。今後はこのような感動・希望を高校野球を通じて、どう幼少年に伝えていか、また Society5.0 にむけて基礎体力の向上と技術の向上をどのようにして融合させていかせるかが大きな課題であろうと考える。

東京都高野連では200年構想事業として、2018年から幼少年対象ティーボール教室を加盟校を通して実施している。当初はバックネット裏特等席をティーボール教室に参加した少年少女を招待する計画だったが、これも中止とせざるを得なかった。しかしチケットを購入して観戦に来た幼少年は多数おり、高校野球の魅力を感じ、自分もいつかはという希望をもって帰宅したことであろう。高校野球は野球を行っている幼少年の夢となっていることは言うまでもない。このような「夢・感動・希望」を高校野球を通じて幼少年に伝えていき、また Society5.0 にむけて基礎体力の向上と技術の向上を融合させていかせるかが今後大きな課題であろう。幼児期の運動遊びが生涯の体力を左右することは、言うまでもない。その一つの方法としてティーボール教室を実施して、スポーツに親しむ場を提供してあげることが、生涯スポーツにつながる一歩として、野球を通じて「幼少年からの生きがい作り」の手助けとなれるよう、今後も研究を重ねていこうと感じた。

高校野球は3Fには①Fair play 公明正大②Fight(勇気)③Friendship(友情)の精神が込められている。これに新しく3k(感謝・感動・希望)を加え、未来に向かって力強く歩んで将来の日本を支えていってほしい。

B-4 高校陸上競技部部員の主体的取り組みの重要性 ～インターハイ総合優勝するまでの17年間の監督・指導の分析を通して～

○塚本 敏久*1

*1 日本ウェルネススポーツ大学

キーワード: 監督・指導法、部活動、主体性

【目的】日本のスポーツの指導現場では、明治時代からトップダウン形式の指導が行われてきた(永島2000)。昨今、スポーツ業界において、体罰をはじめ、度を越えた指導が問題化され、科学的根拠をもとにした指導法が研究されるようになり、『コーチング』が取り入れられるようになってきた。コーチングについては、明確な定義があるわけではないが、ここでは、トップダウン形式の指導を『ティーチング指導』とし、対比する意味合いを含めて『コーチング指導』とする。

本研究では、土浦日本高等学校陸上競技部部員を対象にして、監督として指導した17年間(静岡インターハイで総合優勝するまで)の指導法とチームの熟成程度及び勝敗との関係について分析し、部員の主体的取り組みの重要性について明らかにする。

【方法(17年間の監督・指導の経緯)】監督として指導した17年間における県大会、関東大会、インターハイ別にその大会の勝敗結果を示すと表1のごとくである。これらの結果とその時期における指導法及びチームの熟成度合いについて分析する。

【結果及び考察】17年間を指導法及びチームの熟成程度に着目すると次の3つの時期に大別できる。

表1 大会結果とチームの熟成程度

	年度	茨城県大会	関東大会	インターハイ	自主性・主体性	対話	学び
第1期	昭和50				ティーチング指導		
	昭和51		400MR 6位、400H 優勝	400H 優勝			
	昭和52						
	昭和53						
	昭和54						
第2期	昭和55	総合優勝			『自主性』を重視。ある程度筋道を立てたことに関して、生徒自ら考え、行動できるチームづくりをした。	ある一定の条件下で、生徒との対話をもとに物事を決定した。	状況に応じてオフ日を設けた。
	昭和56	総合優勝	総合優勝	5種競技 優勝			
	昭和57	総合優勝					
	昭和58	総合優勝					
	昭和59	総合優勝	総合優勝				
	昭和60	総合優勝					
	昭和61	総合2位					
	昭和62	総合優勝					
昭和63	総合2位	1600MR 優勝	1600MR 8位	コーチング指導			
第3期	平成元	総合優勝	1600MR 優勝	1600MR 7位、400H 5位、走り幅跳 2位、100M 8位 ※日本選手権1600MR 高校新記録優勝	『主体性』を重視。チームは自治され、生徒自身が責任をもって意思決定した。	生徒との対話をしながら練習メニューを立てた。	・日曜は完全オフ日とし、学習意欲の向上につなげた。 ・競技に関する勉強会を実施した。
	平成2	総合優勝	400M 優勝	400M 2位			
	平成3	総合優勝	総合優勝	総合優勝			

第1期 (昭和50～54年;ティーチング指導)

県大会等の大きな大会において、良い成績を収めることはできなかった。監督駆け出しのこの5年間は、「勝て」「速く走れ」「高く飛べ」「遠くまで投げよ」と記録ばかりを重要視したティーチング指導であった。日頃、『自主性』を強調していたのにもかかわらず、生徒にとっては、それが威圧的で強制的なものに捉えられていたのかも知れない。

第2期(昭和55～昭和63年;コーチング指導、自主性重視)

茨城県大会においては、8年連続総合優勝、関東を制する者は全国を制すと言われる関東大会においては、2度総合優勝を果たした。競技が開始されれば、私の力は無力である。選手は、自らの力を信じ、瞬時に正しい判断を下すことが、勝利の鍵となる。この生徒の自主性の重要性に気が付いた昭和55年の頃からは、コーチング指導を取り入れるようになった。私がある程度道筋を立てたことに関して、生徒自ら考え行動できる自主的なチームづくりをした。

第3期(平成元～3年;コーチング指導、主体性重視)

総合優勝を果たした平成3年静岡インターハイでは、出場選手7名が県記録を更新した。総合優勝するまでの3年間は、チームの熟成のため、次の3点に重点を置いた。

①キャプテンを中心として、部内が自治されるようにした。ミーティングでは、生徒自ら主体的に部内の問題点や改善点などを出し、情報の共有と建設的な話し合いが行われ、責任をもって意思決定がされた。

②生徒と相談しながら練習メニューを立てた。これまで練習メニューは私が立てていたものだったが、話し合い、考えながら計画するようになった。そして、それが実行できたか、その結果どうだったか等を順序立てて問うようにし、傾聴することを心がけた。この繰り返しによって、勝敗につながるような判断が自信をもって行えるようになった。

③日曜日は完全オフとした。学習の時間を確保するため、日曜日は部活動を行わなかった。このことで心身共に休養でき、将来の目標を塾考する時間にもなった。

岸によるとコーチング指導では、「主体性」、「対話」、「学び」の3要因が重視されると述べており、これに基づけば①は「主体性」、②は「対話」、③は「学び」に相応している。特に第3期のコーチング指導は、『自主性』が重視されていた第2期から進化し、『主体性』を重視したことにより、生徒に内発的動機が芽生えている。また、学習指導要領総説第6款の『生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化、科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等、学校教育が目指す資質・能力の育成に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること』からすると、教育的意義も果たしている。

指導者は、結果至上主義ではなく、今一度、教育者としての原点に戻り、生徒が目標を持ち、主体的に切磋琢磨することを通じて、人間関係の大切さや組織を機能させることの重要性を学ぶ場を提供することに努めるべきである。それが、競技力の向上だけでなく、教育的意義も果たし、高校生活における部活動の経験が、その後の生徒の人生を豊かにし、生きる糧となるからである。

【まとめ】17年間の監督指導を分析した結果、部活動における生徒の『主体性』を重視するコーチング指導は、競技力や競技結果の向上だけでなく、教育的意義も果たし、生徒のその後の人生を豊かにし、生きる糧となる。

【参考文献】永島惇正, スポーツ指導の基礎, 北樹出版, 2000

岸 俊行, 野球における指導方法の差異が状況認識および意思決定に及ぼす影響の検討, 福井大学教育地域科学部紀要, 2012

B-5 コロナ禍における中学生の走力に関する研究

○本間 一輝^{*1}、杉町 マハウ^{*1}、温井 一裕^{*2}

^{*1} 日本ウェルネススポーツ大学東京、^{*2} 日本ウェルネス高等学校

キーワード:練習環境、指導方法、心の変化

【目的】

本研究は、コロナ感染症対策として緊急事態宣言が発せられた2020年を中心として前後3年間の東京都中学校体育連盟陸上競技専門部(以下、「中体連」という。)に登録した中学生の走力(100m)の変化について分析し、今後の指導の資とするものである。

【方法】

使用データは、2017年から同22年までの中体連が主催する東京都中学校地域別大会の結果^{*1}を基とした。当該大会は、毎年多摩地区(上柚木公園陸上競技場)、区部(夢の島陸上競技場)に分かれ実施されている大会である。考察に当っては各学年男女別の公認記録^{*2}(以下、「データ」という。)を集計し平均記録(以下、「記録」という。)(単位:秒)、標準偏差で比較することとした。

※1 東京都中学校体育連盟 陸上競技専門部 (tokyoctr.com)

※2 風速2m/s以上の追い風は、公認記録とはならず「追い風参考記録」となる。(日本陸上競技連盟公認記録規定第3条①)

【結果】

(1) 男子

年	1年生				2年生				3年生			
	参加者数	データ数	記録	標準偏差	参加者数	データ数	記録	標準偏差	参加者数	データ数	記録	標準偏差
2017	626	527	14.26	0.9834	518	337	13.24	0.8394	515	367	12.67	0.6537
2018	582	495	14.23	0.9679	564	354	13.14	0.7621	491	408	12.64	0.7100
2019	549	542	14.66	1.0390	515	355	13.20	0.8278	464	450	12.81	0.7333
2020	233	112	14.17	1.1171	446	316	13.23	0.7356	409	219	12.66	0.6897
2021	474	309	14.07	0.9060	555	325	13.24	0.8226	479	358	12.67	0.6919
2022	586	372	13.96	0.8800	570	510	13.34	0.8052	535	299	12.56	0.79156

(2) 女子

年	1年生				2年生				3年生			
	参加者数	データ数	記録	標準偏差	参加者数	データ数	記録	標準偏差	参加者数	データ数	記録	標準偏差
2017	574	527	15.19	0.7583	500	420	14.68	0.7587	437	384	14.42	0.7564
2018	574	574	15.42	0.8994	526	336	14.47	0.7361	466	466	14.39	0.8020
2019	530	502	15.19	0.7589	514	453	14.56	0.6887	449	404	14.38	0.8134
2020	229	110	15.10	0.7594	416	373	14.83	0.7725	316	192	14.56	1.0199
2021	412	351	15.18	0.8840	505	423	14.70	0.7592	431	368	14.39	0.7682
2022	515	316	15.53	0.9913	468	452	14.74	0.8587	447	228	14.73	0.7264

【考 察】

2020年の男女各学年をA群、それ以外の年の男女各学年をB群とし、A群を基準に記録について有意差検定(t検定、有意水準5%)を実施した。結果は、A、B群間に有意差は認められなかったため、記録を中心にその変化傾向について考察する。

(1)男子の状況

2019年の1年生において記録の低下が見られるが、これは主に区部の大会において当日の天候の内、向かい風^{※3}の影響を受けた結果と考える。本事象を除けば2017年から同22年にかけて各学年とも大きな変化はないものとする。

※3:※2のとおりレース中の2m/s以上の追い風は「追い風参考」となり公認記録とはならないが、向かい風に対する風速制限はなく、すべて「公認記録」となる。

(2)女子の状況

男子同様、各年度、また各学年において記録の上下が見られるが、その主な原因は風(風向/風速)の影響を受けた結果によるものと考えられる。(中学生女子は全般的に身体が小さく、また体重も軽いため風の影響を受けやすいと考える。)したがって、主に天候による条件を考慮すれば男子同様大きな変化はないものとする。

(3)全 般

前記(1)、(2)から全体的に差(変化)はないものとする。事実2017年に入学した生徒の3年間の記録の伸びは男子1.45秒、女子0.81秒に対し2020年に入学した生徒の3年間の記録の伸びは男子1.60秒、女子0.37秒である。また、記録だけでなく標準偏差においても大きな変化はない。更に、参考として各年及び各学年別の最高記録、最低記録、中央値、ヒストグラムで比較してもその差は認められなかった。これは、2020年のコロナ感染症対策のため外出自粛等により練習環境が劇的に変化したため、限られた時間内での練習を余儀なくされたことにより、指導者は以前にも増してより効率的、効果的な指導方法を求め創意工夫がなされたこと及び生徒は自由に体を動かせる時間が限られていることを察知し、それまでも増して自ら行動するような心の変化が出てきたものとする。実際に中学校の先生に練習環境等について話を聞いてみると、総じて異口同音に「コロナ前よりも(練習が)充実している。」とのことであった。したがって、これらの相乗効果によってコロナ禍下においても走力は変化しなかったものとする。

【まとめ】

2020年以降練習環境が劇的に変化中、100m競走における走力(記録)が低下しなかったのは、指導者及び生徒達がともにコロナ禍による逆境を克服するため各々が創意工夫、努力した結果であるとする。一方で、中学校の部活動を取り巻く環境も大きく変化しつつある。来年度以降、中体連の主催する試合には中学校単位だけでなくクラブチーム単位としても参加が可能となる。これにより、一部のクラブチームにおいてはチームの名声のため、結果重視に重点をおいた指導が懸念される。中学生は第二次成長期の終盤であり、まだまだ大きな負荷をかけさせられない年代である。生徒が、記録の向上だけを狙った商業主義に巻き込まれず、伸び伸びと運動に打ち込めるような環境の整備に関し、目先にとらわれず将来を見据えたトレーニングを啓蒙する等我々指導者は尽力すべきであるとする。

B-6 男子新体操の小学校低学年における俊敏性と経時的変化

○藤井 祥己^{*1}

^{*1}日本ウェルネススポーツ大学

キーワード: 男子新体操、俊敏性、小学生低学年

【はじめに】

1) 背景(男子新体操と先行研究)

男子新体操は、戦後約 80 年前に日本で誕生したスポーツであり、今日では急速にメディアに取り上げられるようになってきたスポーツである。日本独自のものであるために女子の新体操とは違い、オリンピックや世界選手権などといった国際大会などが無い。演技自体にバリエーションを出すために多くの移動方法を要するスポーツであるがために、複雑な脚の運びが多く私自身も振り付け(足運び)を覚えることに苦労した。

男子新体操における論文の数も少なく、CiNii(NII 学術情報ナビゲータ[サイニイ])の検索で「男子新体操競技の普及と発展について」や「大学男子新体操指導者の現状：男子新体操競技に対する捉え方について」などといった競技性の向上や発展についての論文が多く、子供の発達発育に対するものは見当たらなかった。

2) 目的

本研究では、小学生低学年を対象にして俊敏性が学年によってどのように変化するかを検討し、男子新体操のトレーニング法の基礎資料を得ることにある。

【計測方法】

・被験者は男子新体操を始めた初年度 1 年生、2 年生、3 年生の各学年 1 人ずつ計 3 名である。

・計測時期は新体操を始めて 1 か月後(2021 年 7 月 2 日)とその 1 年 1 か月後(2022 年 7 月 22 日)である。その間は男子新体操の団体演技(3 分間 3 人)を行い、週 1 回同じ演技を続けた。

・男子新体操のトレーニングとして、ラダートレーニング(以後ラダー)を採用した。ラダーは、地面にはしご状の枠を 11 個作り、枠に当たらないように足を動かすトレーニングである。その種目は、1 枠両足ジャンプ、1 枠 2 歩ラン、ビハインドクロスオーバーの 3 種類である。それぞれの足運びは下の図の通りである。※○は足、数字は足を置く順番である。また、1 枠両足ジャンプ、1 枠 2 歩ラン、ビハインドクロスオーバーの順で難しいものとなっている。ラダーを採用したのは、男子新体操のトレーニングには、アイソレーションやランニング、ウェイトトレーニングなどがあるが、失敗・成功が判定しやすいことと、男子新体操の演技の中で、ラダーの動きが使用されることが多いからである。

・俊敏性の評価は、俊敏性が速さ(スピード)と正確性から成るので、正確性(11 枠を通して何回失敗するか)とスピード(11 枠を通して何秒かかるか)を測定する。失敗とは、◎枠に当た

る、②杵を跳ばす、③足運びが違うである。判定の仕方として、動画を撮影してその動画を元に行う。スピードは、同じ動画を4回見てタイムを計測してその平均値である。

1 杵両足ジャンプ		1 杵 2 歩ラン		ビハインドクロスオーバー	
1 杵 1 1 杵					
1 杵に対して両足で入る		1 杵に片足ずつ入る ; ↓ は移動が直接である		杵に入るときのみ後ろで足をクロスさせる ; ↻ は移動がクロスである	

【結果】1年1か月後の変化を学年別にみると表の通りである。

測定種目 評価項目		1年生		2年生		3年生	
		2021	2022	2021	2022	2021	2022
1 杵両足 ジャンプ	失敗数(11 杵分の回)	4	0	3	1	2	0
	スピード(11 杵秒)	4.89	5.37	4.47	5.07	4.37	5.07
1 杵 2 歩ラン	失敗数(11 杵分の回)	6	2	6	3	5	0
	スピード(11 杵秒)	3.80	3.85	3.60	3.77	3.55	3.65
ビハインドクロ スオーバー	失敗数(11 杵分の回)	9	0	9	0	1	0
	スピード(11 杵秒)	23.1	11.5	25.5	12.5	20.5	8.65

【考察】

1 杵両足ジャンプは、3人ともに失敗数は減っているが、スピードが落ちている。これは、男子新体操では高くジャンプを要するから、子供たちがそれを意識したからであろう。

1 杵 2 歩ランは、3 人とも 1 杵両足ジャンプと同じように失敗数は減っているが、スピードが落ちている。これは、男子新体操の演技の時に私がスピードを求めていなかったからであろう。

ビハインドクロスオーバーは、失敗数スピードともに良くなっている。これは、団体演技中に似たような動きを入れていたからであろう。ラダーは男子新体操のトレーニングに適していることが窺えた。

【今後の課題】

今回の結果は少人数であったので、次の3点を改善し、研究を継続する必要がある。

1. 被験者が各学年一人ずつであるため、被験者を増やす。
2. 発育発達のバイアスがあることから低学年だけではなく高学年や大人などといった発育発達段階からかけ離れた人を被験者にする。
3. 新体操をやった子供とやっていない子供を被験者として比較実験を行う。

一般口演

【教育・体育領域】

15:55-17:15

C会場（7階 701教室）

座長 渋井 二三男（日本ウェルネススポーツ大学）
横山 典子（日本ウェルネススポーツ大学）

- C-1 コロナ禍におけるハイブリッド型講義の実践
○渡邊 真菜（日本ウェルネス歯科衛生専門学校）
- C-2 高等学校における授業方法と学力の変化に関する研究
○遠藤 駿之（日本ウェルネス高等学校）
- C-3 「空」とは何か―「般若心経」の教え―
○尹 東燦（日本ウェルネススポーツ大学）
- C-4 動画による保育の見える化
○大竹 龍（ONE ROOF 江東区白河かもめ保育園）
- C-5 高校生のスマホ依存と自覚症状に着目して
～養護教諭として感じた生徒の様子から～
○齋藤 和江（日本ウェルネス宮城高等学校）

C-1 コロナ禍におけるハイブリッド型講義の実践

○渡邊 真菜^{*1}

^{*1} 日本ウェルネス歯科衛生専門学校

キーワード: 歯科衛生教育、ICT 教育、ハイブリッド型講義

【目的】

社会のデジタル化が進むなか、日本の教育現場において ICT (Information and Communication Technology) 教育の導入が急速に広まっている。COVID-19 感染症の流行に伴い、オンライン講義が急速に広まった。学生はタブレットやパソコン、スマートフォンなどによるガジェットで講義資料を閲覧し、オンライン上で受講する。SDGs の観点からのペーパーレス化も導入された。従来、紙媒体の講義資料を講義時間内に配布する対面式の講義スタイルであったが、ICT 教育では紙媒体の配布は行われない。Portable Document Format (PDF) 等の電子化された資料をオンライン上のクラスルームに配信し、学生が各々ダウンロードして閲覧する形式が多い。現代の歯科衛生学生における ICT 教育の優位性についてはまだ分かっていないことが多い。まず、今回は歯科衛生士養成機関での教育における紙媒体の配布資料の必要性について明らかにすることを目的とする。

【方法】

日本ウェルネス歯科衛生専門学校の歯科衛生学生1年生(77名)を対象とした。Google Classroom 上にアップロードされた講義資料をダウンロードしたもの(A群)、印刷を行い紙媒体の資料を使用したもの(B群)にわけた。両群ともにプレテスト、ポストテストを受験させ、全講義終了後に行う期末試験の得点結果をもとに学修効果の影響を調査した。学習方法は①事前に Google Classroom 上へアップロードされた講義資料と教科書による予習を行う②前回講義の復習を目的とする4択のプレテストの実施③90分の講義受講④4択のポストテストを行う。プレテスト、ポストテストは Google Form のテスト機能を使用。講義は Google Classroom + Meet を使用したオンライン講義と対面講義のハイブリッド型講義形式で行った。また、両群ともに全講義終了後にはアンケートを行った。

【結果】

両群においてプレテスト、ポストテストの結果による有意差は認められなかったが、A群の期末テストの平均点は61.5点。紙媒体を使用したB群の期末試験の得点は68.8点という結果となった。両群において、75点以上の得点を獲得した学生の講義資料を確認すると、ガジェット(主にタブレット端末)内の資料への書き込み、紙媒体の資料への書き込みが顕著であった。一方、60点(及第点)以下の学生の講義資料にはほとんど書き込みが見られなかった。全講義終了後のアンケート調査では「紙媒体での配布資料は必要である」という問いに対して70%以上の学生が配布資料は必要であると回答した。

【考察】

本調査では配布資料の形態に関わらず、いかに資料に書き込みをするか否かというところで期末試験の結果に差が生まれたことが示された。これは講義を集中して受講しているか等の学習意欲の高さが資料への書き込みという結果にあらわれたものであると考えられる。今回、対象となった学生の年齢層は19歳～54歳と様々であり、小学校や中学校でICT教育が導入されていなかった学生がほとんどである。この講義スタイルに順応できる学生であれば問題なくペーパーレス化に踏み切ることができるだろうが、現在の歯科衛生学生のほとんどは慣れていない。それはアンケートの「紙媒体での配布資料は必要である」という結果に表れている。現在の学生の満足度を上げるためには、紙媒体を配布することが必要なのかもしれない。しかしながら、学習効果という観点で考えるとペーパーレスであってもタブレット端末やパソコン等による書き込みを可能とすることにより、紙媒体でなくても十分な学習効果があるということも今回の調査で明らかとなった。今後、より満足度の高い学習を提供し、ICT教育を進めていくために、自ら学ぶ姿勢を育み、ペーパーレス化を実現し、自分にあった学習方法を選択できる環境を整えることが必要であると考えられる。

【まとめ】

歯科衛生教育という特性上、すべての講義をオンライン講義にすることはやはり難しい。実際、スマートフォンによるガジェット閲覧を許可することにより、講義への集中力が欠けることも事実である。また、COVID-19の流行により金銭的に貧困に陥る学生も多く存在している。スマートフォンの利用料金の滞納や使用可能なデータ量の問題等でオンラインでの講義を満足に受講できない学生や対面講義において資料の閲覧やプレテストが学内でできない学生も存在した。対面講義においてはプロジェクターの使用でフォローが可能であるが、プレテストの実施についてはやはりWi-Fiの設置などの対応が必要になることを強く感じた。オンライン講義と対面講義のハイブリッド講義を実践することにより生まれた利点もあった。家、職場から学校への移動時間が短縮されることで講義時間直前まで他の業務(仕事や子育て等)をすることが可能となり、出席率や経済面でも学生にとって利点となる点が多々あった。一方でオンライン講義という特性上、出席のみ行って講義に参加しない等の学生も見られた。カメラで表情を確認できるようにすることや適宜質問を投げかける等、オンライン講義において工夫しなければならぬ問題は山積みである。

人を育てるという観点において、社会性を育むこと、人間力を高めることは非常に重要だ。それにはやはり、対面でコミュニケーションをとることが必要不可欠である。学習効果をあげながら、学生の満足度をあげるためにどのようにすべきかはまだ検証が必要であるが、資料の提供や学習方法においてICT教育を進めていくことは非常に重要ではないだろうか。

C-2 高等学校における授業方法と学力の変化に関する研究

○遠藤 駿之^{*1}、木村 一^{*1}、小机 滉大^{*1}、温井 一裕^{*1}

^{*1}日本ウェルネス高等学校

キーワード：対面授業、生徒の意識、学力

【目的】

日本ウェルネス高等学校では、2020年4月以降コロナウィルス感染症による緊急事態宣言後全面的なリモート授業から始まり、対面授業とリモート授業の混在を経て2022年には全面的な対面授業となった。本研究では、より充実した授業態勢にするため、この授業方法の変化に伴って以前の学力(試験成績)と、以後の2022年までの成績及び生徒の意識の変化について分析、考察するものである。

【方法】

2019年(緊急事態宣言前)の成績をA群、2020年から2022年をB群として、試験結果について比較する。対象とする教科は英語、国語、数学の主要3教科について、平均点、標準偏差(以下、「偏差」という。)に基づいて分析する。

なお、各科目とも各年度を通しての試験内容の難易度はほぼ同じ水準としている。また、2022年度のデータは、前期試験までの結果とした。

【結果】

各学年の年度別試験結果は表のとおりである。

表

学年	科目	2019年			2020年			2021年			2022年		
		母数	※2 平均点	標準偏差	母数	平均点	標準偏差	母数	平均点	標準偏差	母数	平均点	標準偏差
1年	英語I	116	37.01	29.33	123	31.83	24.22	173	36.91	26.36	66	43.42	30.93
	国語総合	118	44.33	25.92	133	28.95	21.40	172	36.05	16.45	68	58.46	※1 24.96
	数学I	118	32.68	25.46	122	23.11	17.09	174	31.29	25.54	67	37.18	22.79
2年	英語II	89	32.22	28.47	138	27.45	22.44	130	34.31	23.58	96	35.86	24.89
	現代文B	87	45.53	22.98	131	44.95	30.00	129	50.92	22.36	94	56.01	23.13
	数学A	85	28.33	27.80	127	28.14	25.05	121	28.38	25.72	94	36.17	27.66
3年	英語III	104	40.26	31.2	90	39.23	30.18	135	53.51	25.31	65	36.29	28.34
	国語表現	106	62.75	25.19	87	62.42	25.10	132	73.19	18.78	63	63.35	30.06

※1：2022年度1年生の国語総合は、新課程移行に伴い「現代の国語」と「言語文化」に分かれた。したがって、両科目を「国語総合」の範疇としてとらえ、両科目の得点を合算して計算した。

※2：A群を基準にB群の成績について有意差検定(t検定、有意水準5%)を実施した結果、B群の各科目とも有意な差は認められなかった。

【考 察】

B 群と A 群の各データ間には有意な差は認められなかったので、平均値を中心にその傾向について考察する。2020 年度の各科目の平均点(太線枠内)について注目すると、1 年生は 3 科目とも、2 年生は英語Ⅱの成績が 2019 年に比べて低い。当該科目以外の平均点は 2019 年度と概ね変わりがない。これは、授業方法が今まで慣れ親しんできた対面授業から突然に自宅でのリモート授業へと劇的に変化したため、科目ごとによって生徒の学習方法、興味、意欲及び教員の指導方法等の相乗作用によるものと考えられる。一方、2021 年度以降に入学した生徒の成績は、2020 年度に比べると高い。また、2020 年度入学した生徒の 2021 年の成績は 2019 年時とほぼ変わらないまでに上昇した。これは、生徒がリモート授業にも慣れ学習方法が確立してきたこと、学習意欲も戻ってきたこと及び教員の指導方法との相乗効果であると考えられる。しかしながら、2020 年に入学した生徒の 3 年生時の成績だけは 2021 年に上昇したものの 2022 年には 2019 年同学年の成績とほぼ同程度となった。これは、国語表現、英語Ⅲに限らず全科目とも同様であり、2019 年の対面授業時の成績に戻ったとも考えられる。原因は多々考えられるが、一つ大きな要因として「生徒の意識」が考えられる。リモート授業では、授業において出題された課題に対し自ら時間内に調べ、結果をまとめて提出しなければならなかった。したがって、居眠りする時間や「おしゃべり」する時間はなかったものと考えられる。しかしながら、3 年生はコロナ禍の 2020 年に入学し 3 年目の同 22 年に至り初めての全対面授業であり、それまでの授業と異なり「学校に行けば教えてもらえる。自分で調べる必要がない。」「友達と会える。おしゃべりできる。」と言った、言わば「慢心」や「遊び心」が大きく出てきたのではないかと考える。実際に、2022 年からの対面授業では生徒の所作、言動等からもその傾向は伺えた。例えば、全科目を通じてほとんどの教員／講師から異口同音に授業中の「おしゃべり」や「居眠り」等に対する報告が度々あった。この現象は、他学年にもみられるが、3 年生程ではない。一方、表中の矢印に沿って国語及び英語の同一科目における入学年(1 年生)から 3 年生までの成績を進級毎に追跡してみると、2020 年に入学した生徒の成績は両科目とも上昇している。すなわち、成績の上昇率は低いものの 1 年生より 2 年生、2 年生より 3 年生と同一科目の成績は上昇しており学年を追う毎に理解度は上昇傾向を示しているものと考えられる。

【まとめ】

生徒、教員とも 2020 年からは、コロナ禍における非日常的な学校生活を過ごして来た。生徒の成績を学力に置き換えるならば 2020 年はそれを象徴するがごとく一部の科目が低下した。また、2020 年に入学した生徒は初めての高校生活をリモート授業で開始された。成績は、推して知るべしと考える。しかしながら 2021 年には、各学年における各教科の学力は上昇に転じた。これは、2020 年度はすべての所作が初体験であり、生徒、教員とも意識の改革を余儀なくされたからである。今後、教員は対面授業を実施するに当たり、リモート授業時に得た生徒の反応、対応要領及び反省等を含めたノウハウを今後反映させ、如何に「おしゃべり」、「居眠り」等を抑え、生徒の学習に対する意識の維持向上を図らせることが重要である。

C-3

「空」とは何か—「般若心経」の教え—

○尹 東燦^{*1}

^{*1}日本ウェルネススポーツ大学

キーワード: 仏教、般若心経、空

【目的】

仏教では古くから物事を絶対化したり、特定の価値観や先入観にこだわったりしてはならないと教えている。仏教のこの考え方はグローバル化が進み、価値観が多様化した現代を生きる私たちにも多くの示唆を与える。そこで、今回は思想的にこれらの考えを裏付ける大乘仏教の「空」について考察する。

【三つの仏教】

古代インドは宗教活動が盛んな国であった。仏教成立当時すでに複数の宗教が存在し、その共通の見解は、生き物は死によってすべてが終わるのではなく、あの世に赴いた後、また生まれ変わるというものであった。その際、前世における行い次第で次の生涯の運命が定まり、生命は生と死を無限に繰り返すとされた。これを「輪廻」(りんね)と言う。輪廻世界の本質は「迷い」であり、生命には例外なく苦痛を伴うから、無限の輪廻は誰にとっても望ましいことではないというのが古代インド人の考えであった。そこで考え出されたのが輪廻からの脱出、すなわち「解脱」(げだつ)であった。

かかる事情により、インド生まれの宗教は例外なく解脱を最終目的にしているが、その具体的な方法は、宗教によって異なる。仏教では成仏すれば、解脱を実現するとされる。ただ、長い歴史の中で仏教の中でも主義、主張の食い違いが生じ、そこから解脱に対する見解の違いが生まれた。その解脱方法の違いから仏教は小乗(しょうじょう)仏教、大乘(だいじょう)仏教、密教に分かれる。これらを三つの仏教と言う。中国や日本の仏教は大乘仏教の流れを汲む仏教である。

【大乘仏教】

大乘仏教は仏教の教祖・釈迦牟尼仏陀(仏のこと)が亡くなって、約五百年後(西暦紀元前後)、インド本土において生まれたものである。大乘と小乗仏教の解脱方法はそれぞれ次のとおりである。

小乗仏教: 出家を前提に、釈迦牟尼仏陀が定めた厳しい律(男子出家は二百五十、女子出家は三百四十八項目)を守りながら、修行して解脱を実現する。

大乘仏教: 仏陀に対する信仰を深め、六パラミターを実践して解脱を実現する。

パラミターとは「彼岸に渡るための修行法」、すなわち成仏するための方法のことである。布施(ふせ)・持戒(じかい)・忍辱(にんにく)・精進(しょうじん)・禅定(ぜんじょう)・知恵(ちえ)がそれである。六つのうち、大乘では「知恵パラミター」が核心とされ、修行にあたっては「空」の思想が重視され、これに従って実践することが求められる。それでは、「空」とはどんなものだろうか。

【般若心経と空】

大乘仏教には「般若心経」(ほんにゃしんぎょう)という短い経典(約 270 文字)がある。この経典は「空」を説いたもので、中には次の語句があつて、特に有名である。

色即是空、空即是色。(しきそくぜくう、くうそくぜしき)

「色」は「現象世界」または「物質世界」のことである。「この世のすべては空っぽであり、空っぽがすなわちこの世の中である」と言うのである。

「空」(空っぽ)は従来多くの学僧や学者たちによってさまざまな角度から解釈、説明されてきた。ここではまず「空」の説明として比較的わかりやすいと思われるものを一つ紹介する。

「一メートルの棒を見たとき、あなたが二メートルの棒が欲しいと思っていると、その棒は「短く」なります。ところが、五十センチの棒を期待しているときは、一メートルの棒が「長く」なるのです。そのことを『般若心経』は、物そのものは空であって、それをあなたの心が勝手に「長い」「短い」と差別しているのだと、言っているのです。そして、わたしたちが勝手に「長い」「短い」と差別して、その差別にこだわっているのを、『般若心経』はそんな愚かなことをしてはいけない——と叱っているのです。だから「空」とは、「差別するな！」「こだわるな！」といった意味になります。」

要約して言えば、この世のすべては相対的な存在で、「空」であるから、物事を差別したり、こだわったりしてはならないということになる。しかし、われわれがこの世に存在する限り、どう見ても、すべてが「空」だとは思えないし、こだわりさえしなければ、「有」が「空」になるとも思えない。そのため、「空」とは「差別するな」、「こだわるな」だと言われても、どうも腑に落ちない。そこで、次にもう一つの解釈を紹介する。

「われわれは物事を考える際、常に特定の評価基準をもってそれらをはかったり、判断したりする。人間が物事に対する評価基準を持つようになったのは、心に執着やこだわりがあるからである。特定の評価基準をもって物事を見るから善や悪、醜や美といったプラス、マイナス評価が出されるわけで、もし執着心やこだわりによる評価基準を捨ててものを見るなら、そこには善も悪も、醜も美も存在せず、その評価は「0」となるはずである。「0」であるからには、価値判断という立場から考えると、この世のすべての現象が「空」になる。言い換えると、「空」とは宇宙空間になにも存在しないと言うより、評価基準という物差しを捨ててこの世を眺めるなら、あらゆる現象が「ない」(「空」)に等しいということである。

ここに黄金の塊ときれいな石があるとする。人間はこの二つの物を見たとき、当然黄金が大事だと思う。しかし、犬に向かって「さあ、犬よ、こっちは黄金だから、石よりはるかに値打ちがあるんだよ」と諭しても、犬にはそういう価値観がないので、どれも同じように映るはずである。肉の塊でない限り、黄金であろうと石であろうと、犬にとってその値打ちは「0」であり、「空」なのである。」

【まとめ】

大乘仏教の「空」は次の教えとして、現代社会を生活していく上で示唆に富んでいる。

- 1、宇宙空間のすべての現象は暫定的な存在で、いつ、どう変わるかわからない。これがいわゆる「諸行無常」である。そのため、いかなる場合も物事を絶対化してはならない。
- 2、人間の価値判断は相対的なもので、万物はそれを超越して存在している。そのため、人間は自ら作り上げた価値観や概念に執着したり、こだわったり、とらわれたりしてはならない。
- 3、すべての現象をありのまま観察し、特定の先入観のもとで物事を考えてはならない。

参考文献

- 1) 渡辺照宏『仏教』、岩波新書、1995年
- 2) ひろさちや『般若心経入門』、日本経済新聞社、2005年

C-4

動画による保育の見える化

○大竹 龍^{*1}

^{*1}ONE ROOF 江東区白河かもめ保育園

キーワード: 保育所保育指針、ドキュメンテーション、保育の見える化

【目的】

保育所保育指針(2017年3月告示)、第四章2、保育所を利用している保護者に対する子育て支援(1) 保護者との相互理解「日常の保育に関連した様々な機会を活用し子どもの日々の様子の伝達や収集、保育所保育の意図の説明などを通じて、保護者との相互理解を図るよう努めること。」との趣旨が述べられている。江東区白河かもめ保育園では日常の保育、食事、行事を動画撮影しInstagramで発信を行った。今回は、この発信によりどのように保育が見える化され保護者に伝わったかを検討する。

【方法】

1. 保護者へアンケート

対象者は江東区白河かもめ保育園園児91名(0歳児10名、1歳児12名、2歳児16名、3歳児18名、4歳児18名、5歳児19名)。実施時期は令和5年1月。内容は、アンケート調査。調査項目①日常の保育、②行事、③特別活動、④食育、4件法(とても良い4点、良い3点、ふつう2点、改善が必要1点)と自由記述で回答させる。※匿名で来年度の運営に生かす

【結果・考察】

表1は、調査前(令和3年)と調査後(令和4年)の各調査項目の平均値を算出して示したものである。

<表1>観点別評価の平均値

	日常の保育	行事	特別活動	食育について
令和3年以前	1.5	1.9	0.9	1.5
令和4年以降	1.3	1.8	0.9	1.3

令和3年以前の全体平均5.8に対して、令和4年以降では5.4に上昇した。また評価項目ごとに見ても、3つの項目において向上が見られた。今回の取り組みは、保育が見える化され保護者に伝わったと言える。

以下に評価項目ごとの考察を述べる。

1. 日常の保育

アンケート自由記述より「数カ月に1度でも配信してもらいたい。」「動画で見える化すると、より子どもの動きは見れてうれしい。」と記載があった。日常の保育が動画により令和3年以前より伝わるようになったと窺える。

2.行事

アンケート自由記述より「行事を動画で見れることにより、行事に参加していない祖父母や親戚にも行事の様子を共有できるようになった。」「保護者のカメラでは撮れない子どもに近い角度で撮影された動画が見られて良かった。」と記載があった。行事が動画により令和 3 年以前より伝わるようになったと窺える。

3.特別活動

アンケート自由記述より「特別活動をやっているところを保護者が見ることはないので、動画があるとありがたい。」「特別活動は対象クラスでなかったが活動を見て子どもの成長と発達について知ることができた」と記載があった。特別活動が動画により令和 3 年以前より伝わるようになったと窺える。

4.食育について

アンケート自由記述より「コロナにより保育体験や試食が難しい状況で食事の解説動画や食育を子どもたちに実施している様子を動画で見られて良かった」「今後も今の食育活動を続けていきたい」と記載があった。食育が動画により令和 3 年以前より伝わるようになったと窺える。

【まとめ】

今回、動画による保育の見える化について改善前と、改善後の変化を比較することにより、「日常の保育に関連した様々な機会を活用し子どもの日々の様子の伝達や収集、保育所保育の意図の説明などを通じて、保護者との相互理解を図るよう努めること。」という点が動画化により保障され、「保護者との相互理解を図るよう努めること。」に寄与しえることが示唆された。今後も継続的に動画による保育の見える化をしていきたい。

C-5 高校生のスマホ依存と自覚症状に着目して ～養護教諭として感じた生徒の様子から～

○齋藤 和江^{*1}、鳥居 哲夫^{*2}

^{*1} 日本ウェルネス宮城高等学校、^{*2} 日本ウェルネススポーツ大学

キーワード: 高校生、スマホ依存、疲労度

【目的】

インターネット(以下「ネット」と称す)は現代社会に欠かせないものとなり、高校生の昨年度のネット利用率は99.2%と最高記録を更新した¹⁾。ネットを介する端末機器(以下、「デバイス」と称す)も多種多様化する中、最も使用率の高いデバイスはスマートフォン(以下「スマホ」と称す)で98.3%、次いでPC/タブレットが38.2%と、一人当たり複数台保有している。しかし、利用率や利便性が向上する一方、子どものスマホ依存が社会問題となっている。

筆者が所属している高校の現状として、在校生のスマホの保有率は100%であるが、日中は職員室での一括管理や、寮生は消灯前に寮監室での一括管理などスマホに対する策を講じている。しかしながら、普段の生徒の様子から、スマホ依存と思われる言動(SNS関係の話題中心等)や、疲労と思われる自覚症状(だるい、眠い、床に寝転ぶ、休みたい等)がみられ、このことは生徒の健康課題と捉える必要がある。疲労の要因として、部活動の練習が挙げられる。しかし、数年前の生徒と比較すると練習量等に大差はないものの、疲労症状者の増加が見取れることから、運動による疲労以外の要因である可能性が考えられる。

このことから、本研究では、疲労症状の要因の一つにスマホ依存が関係しているか、また、スマホ依存の防止策は有効であるのかを明らかにしていく。

【方法】

1. 調査対象者

本校の在籍生を対象に質問紙調査を行い、有効回答率は75.4%であった。

2. 質問紙の内容

疲労度測定は「青年用疲労自覚症状尺度」²⁾を、スマホ依存度テストは「IAT(インターネット依存度テスト)」³⁾を著作者の使用許可を得て使用した。また、倫理的配慮として、対象者に対し、調査への参加は自由であり、回答による不利益は生じないこと等を説明し、同意を得た。

3. 分析方法

1). 疲労度と依存度の相関関係

疲労度(疲労度合計)とネット依存度(ネット依存度合計)との関連性の検討には、データの正規性を確認したうえで Spearman の順位相関係数を使用した。統計学的解析には SPSSver.29.0 を使用し、有意水準は5%とした。

2). 夜間にスマホ回収のある寮生と回収のない通学生の疲労度と依存度の比較

夜間にスマホ使用に制限がある寮生をスマホ統制群36例とし、使用できる通学生を非統制群50例における疲労度およびネット依存度の比較には、データの正規性を確認したうえで対

応のないt検定またはMann-WhitneyのU検定を使用する。統計学的解析にはSPSS ver.29.0を使用し、有意水準は5%とした。

【結果】

1. 疲労度と依存度の相関関係

Spearman の順位相関分析の結果、疲労度とネット依存度には有意な中等度の正の相関関係を認めた ($\rho = 0.422, p < 0.001$) (図1)。

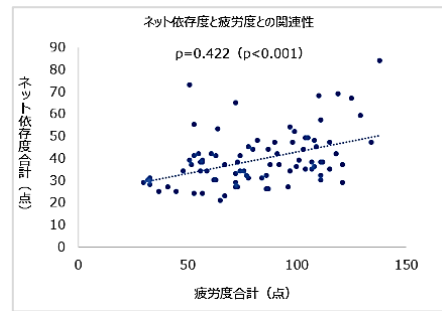


図1

2. 夜間にスマホ回収のある寮生と回収のない通学生の疲労度と依存度の比較

スマホ統制群の疲労度(平均値±標準偏差)は 78.4 ± 25.2 、スマホ非統制群の疲労度(平均値±標準偏差)は 83.8 ± 28.4 であり、対応のあるt検定の結果両群間に有意差を認めなかった ($t(84) = 0.912, p = 0.364$) (図2)。スマホ統制群のネット依存度(中央値)は 35.0、スマホ非統制群のネット依存度(中央値)は 38.0 であり、スマホ統制群に比較してスマホ非統制群でネット依存度が高い傾向にあった ($Z = -1.902, p = 0.057$) (図3)。

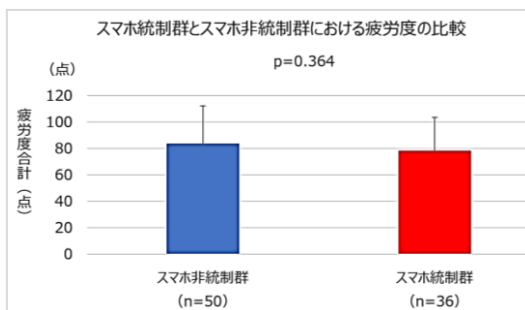


図2

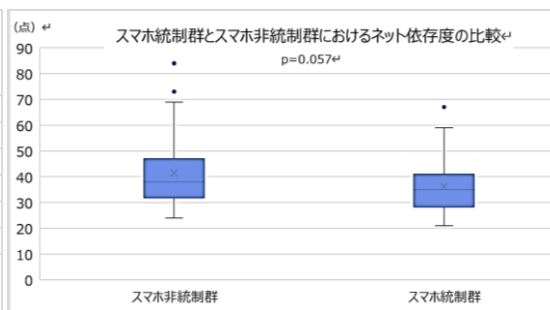


図3

【考察】

結果1から、スマホ依存度が高くなると疲労度が高くなっていることから、スマホ使用は疲労要因であることが示唆された。

結果2では、寮生と通学生の疲労度に差はないことが示唆された。一方、スマホ依存度は寮生と通学生との間に有意差はなかったものの差のある傾向にあったと言える。つまり、夜間のスマホ回収の対策は、スマホ依存軽減に有効な手段の一つであると言える。差が顕著に表れなかった要因として、一部の生徒は複数のデバイスを所持していることから、スマホ回収後もデバイスの使用があったと推察される。

【まとめ】

生徒の健康課題の要因の一つが明らかになったことで、課題解決に向けた保健指導を行っていく。今後の保健指導を通し、将来、生徒自身のヘルスプロモーションの向上に繋げていく。

【出典・引用】

1) 内閣府:「令和3年度青少年のインターネット利用環境実態調査」

《https://www8.cao.go.jp/youth/kankyou/internet_torikumi/tyousa/r03/net-jittai/pdf/kekka_gaiyo.pdf》

2) 小林秀紹ほか:(2002)「青年用疲労自覚症状尺度における有効な評定値」学校保健研究44巻2号 P131-138

3) 久里浜医療センター:「IAT:Internet Addiction Test(インターネット依存度テスト)」

一般口演

【生涯保健領域】

15:55-17:15

D会場（7階 702教室）

座長 鈴木 勝彦（日本ウェルネススポーツ大学）
菌部 正人（日本ウェルネススポーツ大学）

- D-1 コロナ禍における高齢者の縦断的体力変化について
ー茨城県利根町「きんとれ会」参加者の体力測定結果からー
○菌部 正人（日本ウェルネススポーツ大学）
- D-2 自治体の大学誘致の現状と課題ー成功と失敗の要因ー
○平山 実（日本ウェルネススポーツ大学）
- D-3 前近代の「疫病」への施策（しさく）と現代の「パンデミック」のサイエンス
○鈴木 勝彦（日本ウェルネススポーツ大学）
- D-4 2022年オレゴン世界陸上報告ーコロナ禍対応に視点をあててー
○杉町 マハウ（日本ウェルネススポーツ大学）
- D-5 アニメ聖地巡礼による社会問題の解決～大洗の成功例より～
○西村 優斗（日本ウェルネススポーツ大学）

D-1 コロナ禍における高齢者の縦断的体力変化について ー茨城県利根町「きんとれ会」参加者の体力測定結果からー

○菌部 正人^{*1}、石田 良恵^{*1}、黒崎 喬嗣^{*2}、小島 和彦^{*3}、
伊藤 義朗^{*3}、大野 次男^{*3}、江口秀幸^{*1}

^{*1} 日本ウェルネススポーツ大学、^{*2} 鹿屋体育大学大学院、^{*3} TONE ウェルネスきんとれ会
キーワード：健康長寿、高齢者、筋力トレーニング

【研究の背景】

都心から40km圏内にある茨城県利根町の人口は、15,525人(令和4年)であり、その中で高齢者の人口は、7044人と全人口の45.37%を占めている。これは、茨城県内に於いても代表的な高齢者の多い過疎の町となっている。高齢化が進む利根町とその町を所在地とする日本ウェルネススポーツ大学(以下大学と略す)が連携し、「利根町居住の高齢者が健康寿命を伸ばし(健康長寿)、豊かな生涯をめざす」をテーマに大学スタッフ、学生、住民がそれぞれの立場から検討を始め、8年前の2015年より「TONE ウェルネスきんとれ会(以下クラブと略す)」を立ち上げ自主的運営を開始した。このクラブで毎月2回(第2、第4水曜日)実施しているのが「きんとれ会」であり、大学体育館に集合し、大学の専門家と町の有志及び学生が共同で指導、運営している。その会に任意で参加している高齢者数は、毎回、平均80人にもなる。この会で実施している運動内容は、1)軽いウォーキング、ジョギングを含めた有酸素運動:15分 2)ストレッチと自重による筋トレ:40分 3)利根町音頭の曲に合わせた持続的リズム運動:10分で休憩などを含む90分間としている。また、上記の運動内容の中から各自、自宅で行う筋トレを週3回は実施するように勧めてもいる。

そのような中、2019年に新型コロナウイルス感染症(以下コロナと略す)が発見され、世界的な感染拡大(パンデミック)が起こった。日本でも不要不急の外出や活動の自粛等、社会生活が大きく変化した。利根町の「きんとれ会」に参加している高齢者においても活動の自粛が余儀なくされている。現状、「きんとれ会」の開催がコロナ前には年間に40回程度あったのに対し、15回程度に減少している。

【目的】

本研究は、「きんとれ会」に参加している高齢者を対象として、新型コロナウイルス感染症拡大前(2017年度)と拡大後(2022年度)の身体的特徴および体力レベルを縦断的に比較し、定期的な運動の阻害により、高齢者の身体に及ぼす影響について検討、町民の「健康寿命」や「QOLの向上」を考える上での基礎資料を提供することを目的とした。

【方法】

1)対象者の内訳:新型コロナウイルス感染症拡大前の2017年度に体力測定を受けた男性17人、女性39人、計56人のデータと拡大後の2022年度に体力測定を受けた男性13人、女性52人、計65人のデータの中から、両方の体力測定に継続して参加している高齢者、男性4人、女性15人、計19人について検討した。

2)体力測定項目:握力、上体起こし、開眼片足立ち、6分間歩行、長座体前屈、10m障害物歩

行(新体カテスト 65～79 歳対象文部科学省、1999 年 7)の実施項目の 6 項目および 10 回の椅子立ち上がりの速度(厚生労働省運動所要量・運動指針の策定検討会、2006 年 8))1 項目の計 7 項目について測定した。

3)身体組成測定:体組成測定装置(In Body J10 バイオスペース社製)を用いて身長、体重、体脂肪率を測定、その結果から BMI、体脂肪量や筋肉量を算出した。この装置は、身体に影響のない微弱な電流を流し、その電気抵抗値により体脂肪率を推定するインピーダンス法を活用している。安全で簡易に測定できるため、身体組成の測定には多くの場合この装置が使用されている。

4)統計分析:データは平均値±標準偏差(SD)で示した。2 つのデータ間の差の検定は、Excel 統計(Microsoft 社)を使用し対応のある t 検定を行い、有意水準は、5%未満($p < 0.05$)とした。

【結果および考察】

表 1 は、本研究で対象とした高齢者 19 人の身体的特徴を示した。その結果、身長、体重、BMI、体脂肪率、除脂肪体重に有意な差は認められなかった。これは、「きんとれ会」の回数が激減した中で対象とした高齢者の身体的特徴に大きな影響が無かったことを示している。基礎代謝量においては、5%水準で有意差が認められたが、この数値は、算出された推定値であることから加齢の影響をうけていることが考えられる。

表 1. 対象とした高齢者 (n=19)の身体的特徴の縦断的变化 (平均値±SD)

	年齢(歳)	身長(cm)	体重(kg)	BMI	体脂肪率(%)	除脂肪体重(kg)	基礎代謝量(kcal)
2017年	69.0±3.9	156.9±5.5	55.5±6.5	22.5±2.0	27.0±7.5	40.5±6.3	1243.9±136.6
2022年	74.1±3.9	155.2±6.1	55.2±7.6	22.9±2.1	27.2±6.7	40.2±6.9	1126.7±167.5 *

* $p < 0.05$

表 2 は、対象とした高齢者 19 人の体力測定値の変化を示している。2017 年と 2022 年の測定値を比較すると、握力、長座体前屈、開眼片足立ち、6 分間歩行に有意な差がみられた。これは、加齢の影響も考えられるが身体的特徴に変化が無かったにもかかわらず運動機能が低下していることから少なからずコロナによる自粛などの社会生活の変化によるものが大きいと考えられる。

表 2. 対象とした高齢者 (n=19)の体力測定値の縦断的变化 (平均値±SD)

	握力(kg)	上体おこし(回/30秒)	長座体前屈(cm)	開眼片足立ち(秒)	10m障害物歩行(秒)	6分間歩行(m)	椅子立ち上がり(秒)
2017年	28.1±8.1	14.7±7.0	41.2±8.3	83.1±40.0	6.2±0.7	641.8±50.1	8.6±1.2
2022年	27.6±7.6 *	13.9±6.1	35.4±7.3 *	49.5±39.9 *	6.2±0.7	592.5±46.0 **	9.1±1.0

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

【まとめ】

本研究で行ったコロナ前とコロナ禍での高齢者の体力測定の結果、7 項目中 4 項目に有意な低下がみられた。このことは、「きんとれ会」による運動する機会が奪われたことによる体力の低下と捉えることができ、利根町の「きんとれ会」による運動継続の必要性を明確にした。今後、超高齢化が進む社会での運動機会を増やす努力を継続し、高齢者の体力維持・向上の重要性が示唆された。

D-2 自治体の大学誘致の現状と課題－成功と失敗の要因－

○平山 実^{*1}

^{*1} 日本ウェルネススポーツ大学

キーワード: 地方自治体大学誘致、地方創生、大学誘致成功要件

【目的】

近年地方創生の文脈の中で、地方自治体が大学を誘致し、地方の活性化を図る事例が多く見られた。その誘致は、成功例も失敗例もある。そこで、本稿においては、事例を分析し、成功と失敗の要因を明らかにする。

【方法】

本稿では、6つの誘致事例を分析し、「成功事例」「中間事例」「失敗事例」に区分し、その詳細を分析する。分析の指標としては、先行研究を踏まえ「a 行政の投資資金」、「b 学生数の推移」、「c 地域へのリターン」、「d 大学行政のコラボ事業」、「e 学生の経済環境」、「f 大学の価値」とした。各指標は、5点満点とし、a、b、fは2倍の重みづけとし、各事例を評価する。

【結果】

6つの指標を踏まえつつ、評価すると以下の結果を得た。

大学名	所在	学部	a	b	c	d	e	f	合計	備考
立命館アジア太平洋	大分	国際	1	3	3	1	2	5	24	
国際教養	秋田	国際	1	4	3	1	2	5	26	
国際医療福祉	千葉	医学	5	5	5	3	3	5	41	土地無償貸与
千葉科学	千葉	薬学等	3	3	1	1	1	2	19	
東京理科	茨城	経営	5	0	0	0	1	3	17	
城西国際	千葉	観光	5	0	0	0	1	1	13	土地無償譲渡

※以下大学名を略称する。立命館アジア太平洋→「立命館」、国際教養→「教養」、国際医療→「医療」、東京理科→「東理」、城西国際→「城西」

以上の評価から「医療」「立命館」「教養」は成功事例と見なされ、「千葉」は中間事例、すでに撤退した「東理」「城西」は失敗事例と見なされよう。

【考察】

成功例のグループは、大学のブランド価値がそもそも高い。「立命館」は、京都の総合大学が母体であり、教員・学生とも半数が外国人であり、国際性が高く評価されている。「教養」も「立命館」同様、国際性が高く、地方にも拘わらず、人気が高い。「医療」は、人気の医学部であり、都市部になくとも拘わらず、圧倒的人気である。しかも地方自治体である千葉県、成田市は、あわせて 90 億円を投入した。大学誘致に熱心な千葉県・成田市は、国際医療に多大な価値を見出したのである。ここで注目したいのは、国際医療は、重みの高い3つの指標を満たしていることである。「千葉」は、県の支援を得られず、銚子市が 80 億円の市債を発行した。また立命館アジアや国際教養は、地方にありながらもそのコンテンツの高さから、学生は集まってくる。

質の高い外国人教員の確保により、教育の質の保証を実現し、特に「立命館」は、学生も半数以上が、外国人という名実ともに国際性を達成している。

失敗事例は、ハコだけきれいに作っても、学生が学校周辺または最寄り駅付近でアルバイトできる環境がなければ、厳しいということである。立地も地方都心または中核都市から1時間以内であることも必要と考えられる。

昨今大学の都心回帰の傾向が強まりつつあるが、やはり集客のためには、学生の望む環境が必要であることは、事実である。都心の大学誘致でも足立区が北千住周辺に東京電機大学、東京芸術大学等を誘致し成功している。北千住の雑多な街は、学生にとって経済環境としては、適切である。

最大の課題は、学生を呼び込めるかである。行政の投資効果は、学生がいてこそ可能となる。

学生を集客するには、高いコンテンツ(教育内容・教育体制)は、もとより、経済環境も重要である。そして大学も地方自治体も精度の高いマーケティングを実施し、学生集客の可能性を精査すべきであろう。単純に大学誘致すれば、街おこしができるものと考えてはならない。

【まとめ】

成功の要因→「コンテンツ(教育の質)の保証」「専門性の徹底」「経済環境有」「地方中核都市へのアクセス」「精度の高いマーケティング」「ブランディング(新しい価値の創出)」

失敗の要因→成功の要因の反対

【参考文献】

・白水晶子「地方自治体による大学立地・誘致政策とその影響 一千葉県を事例とした大学進学動向の分析」『大学経営政策研究第 10 号』2020 年 3 月

・佐藤波莉他「大学誘致による地域再生の可能性～人口減少に対応したまちづくり～」『JICA一般社団法人建設コンサルタント協会懸賞論文』

(https://www.jcca.or.jp/files/achievement/article/27pdf/27_g1.pdf) アクセス日:2023 年 1 月 20 日

・一般社団法人日本開発構想研究所『東京圏の大学の地方サテライトキャンパス等に関する調査研究報告書～地方公共団体と大学の連携強化に向けて～』平成 30 年 10

D-3

前近代の「疫病」への施策(しさく)と 現代の「パンデミック」のサイエンス

○鈴木 勝彦^{*1}

^{*1} 日本ウェルネススポーツ大学

キーワード：感染爆発、生体防御、公衆衛生

【序論】

2019年、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行は世界各地に急速に広がった。感染症の世界的な大流行(パンデミック)は、中世よりペスト、コレラ、スペインかぜ、エイズなどで多数の死者がでた。「コロンブス交換」と言われた西半球と東半球との間で動物、植物、奴隷を含む人々の交換が行われた。「シルクロード」は東アジアと西アジアで交易による人々の移動があった。これらの文明・文化・社会の発展と交流で、それまでの局地的病原菌は拡散された。

日本の奈良・平安時代、集団発生した感染症の疫病、噴火、大震災、洪水、飢餓など、超自然的な原因は怨霊の仕業・祟り、神や仏による罰と考えた。加持祈祷、各種例祭、奈良の大仏建立、お守りの携帯、お札を貼る、元号を変えるなどの後、祟りが鎮まり疫病の終息へと結びついた。日本各地の神社に伝わる神話・伝承は、疫病を乗り越えた証、備えと流行への克服の施策を伝えている。

現代の医学以前の各地の伝統医学や土着的医療ケアにも健康を取り戻す効果が見られる。これらの仕組みと疫病の終息に共通する人間の持つ「自然治癒力」とを考察する。さらにウイルスが細胞内への侵入、パンデミックの原因となる大増殖の仕組みの分析サイエンスから治療法、遺伝子操作、生命進化への関わりについて述べる。

【本論】

病原微生物は、世界各地のどこにも生存している。ウイルスは細菌と異なり自己増殖できない。他の生物の細胞に侵入、遺伝情報系を利用して大増殖し飛び出す。細胞の機能は破壊され、ウイルスは別の生命体に移動し増殖を続ける。

ウイルスは複製の過程で煩雑に変異する。多様な遺伝子的性質のコピーが製造され、自然選択のふるいにかかる。コロナウイルスの「組み替え」もおこる。二つの異なるコロナウイルスが同じ細胞に感染するとゲノムの一部を交換して、新たな株を作り出す。現在の新型コロナウイルスのオミクロン株は変異が格段に多い。他の動物で、変異が積み重なりヒトへ再感染されたと報告された。ウイルスは人と他の動物を行き来して「人獣共通感染症」となる。

ヒトの全遺伝情報(ゲノム)には、過去の祖先が感染したウイルスの遺伝子が8%組み込まれている。生殖細胞にたどり着いたウイルスは次世代に受け継がれ、子孫を残す。母親と胎児を結ぶ胎盤を形成する PEG1 遺伝子となり、哺乳類は誕生した。子宮内膜に付着する胎盤膜は母親の免疫系が異物として攻撃しないよう、胎児を守る遺伝子となった。2つの遺伝子(シンシチン 1, 2)がウイルス由来である。ウイルスの大増殖する仕組みは、初期胚の発達増殖で機能している。ミトコンドリアとなった細菌や葉緑体となったシアノバクテリアは遺伝子の水平移動で生物の進化に関与した。生物の進化にウイルスによる水平進化と親から子への垂直進化が見られている。

ウイルスの細胞侵入と細胞内で増殖する仕組みを利用した遺伝子治療では、ゲノムに DNA 断片を挿入する運搬屋(ベクター)として使い、標的細胞の遺伝子を改変する技術に取り入れ

た遺伝子組み換え技術。大腸菌や酵母菌にヒトのインスリン、成長ホルモン、エリスロポエチンなどの安価で効率よく大量生産する医薬品の製造。農作物へ応用した遺伝子組み換え作物・食品。遺伝子異常による疾患に、正常遺伝子を導入する遺伝子治療。癌細胞に侵入・増殖して攻撃する癌治療。免疫系の訓練のワクチン接種では弱毒ウイルス、不活性化ウイルス、ウイルス成分を体内注入して認識、攻撃する仕組みを免疫系につくり麻疹、インフルエンザウイルスの予防ワクチンの合成。ウイルスを利用した技術は次々に開発されている。

プラセボ(プラシーボ)は本物の薬と有効成分が入らない偽薬臨床試験で使う。医師や患者からも不明にして使う。偽薬によっても症状の改善や副作用の出現が見られる。神や仏への祈りの後に疫病が終息する現象が起こる。「自然治癒力」は、自分の力で病をいやし、治す自然の力のことで、免疫系、内分泌系、神経系が組織間で調整し、失われた調和・平衡を取り戻す現象である。薬用植物や物理的作用の刺激がきっかけで、免疫系、内分泌系、神経系に働きかける。人体には自己治療に必要なさまざまな物質を体内で分泌している。鍼のツボは灸にも共通して作用機序は神経系に作用し、内因性モルヒネ物質が作用する。

【 結論 】

ウイルスには生きた細胞に侵入し、細胞内で大増殖する力がある。遺伝情報のコピーミスは大増殖では多様性の遺伝子が生じ、弱体化や毒性強化の変異株が生まれる。宿主細胞滅亡は、ウイルスの存続に不利となるから、毒性は弱まるのが一般的といえる。新型コロナウイルスのオミクロン株はこの状態にはいったと考えられる。弱毒化と致死率の低下でも、このまま終息することではない。感染者数が増えている現状では、新たな病原性の高い株が現れる危険性が考えられる。

自然界の微生物はコウモリなどの野生動物と共存し、家畜のブタなど、家禽のニワトリなどに感染、これらはウイルスの中間宿主となり、動物由来でヒトの病原体となる「人獣共通感染症」である。自然界と人間社会の境界の消滅、著しい人口増加と経済優先の環境破壊が原因である。地球の長い歴史のごくわずかの時間に人間は現れ、急激に地球環境を変えた。地球温暖化は閉じ込められ未知のウイルスが出現する。ヒトの健康、動物の健康、環境の健全性、三つの健康をひとつに訴え「One Health」の運動が起きている。

ウイルスの細胞内侵入と細胞内大増殖の力の仕組みを解明した現代のサイエンスは、ウイルスを活用した各種の遺伝子操作、医薬品の製造、癌細胞の撲滅などがおこなわれている。ワクチンや治療薬は短期間の開発は急速に対応したが、完全ではない。運動・休養・栄養をとり生命活動を高めて治癒力が動くことで、もとの健康を取り戻す。自然治癒力の作用の活用が考えられる。

経済活動、日常生活の混乱の回復策は見いだせてない。このパンデミックの体験から、今後どう対応していくか人類全体の課題である。



表面の突起が王冠(corona)に似る突起のタンパク質(スパイク)で細胞に侵入する。突起はアルコールや手洗いで落ちる

ナショナルジオグラフィック
日本版 2020年11月号 32頁

D-4

2022 年オレゴン世界陸上報告 —コロナ禍対応に視点をあてて—

○杉町 マハウ^{*1}、鳥居 哲夫^{*1}、本間 一輝^{*2}

^{*1}日本ウェルネススポーツ大学、^{*2}日本ウェルネススポーツ大学東京

キーワード:COVID-19、マスク着用率、日本選手団の感染状況

【はじめに】

本報告は、COVID-19 の感染拡大によって1年延期となった東京オリンピック大会の影響を受け、世界陸上競技連盟(以下、「WA」と示す。)主催のオレゴンでの世界陸上競技大会(以下、「オレゴン世界陸上」と示す。)も1年延期で開催することとなった。他国では、全面的に無マスクを進める国や外出禁止が発令されたとのニュースを目にすると、世界的に足並みを揃えるのは容易ではないと推測される。そこで世界から選手が集まるオレゴン世界陸上を通して、米国及びWAのCOVID-19感染対応に視点をあてて当該大会の状況についてまとめたものである。

【開催まで】

各種目によってターゲットナンバーがあり、選手団やボランティアスタッフを含めた関係者の人数制限が設けられた。いずれも下記の条件を満たさない限り参加できない。

- ①【アメリカ入国にあたっての条件】 COVID-19 ワクチン接種2回以上
- ②【アメリカ国内のCOVID-19感染症対策】 陽性が確認された場合、5日間加療が必要
- ③【WAからのCOVID-19感染症対策】 出国前24時間以内の抗原検査の陰性証明

【直前～入村】

7月8日に最終エントリー192チームの1900人以上が決定。

入村するには上記①②③の条件を満たしているかを確認するために、チーム認定センターで個人情報や顔写真を撮影しIDカードを作成しなければならない。

【選手村】

オレゴン大学キャンパス内が選手村となっており、そのほとんどの建物の入り口には、消毒液が常備されている。

ア 競技場

練習用競技場まではバスで移動、消毒液は常備されていないが、マスクを着用していないと乗れない。練習中は、マスクを着用している人の姿は見受けられなかった。

イ ウェイト施設

直接器具に触れるウェイト場には、消毒液とタオルが常備してある。

練習中は、マスクを着用している人の姿は見受けられなかった。

ウ 食堂

出入り口に消毒液が常備してあり、食事はバイキング形式であった。

マスクの着用は「感染危機意識」の事項で述べる。

【感染危機意識】

COVID-19 感染はマスク無しの近距離、室内や食事中の会話から拡大しやすいとされているため、食事に行った際に食堂の入り口にカメラを設置して 10 分間撮影を行い、食堂に入った人数、マスク着用の有無、手指消毒率の有無の測定を 3 回実施した。3 回の合計結果は、122 名中、マスク無し 80 名(65%)、マスク着用 44 名(35%)、手指消毒に至ってはわずか 4 名(3%)であった。また、感染防止のための手袋をせずにトング等を使用するなど、日本国内と比べて感染への危機意識は低いと感じた。

【レース】

ウォーミングアップエリアでは手指消毒する場所はなかった。一方、招集場ではマスクの着用は必須であった。レース終了直後には、WA からマスクを渡され、着用を促されるが強制力はなかった。

【感染状況】

日本選手団の山崎一彦監督が、総括会見にて、選手団から自身を含む選手 19 人(選手 6 名、スタッフ 13 名)の COVID-19 陽性者が出たことを踏まえ「国際的な対策が、日本と全く異なっていた。いわば鎖国状態で臨んだ大会だった。今後、国際競技を続ける上では、免疫アップも考えないといけない、痛切に感じた。」と受け止めた。さらに「(ゼロ・コロナ寄りの)日本と中国の感染者が多かった。国やスポーツ庁と連携して、対策を考える岐路に立たされていると思う。」と述べた。日本選手団に帯同している鎌田浩史ドクターは、今大会の検査について「WA の規定はない。各チームが自主的に(選手の体調を)管理して気になる選手を連れていく形」と説明した。大会全体の感染者数は選手 10 人含む合計 58 人と発表した。

【まとめ】

東京オリンピック大会は、バブル方式で外部と接触しないようしていたが、今大会は選手村となったオレゴン大学内や試合会場は一般客も入れる状況であり、選手村からの外出制限もなかった。WA は入村時への制限のみで、入村してからは各チームの判断に任せて検査等を行っていた。会場内では一般客を含めて、消毒液の設置やマスク着用者はほとんど見受けられなかった。日本人を始めとするクラスターが発生してから WA が公式文書を出すまでには時差があり周知するための対応には遅れがあった。大会後半に至り、各棟の入口に注意喚起の張り紙やマスクを配り始めたが、各々のチームが独自に検査したかは定かではない。総括会見での日本選手団の山崎一彦監督の「鎖国状態」発言とは、日本では消毒、マスク着用や距離を保つことは当たり前となっていることからと推測される。アメリカでは、大きな制限はなく、クラスターが発生するまでは、日本人スタッフや選手もマスクなしで選手村を歩いている姿が多く見受けられた。野外でマスクの着用がほとんど見受けられない中、飛行機内、バス内、招集所等の人が密集する箇所でのみマスク着用を義務化したことから、アメリカでは感染そのものよりもクラスター対策をすることで、COVID-19 と共存することを重視しているように感じた。日本国内でも公園などの野外では原則マスク不要とするなど、共存のために仕分けがされているが、マナーや人目を気にする人、感染が心配な人などは、マスクを着用し続けている。アメリカと日本の対策方法には、それぞれメリットとデメリットがあるが、今回の 2022 年オレゴン世界陸上では、日本が行っている感染対策のデメリットが目立つ形となった。

D-5

アニメ聖地巡礼による社会問題の解決 ～大洗の成功例より～

○西村 優斗^{*1}

^{*1} 日本ウェルネススポーツ大学

キーワード: 地方創生、地域コミュニティ、少子高齢化

【目的】

日本の社会問題の原因として若者の無気力が挙げられがちであるが、時代を逆行するかの様に精力的な活動をしている集団が居る。俗に言う[オタク]と呼ばれる者達であるが、古く間違ったイメージから偏見を持っている者が居るのも事実である。

私は個人活動や同人活動オタク文化にこそ社会問題を解決する要因があると考えており、その中でもアニメ聖地巡礼は自身も含めて大きな影響を与えていると考えた為、テーマとして選んだ。※アニメ聖地巡礼とはアニメに登場した現実の場所を実際に訪れることである。

【方法】

今回アニメ聖地巡礼で解決できる問題として、1.地方創生・経済効果 2.対人、交友関係・地域コミュニティ 3.少子高齢化を選んだ。

調査方法として、アニメ聖地巡礼で1番の成功例と言われている大洗町を舞台としたアニメのガールズ&パンツァー (ガルパン)の事例を中心にアニメ聖地巡礼に関わる40名から聞き取りを実施。それに加えてガルパン初回放送からの10年分の公式発表の他に、聖地巡礼が始まったとされる30年前から現在にかけての記録の読み取り調査を行った。

【結果・考察】

1.地方創生・経済効果

アニメの聖地は有名な観光地ではなく、あまり観光などで行く人が多くない地域や現在では廃れてしまった地域が選ばれるのは珍しい話ではない。アニメの中に実在の場所が登場する理由として、実在の場所を登場させて物語の現実性の解像度を上げるという場合が多いからだ。その結果、地元の住民からすると、普段から当たり前存在している日常の一角が観光資源となるのである。

また、ガルパンに関しては大洗を聖地として選んだ理由が別にある。バンダイビジュアルの杉山潔氏が、自身が幼少期から家族で訪れていた大洗町が東日本大震災の被害を受けて観光客が減り商店街の危機が迫っていた時に町へガルパンの話を持ち掛けたのが始まりである。作中で街中をほぼ完全再現した結果大洗町の観光客は増え、2011年は300万人に満たなかった観光客数は2016年には450万人を超え、緊急事態宣言等により観光客が全国的に減った2021年ですら280万人で持ちこたえた。

2021年の茨城の入込客数が唯一大洗よりも多かった阿見町は2021年に大流行したウマ娘

プリティーダービー(ウマ娘)の聖地でありウマ娘は実在する歴代の競走馬を擬人化した作品であるという性質上、幅広い世代にて愛される作品であることが巡礼者の多さの一つだろう。これらを見ても聖地巡礼という文化が観光資源としていかに大きいかは明白だ。

2. 対人、交友関係・地域コミュニティ

人との繋がりが薄く、地域の祭りも開催できないと問題になっている現代だが、聖地巡礼は交友関係を広げ、対人スキルを得る場にもなっていると考えている。大洗ではお店の中でファン同士の話が店員を巻き込みながら発生するのは日常風景であり18歳の男性は、「中学生の頃から大洗や他の聖地で幅広い年齢層の方と知り合い、そこから繋がった事で年上の人や初対面の方と話すのに抵抗が無くなった」と答えた。

また地元住民と繋がりを持った結果、店の手伝いや移住、就職へ繋がった者も居る。大洗で運送業をしている男性は、「最初はガルパンで訪れていた大洗だが、地元の方と交流をしている内に町自体が好きになってしまい移住を決意した。移住後も地元はとても親切で、大洗を第二の故郷として考えている。」と答えた。この様に、若い労働者が地方で活躍できる場をきっかけ作りも聖地巡礼は生み出した。

大洗以外の事例として石川県の湯桶温泉では、花咲くいろはの作品内で登場した現実では存在しない[ぼんぼり祭り]を再現し開催した結果、2021年時点で10回を迎える祭りとなった。また、ぼんぼり祭りは地元住民が多く参加しているのが特徴で、聖地化から生まれた文化の土着化の好例と言える。他にも全国に土着化したアニメ文化は存在し、新しい形の地域コミュニティをつくる要因になると考えている。

3. 少子高齢化

2021年未婚率が男性28.3%女性17.8%である現代においてオタク同士の交際や結婚は珍しい話ではない。ガルパンの10周年を記念して放送された番組のファンの投書コーナーではファン同士の結婚が多数報告され、ガルパンをきっかけとした結婚をガルパン婚と呼びTwitterでトレンド入りする騒ぎとなった。

また、アイドルマスター(アイマス)のファンはライブの会場を聖地化しており、ライブ開催当日に会場周辺で名刺交換を行うのが文化となっている。基本的にはファン同士の交友関係を広げる場なのだが、交流していく内に交際する場合もありP婚と呼ばれている。実際にP婚をした女性は「同じ趣味でイベントの予定も一致しているから趣味と私生活双方が上手くいやすい」と答えた。

【まとめ】

今回はオタクではなくとも比較的にライトに楽しめるアニメ聖地巡礼の文化についての調査を行った。地方創生・経済効果、対人、交友関係・地域コミュニティ、少子高齢化の3つの観点から見ても聖地巡礼が社会問題の解決に寄与していることが明らかになった。私は同人活動やイベント主催を通して更に素晴らしさを伝える活動を継続したいと考えている。

第9回 学術大会 役員・スタッフ

理事長：柴岡 三千夫（日本ウェルネススポーツ大学 学長）

大会長：柴岡 信一郎（日本ウェルネススポーツ大学 副学長）

組織・実行委員会：組織委員長 大津 一義（日本ウェルネススポーツ大学）
実行委員長 藺部 正人（日本ウェルネススポーツ大学）
事務局長 鳥居 哲夫（日本ウェルネススポーツ大学）
講演集編集委員長 横山 典子（日本ウェルネススポーツ大学）

委員：

武井 克時（日本ウェルネススポーツ大学）

上原 章夫（日本ウェルネススポーツ大学）

渋井 二三男（日本ウェルネススポーツ大学）

鈴木 勝彦（日本ウェルネススポーツ大学）

近藤 卓（日本ウェルネススポーツ大学）

鈴木 隆広（日本ウェルネススポーツ大学）

角田 弘子（日本ウェルネススポーツ大学）

工藤 美知尋（日本ウェルネススポーツ大学）

橋本 純一（日本ウェルネススポーツ大学）

富川 力道（日本ウェルネススポーツ大学）

岩田 忠久（日本ウェルネススポーツ大学）

平山 実（日本ウェルネススポーツ大学）

坂本 希望（日本ウェルネススポーツ大学）

依田 壽（日本ウェルネススポーツ大学）

中根 和章（日本ウェルネススポーツ大学）

中宿 晃（日本ウェルネススポーツ大学東京）

杉町 マハウ（日本ウェルネススポーツ大学東京）

本間 一輝（日本ウェルネススポーツ大学東京）

伊藤 剛之（日本ウェルネススポーツ大学東京）

武内 正史（日本ウェルネススポーツ大学東京）

木元 翔一（日本ウェルネススポーツ大学東京）

木村 一（日本ウェルネス高等学校 東京校）

川瀬 明子（日本ウェルネス高等学校）

温井 一裕（日本ウェルネス高等学校 神保町キャンパス）

増澤 将江（日本ウェルネス保育専門学校）

カトリ ラゼス（日本ウェルネス保育専門学校）

上原 一太郎（日本幼少年体育協会）

（敬称略、順不同）

一般社団法人 日本健康・スポーツ教育学会 第9回 学術大会 講演集

発行 行: 令和5年2月26日

発行責任者: 柴岡 三千夫

編集責任者: 大津 一義

委員長: 横山 典子

委員: 藺部 正人、鳥居 哲夫、上原 章夫、赤尾 育愛

発行所: 一般社団法人日本健康・スポーツ教育学会 第9回学術大会 事務局

〒179-0071 東京都練馬区旭町 3-23-22

日本ウェルネススポーツ大学東京 内

TEL: 03-3938-2372 FAX: 03-3938-9435

E-mail: info@jhse.jp 公式 HP: <http://www.jhse.jp/>

印刷所: 株式会社ハセガワ

〒111-0041 東京都台東区元浅草 4-7-8

TEL/FAX 03-6802-8758